
仮面ライダーBlackRx ～ジュエルシード編～

隆之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーBlackRx 〜ジュエルシード編〜

【Nコード】

N1568R

【作者名】

隆之介

【あらすじ】

仮面ライダーBlackRxと魔法少女たちの邂逅、そして始まるジュエルシードを巡る闘い。

三つ巴の争奪戦にデルザー魔人の影が忍び寄る時、次元を越えた闘いの火蓋が切って落とされる。

勝利するのは仮面ライダーか魔法少女か、それとも…

「…魔法少女たちの闘い、始まります！」

追記

この作品のに対して

「原作との乖離が激しく、内容が不快である。」

との感想がよせられました。

この作品が許容出来なさそうな方は目を通されない事をお薦めします。

第1話

R Xとジュエルシードの邂逅（前）

趣味と思い付きで書き始めました。

ライダーかなり強めなのでなのはファンはちときついかも。

第1話

R xとジュエルシードの邂逅

第1話

R xとジュエルシードの邂逅

海鳴市、太平洋に面しまだ夏の残滓が色濃く残る街の早朝の海沿いの道を一台のオートバイが疾走する。

マシンを駆る青年の名は南光太郎、仮面ライダーBlack Rxと言っもう一つの名と闘うための姿を持つ青年である。

今回彼は愛車ライドロンが捉えた空間の歪みについての調査の為海鳴市を訪れた。

歪み自体は小さく生じた時間も短いものだったが、空間転移技術を持つ組織やクライシス帝国のような異次元侵略者の可能性がある以上捨て置くことは出来ない。

戦闘を考慮して専用バイクアクロバッターを一般車に偽装し、先輩ライダーから小型の調査機材を借り受け本郷猛名義のセーフハウスへと向かっているのだ。

目的のマンションに着いたときはそろそろ通勤通学の時間帯でマンションから出る人は多くても、戻る人は少ない。

だから目的の部屋の隣の部屋に二人の少女が入ろうとしているのを見て少し気になった。

その二人が明らかに外国人であることも関係しているだろう。

目があったので会釈をし短期間だが滞在する旨を伝える。

姉妹なのか、少し戸惑ったように挨拶する年少の娘を庇うように年

長の娘が前に出て挨拶したあとそそくさと部屋に入っていた。
部屋に入り機材のセッティングをしながら、光太郎は先程の姉妹に
ひっかかりを感じていた。

姉の髪はオレンジに近い赤毛だが妹の方は明るい金髪、あからさま
に血縁を感じさせない。

さらに妹を庇った姉にはこちらへの殺気が有った。

意識して放ったというより抑え方を知らないのだろう。

そして妹の瞳が紅かったこと。

遺伝上ありえない色。

髪は金髪だったからアルビノではないはず。

「何かしらの事情が有るんだろうな……」

意識を切り替えてセッティングに集中した光太郎は昼すぎにはセン
サー端末を持ってマンションを後にした。

街の西側にある丘陵地帯に登りセンサーの反応を見るが今のところ
反応無し。

この後街中で同様の調査を行い一月以内に結果が出なければ、数台
のセンサーを据付けて引き上げることとなる。

「何も起きないのが一番だけど、毎日これを繰り返すのはちょっと
しんどいなあ……」

早くもルーチンワークの予想にうんざりする光太郎であった。

町外れの山近くまで来た所で遊歩道のベンチに腰掛け一息入れる。

「いい天気だなあ…」

ペットボトルのお茶を飲みながら空を眺めていた光太郎の耳に電子音が響いた。

さっきまでだらけていた表情が引き締まり、センサーで反応位置を確認するとマシンのアクセルを開いて一気にダッシュさせるとそのまま山道を駆け上がったいく。

「別に律儀に反応しなくてもいいのに。」

車両の通行止めでマシンを降り愚痴をこぼしながら山道を駆ける。明らかに常人離れたスピードで目的地に駆けつけた光太郎が視たものは、体高2mはあろうかという

「いつ犬?!」

明らかに尋常な存在ではない巨大な怪物であった。

怪物は光太郎を睨み付けると唸り声とともににじり寄ってくる。身構えつつもセンサーの反応が怪物から出ている事を確認する。

こいつが空間の歪みを起こした張本人なのか？
まだ即断するのは早いかな？

そう思った瞬間、僅かな意識のズレが隙を作ったのか怪物に飛び掛かれる。

カウンターで蹴りをぶちこみ立ち木に叩きつけるが、さしたるダメージは与えられず、その後数回の攻防でも、常人ならば一撃で即死させる光太郎の攻撃を受けても怪物に変化は見られなかった。

こいつ実体じゃない？

手応えはあっても、生物としての反応が無いことから光太郎は切り札を切る決断をする。

「変身！」

右手の掌を天に、左拳を腰に。

顔前で右に払った手を腰に、左手は拳を作って肩の前に。
そして光太郎は太陽の輝きを放った。

現れるのは、黒と濃緑の鎧に身を固めた異形の戦士。

―仮面ライダーBlackRx―

飛蝗を象った姿にも怪物は怯むことなく、牙を突き立てんと襲いかかるがRxの反応速度とパワーは先程とは比べ物にならないほどに跳ね上がっている。

容易くカウンターのパンチが怪物の頭部を捉え10m以上先まで吹っ飛ばした。

しかし、粉々になった頭部から血の一滴も流れずあまつさえビデオの逆再生の様に頭部が再生、再びRxに牙を剥く。

飛び掛かってきた怪物のあぎとを右手で受け止め、左のボディアッパ―で動きを止める。

そのまま怪物を頭上に掲げ上げ

―本郷先輩、技を借ります！―

頭上の怪物を風車の如く回転させ上空高く放逐する。

「ライダーきりもみシュートー!!」

30mは打ち上げられただろうか。

回転が止まり落下する怪物に空中での移動能力は無いらしい。

真下で待ちかまえるR×は右拳を紅く赤熱させ必殺技の体勢に入る。

「R×パンチ！！」

真下から胴体真ん中に拳がめり込み、太陽エネルギーとキングストーンエネルギーの組み合わせた「ハイブリッドエネルギー」が怪物の体内に注ぎ込まれる。

次の瞬間、怪物の身体は爆散消滅した。

肉片一つ残さず溶けるように消え去り、残されたのは気を失った犬と拳大の碧い宝玉。

「?!なんだ!!この石からとてつもないエネルギーを感じる!!」

さらにそのエネルギーが不安定であることに石を拾い上げてから気づくR×。

このままではいずれ爆発する?

それとも先程のような怪物を再び生み出すのか?

僅かな逡巡の後意を決したR×は、宝玉を握った拳を頭上にかざし体内のエネルギーを宝玉のエネルギーと同調させる。

「キングストーンフラッシュ!!」

全ライダー中R×のみが可能な多目的エネルギー放出能力、攻撃の

みならずバリエーや状態異常の解除にも使えR xの数多の危機を切り抜ける源となった能力だ。

今回の目的は宝玉のエネルギーの放出だ。

同調させたハイブリットエネルギーをガイドにして、エネルギーの流れを作り無駄な刺激を与えず宝玉のエネルギーを空へと放つ。

その時、地から天に昇る雷の如き光景が海鳴市の住民の多くに目撃され暫くの間話題の的となった。

長くはないが一瞬ではすまないエネルギーの放出にR xは疲労し膝をついた。

「…とんでもない量のエネルギーだ…。」

かつてない疲労を覚えたが休んではいられない。

人目に付く前にこの場を離れなければならない。

先程の怪現象に興味を持った人が此処にやって来る前に。

仮面ライダーの闘いは闇の中で行われるものなのだから。

そしてこの宝玉の解析もしくは破壊を行わなければならない。

かつてない疲労と焦りからR xは周囲の警戒を忘れていた。

だからセンサーである額の触覚とOシグナルの警告に反応が遅れた。

「…デイベインバスター……！」

後ろから襲い来るエネルギーの奔流に為す術なく飲み込まれていった。

第1話

R Xとジュエルシードの邂逅（後

次回からなのは登場です。

第2話 白い魔法少女と仮面ライダーの邂逅（前書き）

魔法少女と仮面ライダーのファーストコンタクト。

第2話 白い魔法少女と仮面ライダーの邂逅

魔法少女とそのパートナーは驚愕に目を見開いていた。

ジュエルシード憑依体。

自分たちが苦戦した存在が目前でバツタ人間とでも言っべき怪物に容易く打ち倒された。

しかも、あの怪物は何の魔法も使っていない。

己が身体能力のみで憑依体を圧倒する存在。

自分たちのアイデンティティーを打ち砕く存在。

二人はソレに恐怖した。

だから撃てと言った。

「なのは、いまだ!!」

だから撃った。

「…デイベインバスター!!」

二人の目の前で、怪物の背中が桜色の魔力光に飲み込まれて消えた。

第2話

白い魔法少女と仮面ライダーの邂逅

高町なのはは目前の光景に膝の力が抜けて行くのを止める事ができなかった。

焼け焦げ、抉られた大地が目前に広がっていた。

明らかな「殺傷設定」

相手を殺すための魔法を放ってしまった。

怪物の力に恐怖した彼女は無意識のうちに「殺意」を抱き、それを察したレイジングハートが「非殺傷設定」を解除したのだ。

正式な訓練を受け、無意識領域の把握も可能な魔導士ならばあり得ない失態である。

レイジングハートの判断も問題であるが、元タインテリジェントデバイスとは所有者の行動をサポート、アドバイスするためのものであり所有者の目的達成と生命保護が最優先される。

したがって、レイジングハートに目前の怪物を殺傷するのを躊躇う理由はない。

（以前ユーノ・スクライアが目前で殺されそうに成ったが助けようとしなかったのは、彼が自分の契約者でなかったからである。）

つまるところ、目前の光景は

「自分は追い詰められると容易く他者を害する人間である」

という証拠なのだ。

9才の子供に突きつけるには重すぎる現実。

不幸なことに彼女はそれを理解できるほどには聡い子供であった。

なのはは自分の行為に恐怖した。

彼女の肩に乗っているフレット・ユーノも後悔の念に苛まれていた。

怪物の力に恐怖して、なのはに

「撃て（殺せ）！！」
と言ってしまった。

魔導士の先達として有ってはならない失態だった。

「…なのは、ジュエルシードを回収しよう。」

そう促しながら、

「この回収が終わったら、彼女の前から姿を消そう。」

そう考えていた。

のしかかる精神の疲労に喘ぎつつ、ジュエルシードを探す二人の目に信じられない光景が映った。

焼け焦げた大地からあの怪物が立ち上がったのだ。

その腕の中に抱え込んでいた何か、憑依体から解放された犬を放しながら。

『デイベインバスターから庇った？
て言うか、忘れてた！？

」

立ち上がった怪物の背中には焼け焦げていたが、瞬く間に回復していき黒い艶光りを取り戻す。

ダメージを感じさせない動きでなのは達に向き直りその赤い複眼がなのはたちを視界に捉えた。

瞬間、二人の口腔内が干上がった。

「こ、殺される！
あれを食らって平気な奴に勝てるわけがない！！」

絶望にへたりこむ二人の前に歩み寄った怪物は、軽く覗きこむように体をかたむけて

「子供が武器を持つんじゃない！！」

そう怒鳴り付けてレイジングハートを取り上げた。

「……………へ？……………」

「……………はあ？……………」

怪物が言葉を発したこと、さらにその内容に二人は何とも間抜けな反応を返す。

「返事は！！」

「「は、はい！！」」

「そして、悪いことをしたら！？」

「「う、ごめんなさい！！」」

間抜けなやり取りをしていると自覚しつつも、自分たちの取り返しのつかない過ちがうやむやになっていくのを感じ、二人は安堵しつつも己が身勝手に嫌悪感を感じていた。

しばし両者の間に沈黙が落ちる。

のちに怪物は顎を掻くような仕草をしてからなのはに声をかけた。

「……君は自分が何をしたのか分かっているのかい」

穏やかな怪物の問いかけになのはの肩がピクリと震え

「「う、ごめんなさい……」

「ご……めん……な……さい……」

謝罪の言葉を繰り返しながら、しゃくりあげはじめた。

年相応の子供のように涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにして謝り続け

るなのはの様子を見下ろす怪物の無表情な顔に、ユーノは困惑を見たような気がした。

人目を避けて林の中に移動した一堂は、なのはが落ち着くのを待つて互いの情報を交換し、

頭を抱えていた。

『人間ベースの戦闘用改造体？
魔法技術が存在しない世界で？
生体質量兵器じゃないか！！』

『かめんらいだー？
聞いたことないの？』

『…異世界はまあいい。
フレットがしゃべるのもそういう知的生命体とゆうことで理解できる。魔法は……ゴルゴムの三神官やクライシスの怪魔妖族がそれらしい能力を使っていたから…アリなんだろう。
最初はどこかの組織の少年兵士かと思ったが、あの様子ではそれはない。』

それよりも『魔法使い』と言われる方がまだマシだ。
それよりも問題はジュエルシードだ。お伽嚙の『猿の手』そのものじゃないか！？』

三人の間に形容し難い空気が流れる。

「……あの…頼みたいことがあります。」

それを破ったのはユーノであった。

R xが思っていたより理性的であること、さらにその戦闘能力の高さを見込んでジュエルシード回収への協力を要請する。

無論、今回の失敗を反省しなのは危険から遠避ける事もその目的であるがそれについては口にしない。

口にしたら、R xには

「なのはの代わりに危険な目にあってくれ。」

と言うことになり、なのはに対しては、

「R xの方が強いから君はもういらない。」

と取られかねないからである。

R xの回答は

「悪いが君たちに協力することはできない。」

即答であった。

「何故ですか？ 報酬なら必ず…」

「いや、そう言う事ではなく君たちはもうこの件には関わらない方

がいい。

子供の手には余る事態だ。」

「でも僕にはジュエルシードを発掘した責任が…。」

「責任感があるのは良いことだがもはや君の手には負えないだろう。」

「

ユーノは食い下がるがR×は取りつく島もない。

「わたしからもお願いします。

一緒にジュエルシードを探してください。」

「なのはちゃんだったかな？

君こそ何の責任も無いだろう。

君が危険に関わる必要は無いよ。」

なのはの請願も正論でバツサリ切り捨てる。

「でも、それじゃあジュエルシードが放置されたままに…」

焦るユーノに

「後は俺が処理するから心配しないでいい。」

R×の言葉に目を丸くする二人。

「元々俺はジュエルシードが出現した際の反応を追ってきたんだ。ならばそのまま回収をしても問題無いよ。

憑依体もあの程度なら楽勝だし。」

最後に聞き捨てならないことを言われたような気がしたが、ユーノは論破すべき点を見つけて語勢を強める。

「ふ、封印!!」

封印はどうするんですか!?

貴方がいくら強くても魔力が無い以上ジュエルシードを封印することとは出来ない!!」

「封印とやらは出来ないがエネルギーを全て放出させて無害化することは出来るよ。」

そう言つて、右手に持っていたもはや単なる蒼い宝玉と化したジュエルシードを見せる。

先刻の謎の行動の意味を理解し驚愕の余り思考がフリーズしたユーノと、自分が事態の中心から急速に離れて行くことに焦りを感じているなのはにR xは

「さあ、この話はもうお仕舞い。

日も傾いてきた、もう家に帰りなさい。」

そう言つて背を向けた。

ちなみに、ジュエルシードは持つて帰るつもりだ。

「ま、待つて! まだ話が…」

そう声を掛けるユーノを遮つて、R xが声を掛ける。

「なのはちゃん…」

「…はい…」

おそろおそろなのはが声を返す。

「俺を撃った事は気にしなくていいから。
ちゃんと謝ってくれたからね。」

そう言つて林の向こうにR×は姿を消した。

残された二人はひどく疲れた顔をして

「……帰ろうか?…」

「……そうだね……」

トボトボと山道を下りはじめた。

街外れの山まで来ていたことと、精神的疲労で魔法で空を飛ぶ気にならなかつたため帰りが遅くなり、なのはが母親に怒られた事が彼女の本日最後のアクシデントであった。

第2話 白い魔法少女と仮面ライダーの邂逅（後書き）

次回、フェイト登場。

第3話 黒い魔法少女と仮面ライダーの邂逅（前書き）

今度はフェイトとアルフの主従とR×のファーストコンタクトです。

第3話 黒い魔法少女と仮面ライダーの邂逅

路地裏に漂う血臭。

空を舞う異形。

少女の目前で繰り広げられるのは異形同士の魔戦。

されど少女もまた魔の力を担う者。

魔の宝玉を求めて魔戦へと挑む。

第3話

黒い魔法少女と仮面ライダーの邂逅

フエイトⅡ テスタロッサは ジュエルシードを探して海鳴市を彷徨していた。

母プレシアⅡ テスタロッサの命を受けて異世界よりこの地に来訪して既に10日以上経過するが、いまだにジュエルシードを入手できていない。

魔力やジュエルシードの発動を感知してその場に駆けつけても、既に何者かが持ち去った後と言うことが続いているのだ。

今日も魔力反応を頼りに、ジュエルシードを探して街中を認識阻害魔法（光の波長や音の反響を操り己れを見た人間が見たことに気づけ無くする魔法、カメラ等には無効）をかけて午前中から探索を続

けているが未だ手応えはない。

3時過ぎ頃に少し寂れた街外れまでやってきて、道端の自販機でジュースを買って座り込む。

「……どうしよう。」

まだ1つも見つからない……」

溜め息をついて空を仰ぐ。晴れ渡った青空がかえって気分を落ち込ませる。

「アルフ、そっちはどう？」

己のが使い魔に念話（遠距離通話魔法）で現状を確認するも何処まで行ったのか念話が届かない。

「……おやつ食べてて気づいてないのかも？」

少々粗忽なところのある使い魔のやりそうなことを思い浮かべて苦笑すると少し気分が明るくなった。

そつゆうところも含めて、自分を支えてくれる良い使い魔だと思う。

気分が切り替わったところで伸びをして立ち上がり、空き缶をゴミ箱に捨ててから探索を再開する。

認識阻害魔法を再起動し、ついで魔力反応を感知するための探索魔法を起動させる。

彼女の使う魔法はコンピュータプログラムに近い構成をしており、

魔力を動力としてレーダーやソナーを動かすような感じが強い。

探査能力は正確だが、反応が無ければそこまででしかない。

ダウジングのように徐々に近づいて行けるわけではない、だから

「……！反応あり！！」

このように突然感知することもあり得るのだ。

フェイトは反応のあった方角へと駆け出した。

感知した場所はいくつかの廃ビルやシャッターの降りた商店が並ぶ小さなゴーストタウンとも言うべき地区だった。

再開発で人が移住して行きその後の開発計画が不況による予算見直しでストップされてそのまま放置されている地区である。

夜ともなれば暴走族等の溜まり場になるような場所だが今はまだ人気がない。

「……うん。……こっち。」

見当をつけた方向には廃ビルがあった。

中に入ろうとして傍らに停車してあるバイクに気付く。

「！。……もう誰か来ている？」

関係の無い一般人なのか、それともジュエルシードを回収していた

謎の人物なのか？ 警戒しつつ廃ビルに侵入する。

「……………？…これって…血の匂い？」

漂ってきた異臭に怪我人を予想し脚を速める。

「…アルフ、気づいて！」

使い魔に念話を跳ばし救援を求めつつ匂いの源を探し階を重ねていく。

そして最上階の手前で何かが争い合う物音に気づいた。

あわてて認識阻害魔法が稼働していることを確認してフェイトは最上階に脚を踏み入れる。

そしてフェイトは目前の異形の闘いに息を飲んだ。

~~~~~

四方八方から襲い来る50？はある巨大蜂を広角視界でもあるマクロアイでとらえ、R×は冷静に手刀で叩き落とす。

目前には腹部を巨大な蜂の巣と融合させた女王蜂が壁際に鎮座している。

おそらくスズメバチの群れがジュエルシードの憑依体となったもので、反応を追って光太郎がやって来た時点で既に野良犬や野良猫を襲い幼虫の餌として肉団子にしていた。

周囲にはその残骸や血液が散乱しており異臭を放っている。

幸い人間のものと思われるものは無かったがこのままでは時間の問題だろう。

即行で駆逐を決断した光太郎はR×に変身し戦闘を開始した。

無数の兵隊蜂が全方位から襲いかかり、巣に接近すれば巣の外郭が開き六角形構造の内部が露出しその中の幼虫たちが消化液を吐きかけてくる。

それまでの攻防で、この敵にそれ以上の攻撃手段と本体の移動能力が無いことを確認したR×は反撃…否、一気に殲滅にかかった。

「キングストーンフラッシュー!!」

エネルギー放射により飛来する兵隊蜂を一掃、女王蜂と巣にもダメージを与えるとダメージにより女王蜂が混乱、巣も外郭を閉じて守りに入った。

ここで一気に跳躍、巣のど真ん中に赤熱した右拳を叩き込みハイブリッドエネルギーを流し込む。

「R×パンチー!!」

一気に炎上するかのように女王蜂と巣は光の粒子となって消滅した。

残されたのは砕けたスズメバチの巣とエネルギーに耐えられず死に絶えたスズメバチの群れ、そして床に転がるジュエルシードであった。

「……すまない……」

罪悪感を感じつつも、ジュエルシードを回収しようと手を伸ばす。

次の瞬間予想通りに背後から飛来する攻撃を振り向きざまに手刀で叩き落とした。

「隠れているのは気づいていた。貴様もジュエルシードが目的か？」

押し殺した威圧感タツブリの声で問いかける。

R×否、仮面ライダー達の感覚器官は改造人間の中でも群を抜いて秀でている。

彼らからすると、「感覚に反応がない」という反応を捉えてしまうのだ。

無駄を悟ったのか隠蔽能力を解除し相手が姿を現した。

その姿を見てR×はどつと疲労を感じて片手で顔を覆いつぶやいた。

「…かんべんしてくれ…  
また魔法少女なのか？…」

R×の前には金髪の少女が黒い衣装とマントを纏い、そして雷光の刃の死神の大鎌を持って立っていた。

~~~~~

ジュエルシード憑依体と闘う異形の姿を見てフェイトは混乱していた。

「…この世界に二本足の虫は居なかったハズだけど？……魔力反応がないからバリアジャケツトのはずもないし？……？」

考えているうちに憑依体は異形に倒されてしまい、露出したジュエルシードに異形が手を伸ばしているところだった。

「…？あつ！だめっ！！」

反射的に遠距離斬撃魔法アークセイバーを放ち、ついで高速移動魔法ブリッツアクションを起動。アークセイバーを喰らって相手の動きが止まった隙に高速移動でジュエルシードを回収するつもりだったが

「？うそっ！？」

魔法の刃は異形の手で打ち落とされた。

さらに異形は自分の存在を看破していると言葉を発した。

戦闘経験豊富な者ならば、さらなる攪乱を行ってから再度隠蔽を行っただろうがフェイトにそれほどの経験も狡猾さも無い。

言葉が通じる相手ならと姿を現してしまった。

自分たちを先回りしてジュエルシードを回収していた相手なのかとの興味もあった。

「そのジュエルシードをこっちに渡して。
それを魔力の無いあなたが手に入れても無意味だ。」

「……つまり、きみが魔法少女なのは間違いないと…」

疲れたような声で答えてうなだれる異形。

想定外の反応に戸惑いつつも威嚇のための魔力弾を周囲に複数浮かべ

「…早くして。」

無駄な戦闘はしたくない。」

「君こそこれをどうするつもりなんだ。」

「……答える必要が無い。」

フェイトはこれから互いの間に緊張感が張り詰めていくものと思っていたが、相手の異形は肩を落として溜め息をつくようなしぐさをした。

『バカにされた!!』

感情が沸点に近づき、つられてコントロールが甘くなった魔力が漏れだし周囲の魔力弾がバチバチと雷光を纏う。

「…これが最後、ジュエルシールドは諦めて。」

「……危険な物を君のような子供が集めている。」

そしてその理由も説明しない。 こちらが譲る理由が無いよ…。

「

これで決まり、フェイトはいまだ戦意らしきものを見せない異形に先制攻撃をかける。

周囲の魔力弾が一勢に異形に襲いかかる。
一気に倒し拘束してジュールシードを回収し情報を吐かせるつもりなのだ。

異形の反応は迅速である。先ほどと同じく手刀を振るい魔力弾を打ち落とそうとする。

『かかった!!』

内心で快哉を叫ぶフェイト。

彼女には魔力変換体質という特性から、攻撃魔法に電気を纏わせる
…否、魔力を電気に変換することができる。

この魔力弾も高電圧を内包したものである。異形が魔力弾に手を出した時点で詰み…の筈であった。

「ウソ!? 何で!？」

全ての魔力弾は異形の両手で打ち落とされていた。

フェイトは知らない。

異形―R xは宇宙空間で誕生し、故に宇宙での活動に対応した肉体と能力を持つ、即ち高い気密性と耐熱性そして絶縁性。

R xに生半可な電撃は通用しない。

理由は不明だが電撃が通用しない相手と判断し、フェイトは死神の鎌、デバイスⅡバルディッシュサイズモードで斬りかかった。

しかし、R xは至極アツサリとバルディッシュの柄を右手で受け止

め左手でフェイトの右肩を掴む。フェイトの周囲には防御領域魔法「フィールド」が張り巡らしてあり、R×の手が直接触れているわけではない。

違和感を感じ逃すまいと少し手に力を入れると、フェイトの体は身動きとれなくなった。

「は、離せっ！！」

「危害を加える気はない。そちらの事情を聞きたいだけ……」

「フェイトを離せーっ！！」

後ろから殴り掛かってきた相手の拳を見えていたかのように回避しつつ、たたらを踏んだ相手にフェイトの体を軽く押しやる。

フェイトを受け止めた相手はキツい視線でR×を睨みつける。

オレンジに近い赤毛の10代半ばと見える少女で、ヘソだしの上着にショートパンツとなぜか黒いマントを纏っていた。フェイトを後ろに庇って立つ姿にR×は何故か既視感を覚えた。

念話に気づき駆けつけた『使い魔』アルフの背後からの攻撃。

これを回避した一連の動きからフェイトはR×が視覚以外の感覚でも周囲の情報を得て行動していることに気づき、アルフに念話で指示を出しコンビネーション攻撃の指示を出す。

アルフの格闘戦と自分の魔法による攻撃ならば……。

その考えは数分で覆される。

アルフの攻撃はほとんど捌かれたまに当たってもR×の外骨格装甲（R×フォーム）で弾かれる。

格闘が脅威足り得ないと、魔法攻撃のフェイントにならない。

拘束魔法「バインド」はたまに当たってもR×の異常な怪力で引きちぎられてしまい魔力の無駄使いにしかならない。

あっという間のじり貧状態であつた。

『もうやだ！！ コイツ何なの！！』

何度目かの格闘を捌ききられ反撃のパンチを障壁魔法「シールドと領域魔法」フィールド、さらにバリアジャケットの影響下にある両腕のクロスガードで受け止めるつつアルフは内心で悲鳴を上げる。
シールドとフィールドがあっさりと砕け、バリアジャケットもパーシ寸前となる。

幸い両腕は痺れただけで済んだ。

見ると、フェイトが捕まってこちらへと放られてくる。

それを所謂「お姫様だっこ」で受け止める。

『フェイトコイツには勝てないよ。 怪我しないうちに逃げよう。』

念話で語りかけるも熱くなったフェイトは

『ダメッ！！』

と短く返すだけ。

嘆息し

『でもさっきから何度やっても… 次こそ本当に怪我して…
…?』

ふと自分の言っている事に違和感を覚えるアルフ。

……怪我？ 自分は何回コイツのパンチを食らった？どこか痛いところがあるか？

シールドで止めた？

軽く叩き割られているのに？

アタシより防御の薄いフェイトも怪我してないよ？

手加減してる？ 何で？

なぶり殺し？ だから怪我してないって。

思考の末至る結論。

『コイツ…ひよつとしていいやつ？ アタシらに怪我させないようにしてる？』

結論は意外な所にあつた。

実際R×は持久戦に持ち込んだの相手のギブアップかエネルギー（魔力とは咄嗟に思い付いていない）切れを狙っていた。

幸いこのあたりがゴーストタウン化しており騒ぎが人目につくまで時間があると判断したからだ。

『コイツがいいやつなら……』

少々悪辣な作戦を思い付いたアルフは念話でフェイトに伝達、フェイトは内容に一瞬呆気にとられるもおかげで頭がクールダウンし作戦を了承した。

少々のインターバルの後二手にわかれたフェイトとアルフを視界に収めつつR×は両者の中間に立つ。ここなら両者の同時攻撃にも対応できる。

次の瞬間、左側のアルフが防御を捨てたスピードで飛び込んで来た。怪我をさせないように彼女（R xはまだ二人の名前を知らない）の持っているバリアを破る程度の力で拳を振るう。

そして先ほどより軽い手応えと共にアルフが後ろに吹っ飛んだ。そのまま床に落ち3・4回転がってうつ伏せになって起きてこない。

『マズイ！！　もうエネルギー切れか！？　それとも自棄になつての特攻か！？』

あわてて駆け寄るR xの前でムクリと起き上がったアルフは床にぺたんと座り込んでR xを指差し

「本気でなくつたあああゝ！！」

涙目で絶叫した。

「えっ？　ええ！？」

想定外の反応に慌てるR xの前でアルフは子供のように泣きわめく。

「女の子本気でなくつたあああ！！」

さらにR xの思考は混乱し…怪我したのならバイオリダーにチェンジして治療を…などと考える。

次の瞬間背後で光を放した何かに気付く。振り替えるとジュエルシードを回収したフェイトが足元で輝く幾何学模様ゝ魔方陣に沈みこんで行くところだった。

二人にかまけてジュエルシードの事を失念していた事に気づいて急いでそちらに移動しようとしたR×の背中を思いつきり突飛ばし（なるべく遠くへ飛ばしただけで痛くはしてないつもり）アルフも転送魔法の魔方陣を起動させる。

「アハハッ♪引つ掛かったあんたイヤッだ♪♪
それじゃね♪♪」

R×を出し抜いたのがよほど嬉しいのか、魔方陣に沈みこみながら、満面の笑みでR×に両手で投げキッスをするアルフ。

R×がジャンプして魔方陣に飛び込もうとする寸前でアルフの姿は魔方陣に消え去り、魔方陣も消滅した。
残されたR×はガックリとうなだれつぶやく。

「……や、やられた…」

その紅い複眼に、定時報告で風見志郎にしこたま怒られて、一文字隼人と城茂に腹を抱えて笑われる自分の未来が一瞬見えた気がした。

急いで設定したため転移位置が少しずれフェイトとアルフは隠れ家のマンションの床に空中から放り出された。尻から落ちて少々涙目になるも互いの顔を見ると満面の笑みでハイタッチをして声を上げて笑った。

強敵を出し抜いたのがジュエルシードを手に入れた喜びをさらに大きくしているのだ。

「やつと一個目だけど…」

きつとこれから上手いく。」

「ウンウン！ あの子の攻略法、何となく解っちゃったし♪」

「これで母さんに喜んでもらえる…」

「きつとそうだよ!!」

フェイトはこんなに頑張ってるんだから!!」

二人の声は本当に久しぶりに心の底からの明るい声だった。

第3話 黒い魔法少女と仮面ライダーの邂逅（後書き）

次回よりデルザーオリジナルデザイン魔人登場

原作崩壊が始まります。

すでに崩壊している？

まあそうですね…。

第4話 白と黒の邂逅

そして、RXと魔人の邂逅（前書き）

ようやく第4話です。
今回やっと怪人が出ます。

第4話 白と黒の邂逅

そして、R xと魔人の邂逅

高町なのはは激しく後悔していた。

己の考えの甘さからジュエルシードの存在を見逃し発動を許し、巨大な憑依体を出現させてしまい街に大きな被害を出してしまったのだ。

幸い駆けつけたR xの協力を得て憑依体に捕えられた人々は救出でき、ジュエルシードもなのはの手により封印できた。
R xもそれを取り上げる様なことはしなかった。

しかし事情を聞いた彼はなのはに厳しい言葉をかけた。

「死人や怪我人がでたら、どうするつもりだったんだ？」

責任を取って…となのはが口にしかけると

「君も俺も責任なんか取れない。」

と切り捨てた。

「出来ることは、被害者やその家族に恨まれ続ける事だけだよ。」

「！?……………」

「闘うこと…危険に立ち向かうと言うことは、自分の身を危険に曝すだけじゃない。助けようとする人の命をも背負い、助けられなければその罪を一生背負うことになる。」

たとえ誰かに赦されても、自分自身が赦すことの出来ない罪を…。

その覚悟が君にあるのか？あつたとしても、まだ幼い君に正しく理解できているのか？

理解できていれば簡単には責任なんて言葉を口にはできないはずだ。

「

自分の思い違いを指摘されなのはは立ち尽くす。

何か言おうと思っても、頭の芯が痺れ喉の奥がカラカラになって言葉が出ない。

「だから、俺は君にもう関わって欲しくない。」

明確な拒絶の言葉を残して立ち去るR x。

残されたなのはは、言い返せない悔しさと指摘されたことの重さに立ち尽くし声もなく泣き続けた。

第4話

白と黒の邂逅

そして、R xと魔人の邂逅

休日、なのはは友人である月村すずかの自宅へと向かいバスに乗っていた。

所謂お呼ばれというやつで

「新しく増えた猫を見に来ない？」

とすずかに誘われたのだ。

ユーノも連れて来るように言われたのでキャリングケースに入れて…と言うよりユーノがケースを準備してくれと頼むので…連れてき

ている。

車窓の外を眺めるなのは表情は今一つ優れない。

R xに言われた言葉がいまだに重くのしかかっているのだ。

『私はどうしたら良いのかな…。 ジュエルシードの起こす事件からみんなを守りたいのは本当だけど、R xさんの言ったことほど重く考えて無かったのも本当だし…。』

それに、R xさんの方が手馴れている？みたいだし…

R xさんは魔法は使えないけど『違う方法で同じ事が出来る』から、私が無理に魔法でやる理由は無いの……。』

R xが彼女に突きつけたのは、覚悟の違いと魔法が一つの手段でしかないと言う事実。

魔法の力を手に入れて自分が特別な存在になったと思った。

ユーノが言うには自分の持つ魔力量はA A Aクラス、所謂天才的な才能を持っているらしい。

しかし、実戦では才能だけでは役に立たない。

覚えてたての魔法もそうだ。

ジュエルシードの反応を探す探索魔法。

R xは街中に張り巡らせたセンサー（魔力ではなく地磁気や重力の変動を感知する）を代わりにする。

飛行魔法での移動。

R xは空を飛べないが、楽々とビルを飛び越えるジャンプ力と明ら

かに飛行魔法よりスピードが上回るバイクを持っている。

ジュエルシードの封印はR×には出来ないが、ジュエルシードのエネルギーを全て空にしてしまえる。
むしろこちらの方が安全と言える。

（ユーノが「考古学上の価値が…」と空になったジュエルシードを見てつぶやいていたが）

憑依体との戦闘など比べるだけ無駄、R×は接近戦しか出来ないよ
うだが2m程の体格で小さくても軽自動車サイズの憑依体を正面からねじ伏せるパワーを持っている。

彼に今までまともにダメージを負わせた憑依体は存在していない。

明らかに戦闘経験が豊富に有り、前回の樹木型巨大憑依体についても捕まっている人間の存在を予想し先にその救出に動いた。

そのパワーと機動力で次々と捕まっていた人達を助けだし、この時点ではなのはの封印が適切と判断し彼女に封印を任せた。

（それなのにその後には叱責されたので、言われたことは納得しても感情的に不満が残っている）

明らかに自分より適任の人物がいて、その人物が任せると言っている。

何故そんなことをするのか理由がいまいち解らないが彼は

「ジュエルシードが出現したときの反応を調べに来た。」

と言っていた事と、ジュエルシードを無力化するか封印させている事から信用できると思っている。

（少なくともジュエルシードを悪用する気はないと言える）

『…私はどうすれば良いのかな?……』

思考のループに入っただのはをケースの隙間から見上げて、なのは友達彼女を気分転換させてくれることをユーノは願っていた。そのためには待ち受ける悪魔——自分がなにをしても「カワイイ」と言ってもミクチャにしてくる2人のなのはの友達、月村すずかとアリサバニングス。

そして自分を獲物と見ている月村邸の猫たち。キャリングケースは猫たちからの最後の避難場所として準備したものだ。——

にも身を曝し道化になることもいとわない。

やがてバスは目的地に着きそこで降りたなのは少し歩いて月村邸——自宅の敷地内に山を持つ洋風の豪邸——に入る。

月村邸の使用人達に案内され客間に向かうと、すずかとアリサが待っていた。

光の加減で紫色に見える長い黒髪の大人しげなすずかと、金髪ツイテールの印象そのままの明るく勝ち気なアリサはなのはの親友でこのところ何やら落ち込んでいる彼女を励まそうと今回のことを計画したのだ。

「いいですかアリサちゃん？　いつもと同じように接して、無理に聞くようなことは…」

「わかっているわ、すずか。　なのはは頑固だから無理に聞き出そうとしたらかえって口をつぐんじやうから。」

「ええ。　おしゃべりしながら…ね。」

打合せは万全である。

「すずかちゃん、アリサちゃんお招きありがとう。
ユーノくんも連れてきたよ。」

3人が顔を合わせて数分後

「キユ、キユ……??!?!」

ユーノの悲鳴が響いた。

――合掌――

チーン

しばらく後、3人は屋敷裏手の庭のテーブルとチェアでお茶とお菓子（なのはの両親が経営する喫茶店翠屋謹製ケーキの詰め合わせ）を楽しんでいた。

なのはの表情もだいぶ明るくなっている。

ちなみにユーノはなのはの頭の上でぐったりしている。

足元には月村邸で飼われている無数の猫がくつろいでおり、先ほどまでユーノを追い回したのはたちに嗜虐的な笑いを提供していたのである。

たわいもない会話を楽しむうちにアリサが先だつての怪事件の話題を口にした。

「街を壊した巨大植物があつという間に消えるとか、私はオカルトとか信じないんだけどアレはね。」

「実際に街に大きな被害が出てますし……。」

「否定出来ないのよね…。」

『…あう、あう…』

針のムシロとはこの事が、なんともいたたまれない思いのなのはある。

「ああ…それから、仮面ライダーを見たという人が…。」

すずかの一言になのはとユーノが反応する。

「えっと、すずかちゃんそれって?」

「何の話?」とアリサも食いついてくる。

「ええっとですね…」

すずかの話は少し長かった。

曰く、父の子供のころから続く都市伝説、世界征服を企む悪の組織と闘う正義の味方、その身は改造され人の姿を失った代わりに人を越えた怪物の力を得て悪と闘う。

時代毎に新しい仮面ライダーが現れ今や10人以上いるという。

「…と言うようなお話です。」

「それが出てきて人を助けて回ったと…パニック起こした人の見た集団幻覚よ!」

9才児ながらリアリストのアリサはバツサリ切り捨てて鼻で笑う。

しかし、実物を見ているなのはとユーノは笑うに笑えない。

そして「改造人間を使い世界征服を企む悪の組織」が実在したのか、次に会ったときに確認しようと心に決めていた。

『…本当だったら怖すぎる…』

背中に冷たい汗が流れる2人だった。

しばらく3人の談笑が続いた後、なのははユーノが居ないことに気づく。

『なのは、山の中で魔力反応！
たぶんジュエルシードだ！』

『わかった！私もすぐにそっちに行くから。』

頭に響く念話に答え、椅子から降りる。

「…なのはちゃん、どうしました？」

「…えっと、ユ、ユーノくんが山の方に行っちゃったから連れ戻して来るね。」

すずかの問いにそう誤魔化して、庭の前に広がる木々の間の散策兼手入れ用の小路に駆け込んで行った。

ユーノと合流したなのはバリアジャケットを展開する。

「レイジングハート！」

セツトアープー！」

赤いリボンと金と瑠璃色の飾りが付いた白いセーラー服とロングスカートのバリアジャケット、先端に紅い宝玉が付いた機械杖―デバイス―レイジングハートを装備したなのはユーノを肩に乗せて木々の奥を目指す。

思えば自分は失敗ばかりだった。

恐怖に負けてRxを撃ち、判断の甘さから街に被害を出した。

『今度は失敗しない。』

すずか達の計画とユーノの捨て身のギャグ？が効を奏してなのはの気持ちの切り替えはいい方向に進んでいた。

数分後、木々が開けた場所にでた2人は

「…え〜つと……」

「…あ、あはは……」

いい感じに入っていた気合いが、脱力していくのを感じていた。

2人の目前には象のようなサイズの仔猫が気持ち良さげにひっくり返ってゴロゴロしていた。

「…ユーノくん、この子… 何かな?…」

「え〜と、たぶん大きくなりたいていう仔猫の願望にジュエルシードが反応したんだと思う。」

うん、模様に見覚えがある。たぶんすずかの家で育って、飢えたり命の危機に会った事がないから攻撃的な願望を持たなかったんだ。」

冷静に分析し、次いでなのはに封印の指示を出す。

「その前に結界を張らないと。」

なのはのモチベーションが上がっているのを感じていた彼は何としても封印を成功させようと思っている。

それはジュエルシードの封印よりもなのはを元気づけたいからであった。

しかし、彼が結界を張る前に周囲の色彩が消えていく。

「…けっ結界が張られた? 他に魔導士がいるのか!？」

慌てる2人の前で転がっていた巨大仔猫に金色の魔力弾が直撃する。

耳を塞ぎたくなるような悲鳴が響き続けて飛来した魔力弾を食らって巨大仔猫は地に伏した。

「なのは、気をつけて!!」

遠距離からの砲撃魔法だ、手練れの魔導士がいるよっ!!」

「え？ええ——？」

慌てて周囲を警戒するなのは目に上空から木の枝に飛び乗る人影が映った。

「女の子…私と同じくらいなの？」

黒い衣装にマントを纏い長い金髪をツインテールにした少女が紅い瞳でなのは達を見おろしていた。

「…魔導士と使い魔…」

そう呟いた少女は長柄の斧をなのは達に向けて、

「…ジュエルシード、頂いていきます。」

金色に輝く魔力弾を放った。

魔力量に任せた攻撃はともかく、防御に関しては未だなのはは心許ない。

ユーノが割り込みバリヤを展開し魔力弾を食い止める。

その間に黒衣の少女は巨大仔猫に狙いを変えて

「フォトンランサー、ファイヤー!!」

大型の魔力弾を発射、着弾し巨大仔猫の苦鳴があがる。

次弾を構える黒い少女の前に飛翔魔法「フライヤーフィン」で靴から光の羽根を生やしたなのはが飛び出してきた。

「どうしてこんな事するの!？」

「…言っても意味がない…」

デバイス同士をぶつけて錨ぜり合いに持ち込むが、素っ気ない返答とともに蹴りで突き放されアークセイバーの魔力刃が飛び続けてフトンランサーがなのはの意識を刈り取った。

意識を失い落下するのを見てユーノは落下地点に駆け込み浮遊魔法「フローター」を掛けるが、高度・攻撃による落下速度さらには己のが不調による魔力不足で受け止めきれぬかは賭けであった。

『絶対受け止めてみせる!!』

決意と共にフローターをなのはに当てて下から押し上げる。

「うおお!!とまれええ!!」

なけなしの魔力を絞りだすが落下速度の減少は僅かだ。

ユーノの脳裏に最悪の結末がよぎる。

「うわあああ!!なのはああ!!……………あれ…?」

予想した衝撃は来ず、見上げると意識の無いなのはを黒衣の少女が抱きかかえてユーノの上すれすれで落下を食い止めていた。

強い衝撃で意識を取り戻したなのはが見たのは自分を覗き込む紅い瞳だった。

かくしてこの日高町なのはは運命（FATE）と出逢った。

~~~~~

南光太郎は悩んでいた。

ジュエルシードを奪って行った二人の少女…いや、魔法少女がセーフハウスの隣の部屋の住人だった。

海鳴市にやって来た初日に会った姉妹？達がそうだったのだ。

後で気づいてマンションに戻ってから隣室に聞き耳をたてて様子を伺うと、二人の会話からある程度の事情が解った。

ちなみに聞き耳をたてている間、光太郎は何とも言えない罪悪感を感じていた。（風見や城ならば気にもしなかつたが）

変身前でも高い聴力を誇る彼の耳が捉えた情報は、アルフとフェイトという二人の名前、姉妹ではなく主と従者<sup>フェイト</sup>？（アルフ）らしい事、やはり異世界の人間であること、フェイトの母プレシアの命令でジュエルシードを集めていること、そしてフェイトが母親の愛情を得んが為に危険なジュエルシード集めをしていること。

聞いてしまった事に光太郎は懊悩する。

家族の愛情を求めて子供が無茶をするのはよく有ることだが、この件に関しては危険過ぎてとても親が子に命じて良いこととは思えない

い。

それとも、異世界ゆえに自分達とは常識が異なるのか？

地球上に置いてても文化や地域の違いで常識が異なるのはよく有ること、即断は出来ない。

なのはの場合は彼女が地球人だから「やめろ」と即断出来たがこちらはまだもう少し判断材料が欲しい。

それでも、光太郎は子供が危険な事をするのは許容しがたい。

悩みは尽きないがジュエルシードの回収は休めないなので今日もマシンを駆ってセンサーの反応を追っている。

ちなみに、罪悪感に負けてあの後聞き耳はたてていない。

センサーの反応を追ってやって来たのは、地元だけでなく国内でも有数の有力者月村家の邸宅である。

洋館の豪邸を前に光太郎は思案顔だ。

おそらくジュエルシードは月村家の敷地内、忍び込むしか無いだろうが何とも気が引ける。

さらにとある事情からこの豪邸のセキュリティが半端じゃない事を知っている。

少し前に中華系マフィア「龍」がショッカー系組織に人身売買（当然人体実験用の人間）を行おうとしていたので全ライダー総出で叩き潰し犠牲者を助け出した。（現場が中国だったためICPOの協力が得にくくその為の総掛かり）

その時手に入れた「龍」の情報に、土地財産人脈等の強奪対象として月村家の情報が有りその時に月村邸のセキュリティについての情

報を知ったのだ。

「…比較的にな裏山側から行くしかないか…」

30分後、山越えルートで捜索を行う光太郎の姿があった。

センサーの反応は山を越えた月村邸の方向を指している。

進行方向には監視カメラや各種センサーが設置されているためそれを避ける光太郎の歩みは遅い。

ようやく山を越えて月村邸を視界に入れようかと言うところでセンサーの反応が消えた。おそらくなのはかフェイトのいずれかが回収したものと結論して（結界魔法に光太郎は詳しくないので反応が消えると回収されたものと考えてしまう）暫く様子を見てから撤退することにした。

先程までの反応を当てにして少し前に進むと見えない壁に阻まれて前進出来なくなる。

ここでようやく光太郎は、結界という発想が出てきた。

結界があるということは、未だ封印作業が続いていると言うこと、どうしたものか考え過去の経験から変身して力技で結界を破ろうかと考えていたところ、視界の隅に銀色の光が見えた。

人の背丈程の高さに銀色の光の玉が浮かび、次いで丸めたシートを縦に広げるように光が何かの模様を回転しながら描いていく。

その間モーターが駆動するような重低音と金属質な高周波音が辺りに響く。

それを見た光太郎の顔が一気に緊張感に満たされる。

「…時空魔方陣！」

ショッカー系組織「BADAN」が開発、その後発組織も稀に使用している空間跳躍及びエネルギー供給システム。

これが出てきたと言うことは、これより先は光太郎―仮面ライダー本来の闘いであると言うことだ。

空間を歪めるほどのエネルギーを持つジュエルシード、仮面ライダーの敵たる秘密結社達が興味を持つのも当然であろう。光太郎はこれを恐れてなのは達に関わるのを拒んだのだ。

直径4M程の銀の魔方陣…なのは達が魔法を使うときに見られるものと比べ何処か禍々しいものが完成し、その向こうから何者かが現れる。

偉丈夫であつた。

身の丈は2Mにせまり肩から足首まであるマント…シルクを思わせる光沢の漆黒そして裏地は血を思わせる紅のマントを纏い、その下にはおそらく爬虫類の革製の暗い朱の鎧、腰に大剣を佩いている。

癖のある漆黒の長髪が肩先まで流れ前髪も目を隠すほど、しかし僅かに覗く目線には並みの人間ならば視線が合っただけで気死する程の…殺気?…狂気?…あえて言えば「鬼気」とでも言うべきものを放っている。

白面とでも表現すべき整った顔と白い肌から連想するのは死人であろうか。

常識の範疇で見れば失笑ものの装いだが、只立っているだけで周囲に放つ鬼気が常識という言葉を殺戮していく。

己が立つ場所は闘い…殺戮の場であると周囲に宣言しているのだ。

言うなればこの場は己が支配地であると言う「王」の振る舞いであつた。

「…南、光太郎だな…」

やや訛りのある…東欧系か?…発音で問う。

威厳あるまさしく王の声というべき声音である。

「貴様の集めている宝玉を ……いや、それはどうでもよい。手向かいを許す。

抗って、我を楽しませるがよい。」

そう言つて腰の佩剣を抜き無造作に切つ先を下に向ける。

「…キサマ、何者だ?…」

拳を構えて問う光太郎に

「…デルザー軍団が一人…竜騎士ヴラド……ヴラドⅡドラクル（竜の息子）と呼ぶ者もある。」

「!?!?…デルザー軍団だと!?!…」

息を飲む光太郎。

人に非らざる者、妖魔魔物と呼ばれた者を改造して産み出された怪人、否魔人と呼ばれる存在。

本当に魔物なのかは定かでないが、大幹部怪人すら上回る力を持つ最悪の敵。

以前7人の仮面ライダーにより壊滅させられたはずだが、元々「強大な力を持つが繋がり弱い『個人支配の私兵集団』の寄り合い」でしかないため参戦せずにいた者がいてもおかしくはない。

「……さあ…我を…楽しませろーっ！っ！！！」

踏み込んだ足下が爆発するように砕け散る斬撃が襲いかかる。

数多くの闘いの経験から、後退して相手にペースを握られる愚を犯さないたため敢えて前方に身を投げ出し剣をかわす。

前転して立ち上がり向き直る。

振り下ろされた剣が作った陥没から剣を抜き、ゆっくりと向き直るヴラドの目が喜悦に歪んでいるのを見て光太郎は確信する。

『……こいつは戦闘狂だ。』

そして相手を倒すと言う明確な意志とともに言葉を紡ぐ。

「変身ー！」

左拳を腰に、右掌は太陽を掴むかのように天へ。

次いで顔前で右に払われる右手、腰から回すように肩の前に動く左拳と腰に構える右拳。

そして金のバツクルー変身ベルトーサンライザーが太陽の光を放つ。

光がおさまった後、そこには漆黒と濃緑の鎧に身を包んだ紅い複眼

の異形が立っていた。

右拳と左手刀を右肩前で組み合わせ構える。

「俺は太陽の子！

仮面ライダーBlack！！」

名乗りの間、左拳は腰に動き右拳は左に手刀を切って再度右へ疾し  
る。

再び握られた拳は再度手刀となり、左下から右下へと空を切り、

「RX！！！！」

右拳が腰に構えられ、左拳が肩の前に構えられた時ふたたびサンラ  
イザーが光を放った。

その光にヴラドが目を焼かれ僅かに怯む。

「いくぞ！！」

RXは地を蹴ってヴラドに拳を振りかざした。

## 第4話 白と黒の邂逅

そして、RXと魔人の邂逅（後書き）

次回、ガチバトルです。

## 第5話 激突（前書き）

ようやく5話目ができた。  
よろしければどうぞ。

R xとデルザー魔人のガチバトル、まだなのは達ではこの殺し合い  
には割り込めません。

## 第5話 激突

改造人間同士の闘いに、所謂“ジャブ”のような攻撃は存在しない。強靱な装甲を纏いその下の改造強化された肉体も、人間とは比較にならない高い耐久力を持つため牽制の攻撃すらもかなりの攻撃力を持たなければ意味をなさない。

”当たっても痛くない攻撃ならば気にする必要もない”からだ。

したがって、R xの初手の攻撃も腰の入った重いパンチからであった。

### 第5話 激突

「トアッ!!」

独特の掛け声とともにフルスイングの右拳があっさり音速を突破してヴラドに襲いかかる。

それをヴラドの左腕があっさり弾いて右の大剣が跳ね上がる。

R xはバックステップでかわすと剣の走り抜けた後の隙…ヴラドの右肩を狙って後ろ回し蹴りで右脚の踵を叩き込む。

ヴラドは剣の勢いに身を任せそのまま地を蹴る。

マントをなびかせ宙を舞い回し蹴りを回避、一旦間合いを開き着地すると足元の地面を踏み込みで爆発させつつR xに一瞬で肉迫、袈裟斬りに斬り込む。

R xは左回転して回り込み斬撃を回避しつつヴラドの後頭部に右手のチョップを打ち込む。

『よしっ！！まずは一撃！！』

そう思った瞬間、片手殴りに切り返された大剣がR×の右脇腹に食い込んだ。

「……?!ガハアッ!!」

爆発でも起きたかのような勢いで吹き飛ばされ宙を舞うR×。そのまま立ち木に激突。立ち木がへし折れR×と共に地に落ちる。

「……直撃したはずだが…胴体が両断出来ないとは…」

残念そうに語る口調だが、表情がそれに反して『まだ楽しめそうだと喜悦に歪んだ笑みを浮かべる。』

立ち上がったR×の右脇腹の装甲がゴツソリと削り取られている。

腹部の水晶状の器官サンバスクに蓄えられたエネルギーを使えば傷の修復は容易いが、戦闘中に行うには隙が大きすぎる。

それに傷の修復はできても損傷部の痛みや痺れ等のダメージの回復には今少し時間がかかる。

今は回復よりも攻勢に出て闘いのイニシアチブを握るのが優先と判断してR×はヴラドめがけて突進した。

迎撃に下段から跳ね上がる大剣を左腕で逸らして上に跳ね上げ右のボディブローを撃ち込む、めり込んだ拳がヴラドの体を浮かせる、すかさず左拳を撃ち降ろし右頬に叩きつける、次いで体を切り返して右のミドルキックを放とうとしたところで

「舐めるなあッ!!」

修復が成されていない右脇腹の傷口にヴラドの左手が撃ち込まれて

いた。

「グッ… ガッハアッ!!」

猫科の肉食獣を思わせる鉤爪を生やした獣の手が傷口に食い込み、そのままR×の体を持ち上げ立ち木へ叩きつけようと投擲する。

投げ飛ばされる際に鉤爪が傷口を抉り、空中に紅い線を引きながらR×が宙を舞う。

しかしR×は空中で体をひねり立ち木に脚を着けショックを吸収、膝をたわめて次の瞬間弾丸の速度でヴラドめがけて跳躍、赤熱する右拳を叩きつける。

「R×パンチッ!!」

当たれば大ダメージ必至の一撃をヴラドは跳躍して回避、R×は前方回転して体をひねり着地し今だ空中に浮遊しているヴラドを見上げる。

「…蝙蝠の翼?…」

ヴラドの背から巨大な翼が出現しその身を空に浮かべていた。

しかしその左手は鉤爪を生やした猫科の猛獣のものである。

「複数のモチーフを持っているのか?」

「…惜しいな、少し違う…」

R×の呟きを捉えたのかヴラドがさも愉しげに応える。

「…古の書に曰く、そもその身は蛇体にして獅子の爪と牙を備え鹿の角を戴き馬の鬣を纏い翼を用いて天翔るもの也。此れ則ち獣の王也。其れ則ち竜也。」

「…竜?……」

不審げに呟くR×の目前でヴラドの体が変貌していく。

まず体のサイズが一回り大きくなり次いで露出していた皮膚が赤黒い鱗に覆われる。

その間にも瞳孔が縦に割れ頭部が変形し口が大きく裂けて獣のような牙が生え揃う。

背に生えていたぬめったような質感の翼も一回り大きくなる。

ここまで僅かに3秒ほど。そしてR×はその眼前にヒトガタの竜と言うべき魔人を見た。

「……則ち竜とは力の象徴の集いしもの也。

王権、財宝、武力の象徴にしてその守護者也。」

鋭角的な構成の頭部の口元がニヤリと笑った（硬そうな鱗に覆われて構造的に笑えそうに無いのに）ように見えた。

次の瞬間、頭上の魔人は砲弾と化してR×を跳ね飛ばした。

「バカな!？」

突進の予備動作がない!？」

いや、あの羽根は何らかの力場推進器官で羽ばたく必要がないのか?」

跳ね跳ばされつつも分析するR xに連続してヴラドの空中突進のコンボが襲いかかる。

あまりのスピードにR xは空中に打ち上げられたまま落下することもない。とどめとばかりにヴラドはR xもろとも突撃し結界の壁にR xを叩きつけ、あるうことかそのまま結界を突き破りその奥へと木々を薙ぎ倒しながら突き進んで行った。

~~~~~

「…動けないよ…ユーノくんは？」

「…ごめん…僕も動けないよ…」

なのはとユーノの2人（一人と一匹？）はフェイトのバインドで手をくくられて木に繋がれていた。

その2人の目前でフェイトは悠々とジュエルシールドを封印し、余裕の顔か元のサイズに戻った仔猫…ちなみにアメリカンショートヘア…と戯れていた。

ひっくり返った仔猫の腹を黒い革手袋を着けた手でくすぐると仔猫が手袋にじゃれついてくる。

暫くそれを堪能するフェイト。

それを見ていたなのは達は今まで沈着冷静で手練れの魔導士と思っていた相手の印象を訂正していた。

『…笑うと可愛い子だね。』

『そうだね、なのはの事も助けてくれたし悪い子じゃなさそうだね。』

念話で話す2人に仔猫を胸に抱えたフェイトが歩み寄る。

何をするのかと軽く身構える2人にフェイトは無言、無表情で仔猫を見せ次いでなのはの頭にそれに乗つけた。

「にゃ？にゃ〜〜〜！？」

頭に軽く爪をたててしがみつかれて、なのはが声をあげる。

「…暴れたら仔猫落ちちゃうよ？」

首を傾げてなのはを見るフェイトに2人は同時に思った。

『『この子、ちょっと天然さんだ。』』

次にフェイトはユーノを抱え上げ

「…主人思いの良い使い魔だね。」

そう言つてユーノを撫で廻し始めた。

『…アルフに不満はないけど、小っちゃい子も良いな…』

「？違うよ、ユーノくんは友達だよ！」

なのはの言葉にフェイトはなるほど、優しい主人なのだと納得しそ

の優しい少女を叩きのめした自分の所業に少し悲しくなる。

それをまぎらわすためにさらにユーノを撫で繰り返す

「あ、…この子、雄…」

「!?…~~~~~!!」

男の何か大事なものを粉碎されたユーノの声にならない絶叫が響いた。

「…み…見られた…」

精神ダメージでぐったりするユーノの背を撫でて毛並みを堪能していたフェイトに、境界を維持している筈のアルフから切羽詰まった声の念話が届いた。

『フェイト!!フェイト!!』

その声にユーノを撫でる手を止めるフェイト。

『どうしたの?』

『この間のあいつが!あの子男が!!』

『そう、彼が来たのなら早く逃げないと。』

R xは強いが危険な相手ではないと判かっているので落ち着いたものだ。

『あいつがボコボコにやられているんだ!!
捲き込まれる前に逃げないとヤバい!!』

『…え?』

『?あーっ!?!?……』

アルフの叫びの直後、周囲の色彩が戻り結界が弾け飛ぶ。そして林の奥から木々を薙ぎ倒して何かが突っ込んできた。

それはなのは達から少し離れた地面に激突し、地面を抉り土煙をあげて停止した。

仔猫が驚き逃げ出そうとするのをフェイトが掴まえてユーノというしよに胸に抱える

なのは達の視線の先で土煙が晴れ、地に伏したR xとそれを踏みつける紅い竜…ヴラドの姿だった。

ヴラドに蹴り跳ばされたR xがなのは達のそばに落ちてくる。

全身の装甲に無数の傷が入り、全身から出血したR xに3人がギョツとなる。

足元のR xとヴラドをせわしく交互に見比べる。

やがて紅い竜…ヴラドの目線が自分達を見ている事に気づくと

『『『……?!』』』

呼吸がとまっていた。

3人共にはじめての「明確な生命の危機」であった。

なのははともかく、発掘を生業とするスクライア一族のユーノは発掘現場の事故や、盗掘者や野生動物の襲撃の経験もあるがそれとてたった一人での経験はない。

あくまでユーノは発掘隊の一人として参加していたからで、周囲に頼りになる大人達がいてくれたのだ。

それに盗掘者や野生動物には、「子供にすら判る殺気」を周囲に垂れ流すような存在はいなかった。

フェイトにしてもみっちりと訓練を積んでおり、野生の魔法生物や遺跡に存在する自動機械との戦闘も訓練の一環として経験しているが、目前に存在する「紅い竜」のような桁外れに危険な存在には出会った事がない。

なのはは、父親や兄姉が剣術家（御神流はどちらかと言うと暗殺術や忍術と言えるが）であるが特に訓練を受けたこともなく、全くの一般人であつたからこのような殺気に曝された事もない。

よって3人共にヴラドの放つ鬼氣にがんじ絡めにされ呼吸すらも止まりかけている。

このままではヴラドに何かされる前に窒息してしまう。

3人が絶望に呑み込まれかけていた時、ふっと鬼氣が緩んだ。

R xが立ち上がり、ヴラドの視線が遮られた。

それで3人の呼吸が戻った。

急に肺に満たされた空気に咳き込みえづく3人。

鬼気の縛りが和らいだが消え去った訳ではないので、膝に力が入らなくなっていたなのはとフェイトはその場にへたりこんだ。

ユーノはフェイトの腕の中でグツタリとして伸びきっている。（ちなみに仔猫はユーノの隣で失神している。）

立ち上がったR xはなのはのバインドを引き千切ると

「早く逃げて…」

そう言つて2人を立たせると何か言いたげな2人と一匹の後ろを指差し、

「…逃げろっつ!!」

大喝した。

弾かれるように駆け出す2人。

フライヤーフィン等の飛行魔法を使えば良いのだが、混乱した2人は山の中を息を切らして駆けて行く。

2人が山の中に姿を消すのを見届けてヴラドに向き直るR x。

「…子供を庇うか…」

後ろからまとめて切り捨てられるとは考えぬのか？」

大剣でR×を指すヴラドに

「…その時は、俺が盾となればいいだけだ!」

「よくぞ吠えた!」

答えたR×に向かって大剣を肩に担いだヴラドが地を蹴った。

~~~~~

「なのはちゃん、遅いですね?」

「ん、道に迷ったかも…ユーノが見つからないなら此方に助けて欲しいといってくるでしょうし。」

「…だとしたら、探しに行った方がいいのでしょうか?」

「…もうちょっとまってから探す…」

アリサの言葉を遮るように山の方で木が倒れる音が響いた。

それも続けて何本も折れる音が響く。

「な、なに?」

「ちょっと、何事!」

驚く2人を目掛けて月村家のメイド、ノエルとファリンがやって来て庇うように立ち邸に入るように促す。

「なのはちゃんが山の方にいったままなの!」

「すずかちゃん、今はお屋敷の中に!」

なのはちゃんはすぐに探しに行きますから!」

すずか達が邸に戻りかけたところでアリサが叫ぶ。

「なのは!なのはが戻ってきた!……と、一緒にいるの誰?」

アリサの目の前には、普段の運動音痴ぶりとはかけ離れた勢いで血相を変えて駆け込んでくるなのはと見たことの無い少女がいた。

「誰?この子……あと、コスプレ?」

なのは、あんたいつ着替えたの?」

へたりこんだなのは達に声をかけると、息も絶え絶えなのは(フエイトはもう少し余裕がある)が酸欠の金魚のようにパクパクと口を動かすが声が出てこない。

ようやく出てきた言葉は

「……み……みんな……は……やく……にげて……」

「……逃げる?」

アリサが首を傾げたところで、再び山の方から木が折れる音が響き何かが吹っ飛んできた。

地面に叩きつけられて二転三転してようやく止まった黒い何か。

ヨロヨロと立ち上がるそれは人の形をした虫に見えた。

「……仮面ライダー？」

すずかの呟きに気づいたのか、それ… R xは此方を向いて叫ぶ。

「ここは危険だ！！」

早く逃げて！！」

戸惑うすずか達の前に、木々の間から赤い竜…ヴラドが姿を現す。

あまりの展開に、固まるすずか達と逃げるように促すのは。

フェイトはこの場を立ち去ろうと魔法を展開しようとしているが、  
コーノ（バインド掛けたまま）と仔猫を抱えたままなのは見た目ほど  
落ち着いてはいない証拠だろう。

数十m離れてもヴラドの放つ鬼気は影響を与えるのか彼女らの動き  
はぎこちなく酷く鈍い。

横目で彼女達を見てヴラドが笑った様に見えた。

R xにもなのは達にも。

…嫌な予感がする…

R xは痛めつけられた体を叱咤して、ヴラドとなのは達の間目掛けて  
ダッシュし体を擦り込んだ。

なのは達がヴラドと目があつたと思ったとき、確かにその口許が笑みを浮かべた様に見えた。

見た者の心臓が凍りつくような笑みが…。

次の瞬間、砲弾のような勢いでヴラドがなのは達の方へ突っ込んで来た。

その右肩に大剣を構えて。

鬼気の縛りとその突進の速さに、誰もが身動きとれず逃げ出す事もできぬ恐怖に目をつぶり身をすくめるか側にいるものを庇うかのように抱きつくしかできなかった。

——ザンツ——

何か軟らかいものを硬い棒で叩いたような音が響いた。

恐る恐る開いた目には、大剣を振り抜いたヴラドとその前に立ち塞がったR×の背中があつた。

皆を庇うかの様に両手を広げて立つR×の背がグラリと揺れて仰向けに倒れる。

左肩から袈裟懸けに切り裂かれた傷口から鮮血がしぶき、すずか達の顔や髪そして衣服を真っ赤なまだら模様染めていく。

（なのはとフェイトはバリアジャケットが展開しているフィールドが血飛沫を弾いたので血を浴びることはない）

「ッ、キヤー——!!」

「イヤ——ッ!!」

「…あああああっ?!」

「…ヒッ!……」

「…うつ……」

「……………!?!」

それぞれに目の前の光景に恐怖や嫌悪の反応を示す。

ここまで大量の血を見た経験は無いのか、フェイトは構築中の転移魔法の術式を放棄しへたりこんでしまった。

ヴラドは少し後ずさり、剣を足元に突き立て宣言する。

「…RX…今より10数えるうちに立たねば、その者共を殺す…」  
息を詰まらせるのは達、何故?と言う抗議の声は上げられなかった。

ヴラドの放つ鬼気が声を上げる事を赦さず、なのは達を見据える目が「声を上げただけで殺す」と言っていたからだ。

すずか達を腕の中に庇うメイドのノエルとファリンには月村家の護衛として、十分な戦闘能力があった。

しかし、現状その力を振るう事が出来ない。

職務としてならすすかのみを連れて逃げ出せばよい、むしろそうすべきである。

そのぐらいなら可能性はあるだろう、しかしそのときはなのはとアリサともう一人の見知らぬ少女はここに捨て置く事となる。

職務上の取捨選択の範囲である。

(…もつとも、それをやると後にバニングスグループと御神流の報復を覚悟しなければならないが)

しかし、幸か不幸か二人のメイドはそれが出来ない程度には善良であつた。

ならばヴラドに戦闘をしかけ活路を開くと言うわけにもいかない。

距離が近すぎる。

先ほどの動き、その体格と大剣のリーチ等から判断しても二人が何か行動した途端に少女たちが大剣に血を吸わせることになるのは明らかだった。

故に決断が遅れ致命的な状態になってしまっていた。

地に倒れていたR xが身じろぎした。

うつ伏せになり苦鳴を喉の奥から絞り出しつつ上半身を持ち上げ、膝をたてようやく立ち上がる。

ここまででカウントは5まで進んでいた。

ふらついたR xはフェイトの前に倒れかけ何とか踏みとどまる。

その時何かを話しかけたように見えたが、ヴラドは捨て置いた。

何かを仕掛けたならばそれはそれで面白いと。

荒い息をついてR xがヴラドに向き直ったのはカウント9の直後であつた。

ヴラドを見据え次の手を練るR x、大剣に斬られた傷は出血のみは止まりつつあつた。

しかしこれ以上の傷の再生ダメージの回復は、サンバスクのエネルギーを使うしかないが一瞬で回復できる訳ではないしその間は動きが鈍る。

大剣で真つぷたつにされるのが落ちだろう。

バイオライダーやロボライダーへのチェンジも僅かながら行動不能となる時間がありそこを見逃すヴラドとも思えない。

キングストーンフラッシュも不可、あれは次の技に繋げてこそ意味がある。

ヴラド相手では次の技に繋げる隙を作るほどのダメージが期待できない。

あのスピードでの突撃を連発しR×ごと何本も樹をへし折り、結果をもぶち抜くヴラドの耐久力の前では。

ならばどうする？

すでにR×の中に答えはある。

次に繋げられるだけのダメージをだせる一撃を撃ち込むのみ。

R×パンチやR×キックは隙が大きすぎる。

リボルケインは論外。

ならばどうする？

おもむろに構えをとるR×。

力瘤を作るかの様に構えた右腕の肘に左の拳をぶつけるかのような構え。

「…ムンッ！！」

力を込める声と共に四肢にエネルギーが駆け巡る。

バイタルチャージ。

以前の姿、仮面ライダーBlackのとき必殺技であるライダーパンチとライダーキックを放つためにエネルギーを四肢に巡らせ、瞬間的にパワーや瞬発力を高めるための能力だ。

R xにパワーアップして恒常的に能力がアップしたため、久しく使っていない能力だが今こそ役に立つ。

次の瞬間、ヴラドの知覚と反射を上回るスピードで突っ込んだR xの渾身の右拳がヴラドの胸板に突き刺さりその巨体を吹き飛ばした。

「……？……！！ガアッ！！」

もんどり打って地面に叩きつけられるヴラドを見て、拳を突き出したままのR xが叫んだ。

「今だっ！結界を張れ！！」

R xの声にユーノが答えて魔方陣が起動する。

「みんな！僕に合わせて！！」

同時になのはとフェイトさらに隠れていたアルフ（ヴラドを不意打ちしてフェイトが逃げる隙を作るつもりだった）も飛び出してきてユーノの魔方陣に魔力を注ぐ。

ユーノの緻密かつ堅牢な結界術式に、なのはとフェイトのA A A クラスの魔力二人分が注ぎ込まれる。

アルフもユーノの術式に合わせて結界を展開しさらに強度を上げる。そして生み出されたのは、堅牢極まりない結界。

二体の魔人が殺し合うためのデスマッチのリング。

魔界のコロッセオの完成だ。

これがR xがユーノに頼んだこと。

二体の魔人が暴れてもなのは達が巻き込まれないための安全策。

これからR xは全力でヴラドを倒しにかかる。

当然それに抵抗するヴラドも熾烈な反撃を行う。

周りにどんなとばっちりが出るか解らないのは、今までの経験でよく理解している。

ましてや今はなのは達がすぐ側にいるのだ、最低でも彼女らが逃げ出せる状況を作らねばならなかった。

目まぐるしく思考するR xの目に映ったのは「結界術が得意」と言っていたフェレットの姿、そして魔力がベラボウに高いと言っ話なのはと一度敵対した黒い魔法少女。

ここでR xはユーノに策を授ける。

そして自身は策が不首尾に終わったときは刺し違えてもなのは達が逃げる時間を作る事を決意する。

転移魔法で逃げられるフェイトが協力してくれるかは不明だったが、最悪ユーノの転移魔法で逃げるように指示はしている。

(R xは以前フェイト達が転移魔法を使うのをみたので)

その場合、月村邸が闘いの余波でどうなるかは判らないし邸内の使用人が逃げていることを祈るしかない。

『ヨシッ！！強装結界完成だ！！』

ぶっつけ本番だったが結界の展開に成功したユーノは快哉を叫ぶ。

念話のそれに協力していた3人がほっとしたかのように息をつく。

では結界の維持をオートにして脱出を考えたところでいきなり結界にヒビが入る。

慌てて結界の維持を再度取り戻し補修を行う。

見ると結界の薄いベールのかかったような壁の内側では硬質な鎧を纏った姿に変わったR×とヴラドが爆音を巻き上げて銃と口から吐くプレスでの壮絶な射撃戦を繰り広げていた。

「?！ツ、み、みんなてつだつてーっ!!」

念話を使う余裕もなく叫ぶユーノに慌てて元の体勢に戻るなのは達だった。

結界の発動を視認したR×はヴラドが体勢を立て直す前に攻勢に出る。

両腕を眼前で交差させてから両側に振り下ろす。

次いでキングストーンが光を放ちR×の姿が変わる。黒地にオレンジのラインが入った金属質な鎧を纏った重装甲射撃戦形態「ロボライダー」に変身したR×は右手に光線銃「ボルティックシューター」を出現させ無数の光弾をヴラドに撃ち込んでいく。

最初は為す術もなく撃たれていたヴラドだったが、大剣を盾代わりにして身を守って立ち上がり物語のドラゴンよろしく口からのプレス…プラズマ火球で反撃に移った。

爆風と炎が吹き荒れる（時々流れ弾が結界の壁にぶち当たる）結界

の中、ロボライダーとヴラドは互いに一步も引かず攻撃を繰り返していた。

しかしロボライダーはプラズマ火球を避けることなく攻撃するのに対して、ヴラドは大剣で防御しながらの攻撃のため手数で負けダメージも蓄積し始めていた。

『なぜだ？…何故こやつは回避しない？』

ヴラドの疑念にロボライダーの声が答える。

「無駄だっ！！俺は炎の王子、R×ロボライダー！！  
火炎で俺を倒すことは出来ない！！」

「…ならば、これだ！！」

ブレスを止めたヴラドは、頭部の角から電撃を放った。

避けきれずもろに喰らい倒れるロボライダー。

そのまま地面を転がりつつR×に姿が戻り、追撃してくる無数の電撃を激しい動きで回避していく。

先ほどのブレスと違い電撃にはチャージの時間が必要だった。

その隙をついて攻勢に出るR×。

再び両腕を交差させてからの形態変化、キングストーンの輝きのあと現れたのは青と灰銀の軽装甲の戦士、高速特殊戦闘形態『バイオリダー』だ。

「俺は怒りの王子！！R×ツバイオリダー！！」

足を開いた低い姿勢で両腕を左右に開いた独特のファイティングポ

ーズで名乗りを上げるバイオリダー。

次の瞬間飛来する無数の電撃を高速な動きで回避しヴラドへ突進、一旦ジャンプした後空中でバイオリダーの身体が蒼く透き通ったゲル状の物体になる。

そのままさらなる高速でヴラドに何度も体当たり攻撃『バイオアタック』を仕掛ける。

「?!ウ、ウオオオ!?!」

吹っ飛ばされ地面を転がるヴラド。

ここをチャンスと見たバイオリダーは形態をR xに戻し必殺技の体勢に入る。

片膝をついた体勢で右手の甲で地面を叩く。

次の瞬間、R xは地を蹴って跳躍。

ヴラド目がけて矢のように飛翔する。

膝を抱え込み身体を丸めて後方回転から両足を揃えてキックの体勢に入る。

次いで錐揉み回転を追加、さらに両足にハイブリッドエネルギーをチャージするとR xの両足が真っ赤に赤熱する。

赤熱する砲弾と化したR xがようやく立ち上がったヴラドに肉迫、必殺のキックが撃ち込まれる。

「R xキック!!」

「ウオオオ!?!」

キックのパワーと注ぎ込まれたハイブリッドエネルギーによって、

全身から火花を飛ばしながら吹き飛ばされるヴラド。

結界の壁に叩きつけられたところにR×の追撃が来る。

再びヴラドへと跳躍したR×は左手をサンライザーの前にかざす。

「リボルケイン！！」

サンライザーの右側の光る紅玉から光が走り剣の柄の様なものが現れる。

それを引き抜くと輝く刀身を持つ刺突剣を思わせる武器『リボルケイン』が姿を現す。

リボルケインを右手に持ち変えたR×は一気にその切っ先をヴラドの土手っ腹に突き込んだ。

切っ先はヴラドの胴を貫通し結界の壁すら突き破る。

「ガアッ！グアアアア！！」

体内に注ぎ込まれるハイブリッドエネルギーに身を焼かれ苦鳴を上げるヴラド。

ありったけのエネルギーを注ぎ込んだR×は確信を持ってリボルケインを引き抜く。

ヴラドに背を向けざまに引き抜いたりリボルケインが空を差す。

血振るいをするかのように右に弧を描いてから右下に振るわれたリボルケインの切っ先がR×の胸のエンブレムと同じ形を描いた。

次の瞬間、結界がリボルケインが穿った孔から弾け飛び支えを失っ

たヴラドが倒れ込んで爆発した。

目の前で行われている闘いになのは達は呆気にとられていた。

まず目が追いつかない、バイオリダーの動きはフェイトのブリッツアクションを置き去りにする速さ。

ロボライダーのボルティックシューターやヴラドのブレスと電撃は、なのはのデイバインバスターよりは威力は下のようにだが連射速度がとんでもない。

「…あんな人を後ろから撃った…」

「…本当に手加減されて…違う相手にされてなかったんだ…」

「…うーわー…」

3人揃って冷や汗を流していた。

結界を張り続けるユーノは青ざめている。

転移魔法を使って逃げようにも今手を離したら、結界が吹っ飛んで中で暴れている二人が飛び出して自分達が巻き込まれることが確信できる。

いやもつと不味い。

恐らくR×は自分達を気にして全力を出せなくなる。しかしあの赤い竜はかまわず暴れ続けて自分達が生き延びられる確率は限りなく

低くなる。

「…は、早く…早く終わって」

涙目のフェレットの願いが届いたのか強烈なキックから続く光の剣の刺突で赤い竜は結界の壁に縫い付けられた。途端に結界が内側から弾け飛びそうになる。

「…！結界が持たない！？

あの光の剣が！？」

結界の構成が耐えきれず崩壊したのと同時に赤い竜が倒れ爆発炎上する。

それを見てなのは達は膝からへたりこみ脱力する。

「…終わったの？…」

誰かが呟いた声に皆が安堵の溜め息をつく。

その目線の先でR xは荒い息について片手を地につけていた。

「…これが、デルザー魔人……恐ろしい敵だった…」

呟くR xの後ろ、炎上するヴラドの死体から何かが動く音がした。

はつと振り向くR xの目前で、炎の中から黒く小さな何かが無数に飛び出して行った。

「…？…蝙蝠？」

優に百を超える数の蝙蝠が群れを成してR xの頭上を舞う。

見る者の不安をかきたてる不気味な光景になのは達は怯え、R xは蝙蝠の舞う空を睨む。

その不気味な蝙蝠の群れから声が響く。

「…良き闘いであつた…」

「…！？ ヴラドツ！？」

驚愕の声をあげるR xに上空からの声は続ける。

「…今日のところは我の負けを認めよう。

しかし貴様があの宝玉を探す限り、我と再び闘う事となる。  
その時を楽しみにしている。

それまで壮健であれ。

さらばだ…」

そのまま蝙蝠の群れは山の向こうへと飛び去って行った。

もはや追う力の無いR xと呆氣にとられるのは達。

「…まだ終わっていない…」

R xの呟きは日が傾き始めた空に飲まれていった。

## 第5話 激突（後書き）

今回は事件の後始末と幕間的な話の予定です。

以下に作中の設定を掲載します。

オリジナルの設定なので公式設定とは異なる点が多数有ることを明記します。

設定集？

南光太郎：仮面ライダーBlackRx

本作の狂言回し役。

（主人公に非ず）

クライシス帝国戦の後、本郷猛の創った医療系NGO「本郷財団」に参加。

通常は紛争地帯の難民キャンプへの物資輸送ヘリのパイロットや輸送キャラバンのドライバー兼用心棒をやっている。

たまに本郷会長の代行として寄付金集めのためのパーティーでホスト役を押しつけられている。

（先輩ライダーが皆いやがるから）

外見は20代後半だが改造手術とRxへのパワーアップにより老化が遅くなっており実年齢はかなりオッサン。（演出上の都合で正確な年齢は描写しません）

性格は基本的なところは変わっていないが、歳相応に丸くなったりしたたかなところが出来ている。

後輩ライダーで「シン」「ZO」「J」がいるのもその原因と思わ

れる。

## 第6話 幕間と魔法少女達の日常（前書き）

亀更新の6話目です。

アクセス数が10000PV越してました。

…おかしい…もらった感想のほとんどが「面白くない」「やめろ」  
て書かれてたのに…

ともあれ、アクセスしてくださった方々には心からの感謝を、そして読後不快に思われた方々には心からの謝意を。

ではどうぞ。

## 第6話 幕間と魔法少女達の日常

「…お庭、ボロボロですね…」

「…すまない…」

「…山の中の被害も…」

「…重ね重ね、すまない…」

「…ノエル、ファリン―応命の恩人なのだからそれくらいで…」

夕日の射す庭に逆光で影となって立つ二人のメイドとその主の少女、その横に立つ黒い異形。

なんともシユールな光景であった。

第6話 幕間と魔法少女達

の日常

「私は月村すずか、貴女はなのはちゃんのお友達ですか？」

「アリサ・バニングスよ。あんたの名前は？」

「私、高町なのは。」

お名前おしえてくれないかな？」

「……………」

「…こんな甘やかされてヌクヌクと育った子たちに答えることあ無いよ。」

一連の騒ぎのあとなのは達は、フェイトにアルフも込みで二人のメイド（荒事なれしているので先に立ち直った）に風呂に入れられた。ヴラドの放った鬼気に当てられて腰が抜けかけていたのでフェイト達もさしたる抵抗もできず風呂で洗われ、今はリビングでバスローブに身を包みホットミルクやホットワインなどを口に行っている。

最初は歯の根が合わず震えていたずかとアリサも、一緒に風呂に放り込まれ洗面器にはられたぬるめの湯の中でぐったりとしていたユーノに気づき、指でつついたり背中を撫でたりしているうちにリラックスしてきたらしく

「…そう言えば、アンタ喋ってなかった？…」

「…そう言えば…確かに…ねえ、なのはちゃん？」

「…にやつ？…そ、それは…」

風呂から上がる頃には、魔法の事からジュエルシードの事まですっかり喋らされていた。

そして、冒頭の会話に戻る。

「……………」

周囲からの好意的な目線にフェイトは戸惑う。

ずかたアリサにしてみれば、フェイト達はなのは達と一緒に魔法の壁を作って自分達を助けてくれた相手である。

ジュエルシードの取り合いをしていると聞いても、ヴラドのような怪物の大暴れを見た後では

「…？…へーそうなんだ…」

と言った反応しか帰ってこない。

なのはとユーノもフェイトに悪印象を持っていないのでさらに拍車がかかる。

「…フェイト…フェイト・テストロッサ…」

好意のプレッシャーに負けて名を告げるとなのは達が満面の笑みを浮かべていた。

少し赤面して俯くフェイトの手の中には、失神から目を覚まして汚れを落としたあの仔猫がゴロゴロと喉を鳴らしていた。

それを見てアルフはため息をつくが、いろいろと話しかけられ口下手なのかしどろもどろになっているフェイトを見る目はどこか楽しげであった。

「……………ああ、体痛てえ」

R×は破壊された庭で大の字になっていた。

腹部の太陽エネルギー吸収器官サンバスクで吸収した太陽光をエネルギーに変換し全身の負傷を治癒しているのだ。

装甲R×フォームの損傷や断裂した筋肉、骨折の回復は割りと短時間で出来たが負傷の回復による発熱（普通の人間がケガの時に発熱するのと同じもの）負傷部分の激痛、全身の倦怠感に疲労感などのダメージの回復にはまだ時間がかかりそうだ。

「……………巻き込んでしまったなあ……………」

なのは達の事を思いながら呟く。

「……………死なせる訳にはいかない……………」

硬い声が出た。

脳裏には助けられなかった人達の顔が浮かぶ。

秋月の父、シャドウムーン……信彦、佐原の叔父夫婦、クライシス帝国の人々、さらに戦争難民や災害被災者の救済活動に従事した際にも力及ばず命を救えなかった人々の顔も。

怪人に敗北するよりも重く明確な『敗北の記憶』である。

ヴラドはR×との戦闘を優先させたとはいえ明らかにジュエルシードを狙っていた。

ここでヴラドを倒しきれなかった事が悔やまれてならない。

ヴラドは地力でR xに勝りまだ余力を残していたのに対して、R xは切り札であるロボライダー、バイオライダーへの多段変身を使い不意を突く形での勝利でしかない。

再戦では苦戦は必至であろう。

「……デルザー魔人の実力がこれ程とは……」

再戦時の対策と、なのは達の身の安全を護る為の手を考えるR x…庭で大の字になって全身からシュウシュウと湯気を出している異形を、庭と山の中の被害の調査…「被害の調査と復旧費用の見積り」を行っていたノエルとファリンが何とも言えない表情で見ていた。

「R x、起きてますか？」

頭の横にやって来たユーノが声をかける。

「お礼を言わせてください。貴方のお陰で皆無事でした。」

「…いや…此方こそすまない、協力してもらったのに奴を倒しきれず禍根を残してしまった…」

「…あれが貴方の敵…そして、やはりジュエルシードを…」

「そうだ、ジュエルシードを狙っていると言っていた。」

最悪の展開に沈黙するユーノ。

R×ですら苦戦する怪物相手にどうすれば良いと言っのか？

「…後は任せてくれないか？

こうなつては本当に君達の手にも負える事態じゃあないんだ。」

R×の気遣いを含んだ言葉に首肯したくなるユーノ。しかし少しの逡巡の後、彼はきっぱりと答えた。

「いえ、やはりジュエルシードの回収は続けます。

あんな敵が関わってきたからこそ一刻も早く回収を終わらせないと。」

「なのはちゃんを危険に曝してもか？」

強くはないが明らかに非難を込めたR×の声に

「現状、僕の魔力では封印が出来ません。

なのはの協力が必要なんです。

勝手なお願いですがなのはを護つてはくれませんか？」

頭の横で土下座するフェレットを見つつ

『異世界にも土下座があるんだ』

などと余計なことを考えていたR×は

「俺のやり方（キングストーンでのエネルギー開放）があるから封印の必要はないのでは」

と聞き返す。

「あの方法は万が一の失敗が怖いですし、それに次元震を起こしかねないエネルギーの処理なんて貴方の身体へのダメージがひどいのでは？」

ここでR xは身を起こしあぐらをかいてユーノと向き合う。

「その事で質問がある。

現時点で俺は3個のジュエルシードのエネルギー開放をしているが、正直あれにそれほどのエネルギーがあつたとは思えない。

……あれは偽物じゃないのか？」

「……?!」

R xの発言に息を飲むユーノ。

R xは「街一つ吹き飛ばすエネルギーを持つ怪人」グランザイラスと闘った経験や、怪魔界の崩壊に巻き込まれた経験がある。

その経験から開放したジュエルシードのエネルギーがどの程度なのか目算を着けて、「爆発したら海鳴市ぐらいは消し飛ばが、それ以上はない」と判断していた。

「ジュエルシードは今回初めて発見されたものではなく、過去にも見つかったっているね？」

「あ、はいそうです。

だから歪んだ形の願望成就や次元震の記録があつて、だから僕が回収しなきゃいけないと思つたんです。」

「…今回のあれは偽物、もしくは過去に回収されたジュエルシードで特にエネルギーが少ない物なのではないかな？」

「…どういう事なんでしょうか？」

ユーノの声が強張っていた。

「……この事件の裏で何か企んでいる奴がいると言ったことだね……」

重い沈黙が2人の間に落ちた。

その後しばらく話し合っていた2人だったが幾つかの事を決めてなのは達の方へ向かって行った。

結局、なのは達はジュエルシード集めを続ける事となる。

なのはの意志が固い事とユーノが言った危険性、さらに効率の問題からR xが折れる事となった。

代わりにR xに繋がる通信機と替えバッテリーをなのは、すずか、アリサ、フェイト、アルフ、ノエル、ファリンに渡し何かあればR xに即連絡できるようにした。

ヴラドとの交戦は絶対に避け最悪ジュエルシードを渡しても構わない旨を約束させる。

フェイトは不承不承といった感がありありと出ているR xは正直不安を覚えた。

すずかは今回の件で、なのは達の魔法関係の話を隠し「仮面ライダー」と怪人が闘った」事だけを現在の月村家の差配を取っている姉の忍に伝える事にした。

好奇心が強い姉が魔法に興味を持って事件に首を突っ込む事を恐れたのだ。

本来ならば忍に全て報告すべきノエルとファリンも、安全面からすずかの提案に従う事にした。

さすがに「仮面ライダーと怪人の闘い」に関わろうとは思わないだろうから、魔法の情報を伝えなければ良いと判断していた。

アリスもなのは達の件を伏せ「仮面ライダーと怪人が闘った」ことだけを両親に伝える事にした。

たぶん両親は魔法の事など信じないだろうから（アリスのリアリストは両親の影響であろう）というのもあるし、万が一信じられて「危険だから」となのは達との友達付き合いを禁じられるのも嫌だからである。

最後にノエルとファリンに仮面ライダーの活動資金の口座への一回だけのアクセス権を設定してそこに庭の修復の見積もりを送るよう指示してR×は月村邸を立ち去ることにした。

帰りの道すがらR×はなのはとの会話を思い返していた。

R×はなのはに問うた。

何故ここまで状況が悪化したのに未だ関わろうとするのかと。

ユーノはまだ解る。

ジュエルシード発掘の指揮を執っていた事からの責任感、両親を早く亡くしスクライアー族全体で育てられたため一族に貢献したい、恩返しをしたい…裏を返せば失態を犯し自分の有能さを示せなければ一族内で身の置き場が無くなるという強迫観念が動機である。

状況を整理するためのユーノとの会話からこれ等の事をR×は理解していた。

R×…南光太郎も両親を亡くし秋月の家で育てられた経験がある。

ユーノのような気持ちになったことは幼少の頃から何度でもあった。また仮面ライダーという存在は

「闘いが無ければ自分の存在する意味など無いのではないか」

という「存在理由」の悩みを抱え続ける者である。

だからユーノの行動理由とその歪みはよく解る。

またフェイトは母親の愛情…歡心を買わんが為の行動であることは既に知っている。

この時点で

「フェイトの母親に人格的問題がある可能性」

はとりあえず置いておくとして、子供らしい判断基準と理由であるとR xは思っている。

しかし、手加減していたとはいえ自分のような相手に何度も向かってくる命の危険を鑑みないその歪みは見過ごせないが。

それに比べてなのはには、ここまで固執する理由が見えない。さほど多くを話した事はないが、ユーノから聞いた分には家庭環境も問題なく彼女自身の性格も問題無さそうに思える。

あの年齢でスリル中毒だのアドレナリン依存症だのは考えたくない。

そんなのは、難民救済活動の資金集めのパーティーで会ったヨーロッパやアメリカのセレブリティたちのどら息子達だけで十分である。

だからなのはの口から出た答えには首を傾げた。

「私、魔法の他に取り柄が無いんです。」

曰く、運動が苦手で少しトロイ、すずかやアリサのように将来やりたいことが有ってその為に何かしているわけでもない、これが得意だこれが好きだと他人に胸を張って言えるものがない、そんな自分に初めてできた特別が魔法なのだと。

だから手離したくない。R xには迷惑をかけないようにするから最後まで手伝わせて欲しいのだと頭を下げた。

R xはなのはは頭が回りすぎるのだろうと思った。

自分があればぐらいの歳は、たまに秋月家の養い子である自分の身に

想いを馳せることが有っても普段は学校の宿題とその日のおやつとサッカークラブのレギュラーになれるか位が彼の悩み事であった。

自分に何の取り柄が有るのかなどと考えたのはだいぶ後だったような気がする。

さて、どうするとR×は考える。

恐らく自分が反対したところでこの子供たちは止まらない。

今までも幾度か出会ったことのあるタイプの人間だ。

ならば、勝手に動かれて事態を悪化させられるよりはこちらから選択肢を狭めておくか？

少し考えた後R×は答えた。

「……なのはちゃん、もう一度確認するよ。  
俺が言った事を守ってくれるね……」

「…はい…」

「…自分の身を守る事を第一に考えること。」

「…はい…」

「ならばよし。」

「！？はいっ！」

難題を提示した後こちらからハードルを下げたように振る舞い相手に「妥協してもらった」

と思わせることで約束を守るように心理的な枷を付ける。

様々な相手との交渉が必要となる難民救済活動で憶えた技術である。

子供相手に使うことに嫌悪感を憶えつつも、少しでも子供達にかかる危険を減らすためとR xは己を納得させた。

こうしてR xは月村邸を後にした。

R x…南光太郎はいまだに考えていた。

なのはあの劣等感は何処から来るのだろう。

問題無さそうな家庭に見えて何かあるのかも知れない。

いや、問題の無い家庭など無いのかも知れない。人間は誰もが何かの歪みを抱えていると以前知り合った心理学者が言っていた。その学者に言わせると自分たち仮面ライダーなぞは、強迫観念の塊で偏執狂の権化らしい。

ならばなのは達の歪みなどは、人ならばあつて当然のものなのかも知れない。（一名フェレットだが）

考えて見れば、己の存在の拠り所を何かに求めるのは誰しもやっていることである。

なのはの場合それが魔法に対してであり、それが強く出ているだけなのだろう。

ただし気になってもいる事がある。

紛争地帯のゲリラ兵にされていた子供（敵対勢力下の村を襲い大人を皆殺しにして子供を拐い武器を持たせて兵士というか戦闘用の奴隷として扱う）を助けて社会復帰できるようにケアをするのだから、戦争や殺人といった強烈すぎる体験から一般社会に馴染めない元少年兵士達が数多くいる。

彼らは、武器を持ってないことに不安を憶え周囲に対して攻撃的になる。

また、平穏な生活を送ってきた他者に対して劣等感を持つたり逆に侮蔑の感情を持ったりする。

今まで光太郎もそんな例をいくつも見てきた。

だから、なのはも「魔法を使って怪人と渡り合う」ような強烈な経験をして平穏な生活に戻るのが難しくなってしまう危険性が無いのだろうかと考えてしまう。

直接戦闘に関わる事はないように敵に戒めたがやはり不安が残る。

それに、こちらの点で言えば明らかに指示に不満を持っていたフェイトの方が問題だろう。

ジュエルシード欲しさに無茶な事をしそうである。

とても眼を離せそうにないと光太郎は溜め息をついた。

子供達への精神的な悪影響を心配するのは良いのだが、その比較対象が「戦争によるトラウマ持ちの子供」であるのがそもそもオカシイのだが…

…仮面ライダーBlackRx…南光太郎、彼もまた闘いの日々により色々と歪んでしまっているのだろう。

「…俺、事件に関わるなって言っただけで魔法少女やめろとは言っていないんだが…」

なのはの勘違いに苦笑を浮かべつつ光太郎はマシンを駆った。

フェイトは月村邸を立ち去ろうとしていた。

今回封印したジュエルシードはそのまま持ち帰ることにした。

Rxからヴラドからの襲撃の可能性を示されたが、今さら持っていたといまいと危険性は変わらないと押しきった。

Rxからの指示に渋々ながら従う旨を返すとRxも折れてくれた。

転送魔法を展開しようとしたところでなのはが声をかけてきた。

「…フェイトちゃんは どうして ジュエル シード を集めるの？」

間違いなく危険な目にあうというのに、 と言う疑問を言外に込めて。

返すフェイトの答えは

「前も言ったけど、 答える必要がない。

それに、 同じことが貴女にも言える。

どうして ジュエル シード を集めるの？

R x、 彼が関わるなど言っているのに。」

「…それは…」

「答えられないなら… 私も言うつもりはない。」

リビングで アリサ 達にかまわれていた時とは違う表情に乏しい顔で  
言い切るフェイト。

なのは R x に答えた理由を口に出さなかった。

あれは嘘ではないがそれだけかと言えば違う気がする。

フェイトにはそれを答えなければいけない気がしていた。

口ごもるなのはに

「あなたは関わらない方がいい。

優しいあなたは危険なことには関わらない方が…」

そういい残してフェイトは転送魔法を発動させ魔方阵の中に消えていった。

アルフもそのあとを追って転移してゆき、残されたなのは傾きかけた日差しのなか魔方阵の消えた跡を見つめ続けていた。

月村邸での事件から一週間ほどが過ぎた。

帰宅したなのはが

「仮面ライダーと怪人が闘った」

事を家族に話すと、皆一様になのはを心配しケガの有無やショックを受けていないかと質問攻めにあった。万年若作りの両親士郎と桃子は年代的に仮面ライダーを知っていたが、兄恭也と姉美由紀は知らず士郎が説明する件があった。

以前やっていたボディーガードの仕事で、仮面ライダーと何度か一緒に闘った事があると語る士郎は少し得意気であった。

仮面ライダーや怪人の存在を、父が言うのなら本当なのだろうと受け入れつつも恭也と美由紀はその場に自分達が居れば怪人を倒してなのはに怖い思いをさせることもなかったのにと苦い表情を浮かべた。

そんな二人に士郎は

「小太刀一本で完全武装した装甲車に勝てるなら、可能性がある…」

かな？」

と言って二人の顔を青ざめさせていた。

翌日からなのはの生活が変わった。

早朝からの魔法の訓練が始まったのだ。

ユーノと話し合い、身を守る為にも逃げる為にも魔法が必要だからと結論付け4時に起床し街の裏手の山までジョギング、その後ユーノが結界を上空に展開してその中でののはの魔法の訓練がユーノの指導のもと行われた。(ちなみにこれはR×が「なのはちゃんを死なせたくなかったら身を守るすべを身に付けさせる」とユーノに忠告していたからである)

内容は飛翔魔法の慣熟訓練にシールドの構築に展開速度を早くする訓練、さらに砲撃魔法の威力を上げるための魔力収束と発射速度の向上、また砲撃以外の速度重視の補助的な攻撃魔法の開発と密度の高いものである。

これらを行い6時過ぎに帰路につく。

道場で朝稽古をしていた土郎達と合流しシャワーで汗を流した後に朝食を取り学校に向かうのがあれ以来なのはの朝のスケジュールになっている。

同時にユーノも今まで使っていた各種魔法の術式を再構築し、バインドやシールドはより強固にかつ他の魔法も含めて素早く展開出来るようにした。

学校にいる間なのはは、マルチタスクという思考を分割し平行処理を行う魔法

（もともとは同時に複数の魔法を起動させた際に各魔法に供給する魔力のコントロールを行い状況に応じた魔法の微調整を行うため思考を分割するのが目的）

を使い、日常生活の中でも魔法を使う行動のシミュレーションを行い続けた。

日常生活を送りながら、頭の中で詰め将棋を一日中延々とやり続けるようなものである。

なのはが学校にいつている間ユーノは高町家を抜け出して（自分のベッドとなっているタオルの敷かれた藤の籠に魔法で「眠っている自分のデコイ」を置いて）ジュエルシードの探索に向かうのが彼の日課になっている。

そして放課後、なのは達は合流して夕食までの時間ジュエルシードの探索を行う。

ずずかとアリサも手伝いたげだがヴラドと出会うのはさすがに勘弁してほしいのではなのは達に気を付けるように言って帰宅していく。

夕飯のあとはさすがに家から抜け出せないで、宿題を片付けてから入浴を済ませてベッドに入る。

「…おやすみ、ユーノくん…明日もガンバローね。」

すると5分もかからず寝息が聞こえてくる。

寝付きの早さが訓練と搜索の疲れによるものと考え、ユーノは罪悪

感を憶えながら藤籠のベッドの中で眠りについた。

「…おやすみ、なのは…  
良い夢を…」

そして現在、回収できたジュエルシードは1個増え3個となり訓練の末なのはの戦闘スタイルも一応の完成を見た。

飛翔魔法で空中に優位な位置を取り、膨大な魔力量によって強固にかつ分厚いシールドを張り新開発の射撃魔法…七つの移動砲台を操り高速かつ途切れのない射撃を浴びせ続けその間に魔力を収束、砲撃魔法に繋げるといふ形である。

実戦で形通りに使える訳ではないが、行動や思考の指針となるのでスタイルの完成は間違いなくなのはの力になる。

結界内でユーノが操るデコイ相手のシミュレーションを行い、デコイをバカバカ撃墜しているなのはを見据えてユーノは手応えと言うか満足感の様なものを感じていた。

『…むう…僕って教師とかの適正あるのかな？  
まあ、なのはの桁外れの才能が前提条件なんだけど。』

軽く自画自賛しつつも、なのはの戦法にふと既視感を覚えた。

少し記憶を探るとある光景を思いだし何とも言えない困惑したような疲れたような表情を浮かべる。

『…足を止めて分厚い防御で身を守りつつ手数で攻撃、のちに大技に繋げる。』

これってR×の射撃戦形態の動きだよね？  
『ロボライダー』

ユーノの視線の先で、デコイを全て撃墜したなのはガッツポーズで笑みを浮かべていた。

月村邸の事件から一週間、フェイト達の生活にあまり変化は見られなかった。

朝起きて、シリアルやゼリー食の朝食を済ませ二手に別れて搜索を開始する。

そのまま夜まで途中に休憩を入れつつ搜索を続ける。

セーフハウスのマンションに帰ってきたら、インスタント食品やコンビニ弁当の夕食を済ませ、再度搜索に出る。

深夜まで搜索しようやく終了。

シャワーを浴びて泥のように眠りにつきフェイトの一日が終わる。

これまでは…

今日はシャワーを浴びたあと、昼間に買ってきた本を広げて熱心に読み始めた。

「…フェイト、何読んでんだい？」

シャワーを終えたアルフが覗き込んできた。

「…うん、仔猫の写真集とペットの雑誌。」

「…猫飼いたいのかい？」

「ジュエルシードの回収が終わったなら…母さんに頼んでみようと思  
つて…」

寂しげなフェイトの答えにアルフが困ったような表情を浮かべる。

『あの鬼ババが許すかねえ？』

内心そう思うが、普段感情をあまり浮かべないフェイトが僅かに微  
笑みを浮かべながらページをめくっているのを見て口を閉じる。

しかし、ふと別の考えが脳裏をよぎりフェイトに尋ねてしまった。

「…ペットだね？」

使い魔じゃなくて…」

「…そうだよ？…」

何を言っているのだろう、と言う顔でフェイトが聞き返す。

「いや、何でもないよ」

脳裏に後輩の猫の使い魔を従えて、フェイトの世話をやく自分の姿  
を思い浮かべて

『そーゆーのも悪くないかもね。』

と苦笑した。

『…まあ、あり得ないんだけど…』

使い魔とは死亡、もしくは死亡寸前の動物に儀式魔法を施して人工の魂魄を与えて産み出すものだ。

つまり、フェイトがペットにした仔猫を使い魔に言うことは

「飼っているペットを使い魔にするために自ら殺す」

と言うことだ。

アルフは元々は野生の狼で死にかけているところを魔法の訓練中のフェイトと出会い、使い魔となることで命を長らえた。

（正確には生前の記憶を残した人工の魂を与えたのであり厳密な意味で命を長らえたとは言えないのだが）

使い魔が欲しいからではなく、死んでほしくなかったから自分を使い魔にした優しい少女である我がご主人様が、そんなことをするはずがないのだから。

「フェイト、そろそろ寝ないとだめだよ。」

そう言ってベッドに倒れ込んだ。

「うん、わかったよ。  
もう寝るから。」

アルフにそう答えて写真集を閉じる。

寝室に向かいながら昼間のことを思い出す。

ジュエルシードの搜索中、猫カフェを見つけてしまいついフラフラと入店してしまった。

「…これは休憩…そう休憩だから問題ないんだ…」

そう自分にいい聞かせて、1時間ほど粘ってしまった。

あまつさえ、店員さんやお客さんと猫写真の取りっこをしてしまい、お土産にもらって来たりしてしまった。

『…あれは今回だけ…そう、次はもうないよ。』

今日もジュエルシードは見つけられなかった。

手元にあるジュエルシードは未だ2個、次々と現れる競争相手、焦りがないと言えは嘘になる。

しかし一週間前の事件以来何か焦りとは違うものを感じてもいるのだ。

高町なのはと名乗った現地人の魔導士。

敵対もしたし協力もした。終いには一緒に大きな風呂にも入った。

目まぐるしい数時間の最後に、もう関わるなと警告をして別れた。

でも、再び彼女と出会うような気がする。

出会えば再び闘うことになるのだろうか？

フェイトは漠然とした不安を感じていたが、これがなのはと出会う以前は考えた事もないものだとは気づいていなかった。

ベッドに潜り込みつつ、次も負けないとつぶやきフェイトの意識は眠りへと沈んでいった。

海鳴市沖十数？の海上、停泊している大型客船グローリアス号。

ヨーロッパの富豪が所有するという船だが、実際はデルザー軍団の移動基地の一つであり内部には様々な武装や装備を備えている。

その内部、作戦会議室にあたる一室に3人の男の姿があった。

ほの暗い照明の室内に品の良い装飾の椅子にくつろぐように座るゆつたりとしたガウンに身を包む少年？と壁際の照明の影になるところで壁にもたれて立つ二人の巨漢。

巨漢の一人が口をひらく。

「デハ次ハ我がマイルトイウコトデヨロシイカ？」

流暢な外人日本語で語る巨漢に少年が答える。

「…かまわぬ、倒せるならば倒してみせよ。」

「…ククク…龍騎士、龍ノ息子ト恐レラレタヴラド卿ヲソコマデ追イ詰メタ仮面ライダー、会イマミエルハ至福ノ時ト言エヨウ。」

「…努々慢心せぬことよ。…ククク…我が如く身の半ばを碎き焼かれ、このような脆弱な姿で生き恥を晒すことは卿には辛かるう。」

…つまり、この少年はあのヴラドなのだ。

あの蝙蝠の群れが破壊されなかった体組織の残りで、それを再生させて作り上げたのがこの少年の体なのだ。

ここから元の体まで再度造り上げるにはいま暫しの時がかかるらしい。

「…御忠告感謝ヲ申シ上ゲル、確力ニ我ニハ耐工難イ、ヴラド卿モ辛力ロウ。」

揶揄するような言葉に少年…ヴラドが答える。

「…それが存外…未知の体験とはなかなか刺激的な物でな…」

「…ソレハソレハ…」

巨漢の苦笑が薄暗い部屋に流れた。

## 第6話 幕間と魔法少女達の日常（後書き）

今回は温泉旅行のエピソードをベースに、オリジナルエピソードを加えさらに二人目のデルザー魔人を登場させる予定でたぶん前後編になる予定です。

設定資料？

高町なのは・9才

主人公その1

膨大な魔力量と天賦の魔導の才を持つまごう事なき天才。

強い意思に責任感をもつ少女だが、それは幼少期の「大怪我をした父の世話を理由にした家族の育児放棄」により生まれた「良い子にしていなければならない」と言うトラウマの裏返しであるため実は精神的な余裕はかなり乏しい。（つまりテンパリやすくキレやすい）

また自分に自信が無いため初めて手にいれた「特別」である魔法に執着している。

しかし、原作よりもかなり早い段階での「魔法バレ」が起きたのでアリサとすずかという理解者を得ることができ精神的な負荷は軽減されている。

さらに、早い段階で「魔法をものともしない怪物」に出会ったことにより「魔法はあくまでスキルやツールでしかない」ことを知るこ

となる。

主人公たる彼女が「魔法が全てではない」ことを知ることでの作品世界の歴史がゴツソリ変わることになる。

いわば彼女はこの世界の特異点（仮面ライダー電王的な意味で）と言える。

フェイト・テストロッサ

9才（？）

主人公その2

母プレシアの命を受けてジュエルシードの回収にやってきた異世界の魔導士。

魔力量ではなのはに一步譲るが正式な訓練を積んでいるため現在の實力はこちらが上。

他者と触れ合った経験が無いため行動が少し独特で、はたから見るとちよつと天然さんに見える。

母に対する依存が強いが、R xとデルザー魔人の乱入によりなのはアリサすずかと出会いそれにより他者との触れ合いを経験していくことになる。

またその名の通りなのはにとって運命の出会いとなる…のか？（特異点たるなのはの変化によって違う結末を迎えるかも知れない）

コーノ・スクライア 9才

主人公その3

物語の発端になった（現状）フェレット。

原作では、攻撃以外の魔法なら何でもこなす「作劇上の不都合を背負わされるために設定された」キャラクター。

この作品ではなのはのコーチ兼女の子に弄られる癒し系マスコット。

ただし、Rxに「事件の裏側」を仄めかされデルザー魔人の介入にも気を配らねばならないため本人は気苦労が絶えない。

魔導士としての実力は、体調が万全ならたとえなのは達でも彼を倒すのは難しい。（彼が敵を倒す手段も無いが）

真面目な性格で余計な苦勞を背負い込むタイプ。

本編でもなのは達のフォローに駆け回ることになる予定です。

第7話 海竜祭の夜 前編

温泉に行こう（前書き）

亀更新7話目です。

温泉旅行エピソードにオリジナル展開が入っています。

空を駆ける。

超次元装甲騎ライドロンが海鳴の夜の空を駆ける。

ルーフの上に立ったR xがその足元にあるスノーボードのようなパ  
ーツでライドロンの空中の機動をコントロールしている。

もともとライドロンは異次元空間に突入する能力があり、上下の区  
別のない異次元空間内での3次元機動のための推進システムを持っ  
ていた。

それを空中戦に対応できるように調整し、より感覚的に操縦するた  
めのシステムを取り付けたのが現在の空飛ぶライドロンである。

R xはバイオリダーのゲル化能力で空を飛ぶことが出来るがエネ  
ルギーの消費が激しい。

その欠点を補うために開発されたのがこれだ。

改造したのは結城丈二と本郷猛（仕事の合間のストレス解消）の二  
人。

今現在R xは翼長3 mはあろうかという蝙蝠のジュエルシード憑依  
体を追っていた。

R xの跳躍限界を越えた高空に逃れた憑依体を追うため、海鳴市の  
外に隠しておいたライドロンを召喚し追撃に移った。

数分の追跡の後、ライドロンは憑依体に接敵した。

亜音速（時速にして800km以上）近い速度での移動で海鳴市からはかなり離れてしまった。

逃げる憑依体の体をマクロアイの解析能力で調べ、ジュエルシードと憑依された本体がどこにあるのかを見つける。

たとえそのエネルギー源である魔力がR×には視認感知出来なくても、体を動かす以上熱の発生とその分布が出来る、それをR×のマクロアイの赤外線感知能力で見ることにより「最も熱の高い部分」を見つける。

つまり、そこにコア…ジュエルシードと被憑依体が存在する。

この憑依体のコアは頭部。

つまり、

「R×チヨップ!!」

すれ違いざまにハイブリッドエネルギーを纏った手刀で憑依体の首を切り落とす。

光の粒子となって消滅する憑依体の首から、蒼い宝玉と憑依元になった蝙蝠が現れる。

蝙蝠が一般的なキクガシラコウモリではなく、所謂フルーツバット（和名オオコウモリ：果物が主食、猫位の大きさがある、小熊みたいな頭をしている）だったのには驚いたが初めて見たときに八百屋を襲って果物を食っていたのを思いだし納得する。

失神しているオオコウモリを抱え、次にジュエルシードを右手で掴

む。

幸いにも憑依体から取り出された時点で沈静化しており、今すぐ暴走する危険は無さそうだ。

そう思った瞬間、強烈な殺気がR×の背後から叩きつけられる。

背後から迫る殺気に、掴んでいたジュエルシードを上放って右の手刀を叩きつける。

予想通りに飛来していた矢をへし折り放っていたジュエルシードを掴もうとしたとき、へし折った矢の影に死角から飛来するように放たれたもう一本の矢が存在するのに気づく。

銃弾を見切るR×の知覚と反射神経といえど対応できない配置とタイミング。

回避も防御も間に合わず、R×の右胸を、矢が貫いた。

## 第7話 海竜祭の夜 前編

### 温泉に行こう

私立聖祥大学付属校には9月の半ばに連休がある。

学園の行事のスケジュールの都合で、9月後半の祭日をずらすという私立校ならではの力業だ。

その連休を利用して高町一家は温泉旅行に出かける事となった。

「仮面ライダーと怪人の闘い」に巻き込まれて以来何やら落ち着きの無いのはを心配しての事で、環境を変えてみれば気分転換になるだろうとの士郎の提案であった。

参加メンバーは士郎、桃子、恭也、美由希、なのはにユーノの高町一家全員プラス一匹の他に月村家から忍、すずか、ノエルとファリンのメイド姉妹、そしてバニングス家からアリサが参加していた。

つまり、怪人を見て怖い思いをした娘たちを気分転換させようという目的の温泉旅行なのである。

多忙な月村家とバニングス家の保護者達は残念ながら不参加となっていたが、両家から信頼されている高町家の引率ということで子供達は参加を許されていた。

ノエルが運転するワゴン車にファリンと子供たちが乗り、高町夫妻と恭也と美由希と忍がもう一台のワゴン車に乗り士郎の運転で一路温泉旅館を目指す。

怪人被害者組を一纏めにしたのは本人達の希望で、士郎達は色々と話してフォローをしたかったのだが子供達に車をさっさと占拠されてしまいノエルとファリンが苦笑しつつも「責任をもってお世話させていただきます。」と言うので任せることにした。

こうして目的地まで2時間程の車の旅が始まった。

「はい、ユーノくんもうケースから出てきていいよ。」

「ありがとう、なのは。」

これが子供達で固まった理由。

ユーノも交えての会話を楽しむため、アリサとすずかの希望でもあった。

当初、アリサとすずかはユーノに対して思うところがあった。

危険なことになのはを巻き込んだ事と自分達に秘密を作っていたことである。

だが一度腹を割って話す場をもつけ、ユーノが二人の非難を全面的に受け入れ言い訳をしなかったこととジュエルシードの危険性の説明をしたため二人もそれ以上の非難をしないことをなのはと約束したのである。

「これ以上は只の八つ当たりよ。」

「そうですね。ではこれで私達もユーノくんのお友達ということでは？」

その後、なのはの訓練とジュエルシードの搜索でゆつくり話す機会が無かったため今回のチャンスを少々強引にものにしたのだ。

と言う訳で、現在ユーノは

「ちょ、ちょっと二人ともやめ!?      アーッ!?」  
全力でモフられていた。

バックミラーに映るのは達の乗るワゴンが、なのは達の騒ぎで少し揺れているのを見て、

「うーん？なのは達は大丈夫みたいだね、桃子。」

「そうね、士郎さん。」

高町夫妻がにこやかに見つめ合い、

「ほら、恭也あーんして。」

「よせよ忍、恥ずかしいだろ。」

「私は恥ずかしくないから平気♪」

などと恭也を忍が弄り、

『…か、勘弁して…』

美由希がげんなりしていた。

暫くして一行は港町に程近い温泉街へと到着した。

疲れきった表情の美由希以外は和気あいあいとした一行は旅館にチェックインし、部屋に入ると手早く荷物を片付けて早速浴衣に着替えて温泉に入る準備を整える。

「よし、大浴場に行きましょうか。」

ようやく立ち直った美由希がなのは達を誘うと

「はい。」

と返事をしてなのはがおもむろにユーノの身体に手を回して抱えあげる。

「キュッ？」

驚くユーノに

「一緒にお風呂に入ろうね」

「「ね」」

「キュー（ええー）！？」

ユーノはあわてて逃げ出し士郎の肩に駆け上がる。

再度捕まえようとして士郎に駆け寄るなのは達に彼が

「「こらこら、大浴場にペットは連れて行けないんだぞ。」

「「「ええー？」」」

あからさまに落胆する三人と胸を撫で降ろすユーノ。

そのユーノを見て美由希が目を丸くしていた。

「だから、部屋風呂かペット湯にしておきなさい。」

と言う士郎に、

「キキユーー（あんた何言ってんだー）！？」

「……はい……」

三人と一匹の声が答えた。

暫く後、浴衣姿でロビーの売店で湯上がりのドリンクやアイスを購入するのは達三人と一匹の姿があった。

ちなみにペット湯は人間が入れないと言つか入れるほど深くないので、結局部屋風呂でした。

抵抗虚しくお風呂に連行されたユーノは、温めのお湯で綺麗に洗われ清潔なタオルで拭きあげられてフワフワの毛並みで現在なのは頭の上で精神的疲労でぐったりとしている。

皆の分のドリンクとお菓子も買って部屋に向かっていると、前から歩いてきた誰かにぶつかった。

「おっと。」

「ごめんなさい。」

と互いに身体を離してから

「……あれ？」

二人して声をあげる。

なのはの前には浴衣姿のアルフがいた。

時間は前夜に遡る。

ジュエルシードの反応に気づいたフェイトとアルフは空を駆け移動し続けるそれを追いかけていた。

しかし移動速度が速すぎるため後を見失わないように追いかけるのが精一杯であった。

そして、移動を止めたと思ったら反応が弱くなり感知魔法の手応えが不確かな物になった。

その地点まで移動し反応を探るも、相変わらず不確かで特定が出来ず二人とも疲労が激しかったため休息を取ることにした。

フェイトは少しの休息で搜索を再開しようとしたが、アルフが説き伏せ飛び込みで宿をとり（幸運にもとれたと言うべきか）一晩ゆっくりと休んでからの搜索をフェイトに吞ませたが、代わりにアルフが今日一日の完全休養をフェイトに言い付けられたのだ。

そして現在、温泉街共通の入浴券で温泉宿巡りをしていたアルフはなのは達と鉢合わせとなったのである。

「おチビちゃんたち、なんでまた此処に？」

「アルフさんこそ？」

あ、フェイトちゃんも居るのかな？」

両者の間に微妙な緊張感が走る。

「…あたしゃお休みを貰ったんだよ。

フェイトの事は…あんたには世話になったけど言うわけにはいかないね…」

バツの悪そうな表情で答えるアルフ。

そのままなのは達の横をすり抜けていく途中で振り返ると

「…もうジュエルシードには係わるんじゃないよ。

でないと、次にあったときはガブーツていくからね。」

おどけた顔で歯を剥いて見せた。

フェイトは旅館を出た後、探索魔法を起動し見失ったジュエルシードを探し続けていた。

海辺の街は何やら祭りを控えているらしく街中には飾りつけが成され、気の早いテキヤが屋台を開店させている。

この世界の風習に疎いフェイトは何やら街中の賑やかな雰囲気戸惑いつつ、探索魔法を起動させ海沿いの道路を歩いていく。

昨夜充分に睡眠をとり朝食も旅館のものを食べてきた。（フェイト達は和食もOKだ）

体調は良好で足どりも軽い。

認識阻害魔法を起動し、街中を探索魔法で探りながら歩く。

やがてフェイトが疲労や喉の渴きを覚えた頃、探索魔法に奇妙な反応があった。

探索魔法はレーダーやソナーに近い。

対象の魔力に反応しての反射を感知するのだ。

感覚的に言うと、チリリツとした感じが頭に走り大まかな方向や魔力の大きさが感じ取れるのだ。

それが今回は違う反応を示した。

何やら柔らかいものに跳ね返されたような感覚があったのだ。

ジュエルシードの反応ではない、しかし魔法の反応なのは間違いないが今まで感じたことの無い反応ではある。

いつもならば、ジュエルシードでなければ無視していた所であるが今回は身体的余裕がフェイトに好奇心を持つ事を許していた。

先ほどの反応を追って暫し歩くと、海岸通りから少し奥まった所から山の上に向かって伸びる石造りの階段があった。

「…この上からさっきの反応があった？…」

少し警戒しつつフェイトは石段を登り始めた。

15分後、フェイトは自分の判断を後悔していた。

遠いのだ、石段の終わりが。

もう少しで終わりが見えているのでフェイトは意地になって石段に登って行く。

普段なら光学的認識阻害魔法… オプティックハイドを使い姿を消して飛行魔法で飛んでいく所である。

しかし今彼女は一人であるため、普段ならアルフに主人らしく見せる事を意識して表に出してこない子供っぽい意地っ張りなところが現れていた。

まだまだ強い陽射しの中、フェイトが石段を登って行く。

既に探索魔法と認識阻害魔法を掛けるのを止めている。  
体力と集中力をそちらに回す余裕がもうない。

魔導士としての戦闘訓練を受けているとはいえ、9歳の子供の体力などたかが知れている。

さらに言えば魔導士の訓練事態、肉体に強化系の魔法をかけて動き回るのが前提で「素の肉体能力でゲロを吐くまで動き回り肉体の限界を越える」ような訓練は行わない。

魔法を使って行動する為に必要な体力を維持するのが目的なのである。

余談であるが「魔法を使って肉体を強化できる」ためフェイトの出身世界には武道、武術といった「特殊な身体運用法や鍛練法により超人的な力を身につける」技術は存在しない。（もしくは過去に失

われている)

かろうじて、魔法との組み合わせを前提にした格闘術が存在するくらいである。(地球でいうキックボクシングぐらい、バリアジャケットの防御があるので投げて地面に叩きつけても関節を極めようとしても抵抗が大きいので柔道系も発達しない。)

鍛えてバリアジャケットをぶち抜けるまでの技を身につけることは出来るが、それよりは魔法を覚える方が早いし効率的である。)

何が言いたいかと言うと、9歳児の体力しか持たないフェイトが石段を登り切った時彼女の疲労は限界で荒い息についてそこにへたりこんでしまったのは仕方の無いことだと言いたいのである。

荒い息の中で彼女は

「…私なにやってんだろう?」

と考える。

いつもと違う土地、良好な体調、単独行動、そして祭りの準備で賑やかな街。

これらの要因で、自分も浮かれていたのだと気づくほどフェイトは自分を客観視していないし出来るほど冷静な性格でもなかった。

まだまだ強い陽射しの上にフェイトの着ている服は黒のフリル付きブラウスであるため熱が籠もってしまい軽い脱水症状をおこしてしまっていた。

スポーツドリンクでも買っていれば良かったのだが、「手元に水分

が無い状態で脱水症状になった経験」

が無いので前もって準備するべきことに気がつかなかった。

バリアジャケットを展開しその生命維持機能を使い体調を戻すことや、念話でアルフに連絡する事も気付かない。

疲れて疲弊した身体と思考で立ち上がろうとして目眩を起こし脚がよろめく。

『…あ…落ちる?…』

そう思ったフェイトの背中を誰かの手が優しく受け止め、背中越しに

「貴女、だいじょうぶ?」

と柔らかい声が掛けられたところでフェイトの意識はスウツと闇に落ちていった。

アルフと別れたあと、なのは達はジュエルシードがこの近辺に存在すると考え、昼食後の自由行動で搜索に出ることにした。

士郎達の目を誤魔化すためなのは達三人プラスユーノで散歩に出ると言い、彼女らの行動を察したファリンが引率に付くと言うと士郎と恭也は「気をつけて言っておいで。」となのは達を送り出そうとし、桃子達女性陣は四人をサマードレスに着替えさせて洒落た日除けの帽子を被らせてから満足そうに笑って送り出した。

ジュエルシードの搜索はなのはとユーノの二人だけで事足りるのだが、アリサとすずかの二人がフェイトと会いたがったのと万が一二人がジュエルシードの発動に巻き込まれたり最悪あのヴラドに襲われたりしないようにファリンと共に一緒に行動することにしたのだ。

士郎達も万が一の危険性が在るのだが、彼らは逃げて身を護るぐらいは出来るとファリンが言い

「それに姉さんが付いていますから。」

と保証した。

今なのは達はユーノの探索魔法でジュエルシードを探しつつ海岸線の道を歩いている。

道沿いには「海竜祭」と書かれたのぼりが立てられテキヤの屋台がチラホラと営業されている。

ラムネやかき氷やらを買い食いしながらの搜索が行われ、その間わりと暇なアリサとすずかにファリンは手荷物の中に入れてきた自分たちとお揃いのサマードレスをフェイトに着せて写真をとる計画を楽しげに語っていた。

やがてユーノが奇妙な反応を捉え、そちらに向かうことになる。

「…反応があつたのはこの先だね。」

そう言つてユーノが見つめる先には、山の上の神社の境内へと続く石段がなのは達の前に存在していた。

20分後、なのは達は石段の途中で一休みしていた。

すずかの護衛としての役割もあり鍛えてあるファリンは別として、最近鍛えだしてはいるがもとは運動が苦手でまだ基礎体力が向上するほどの期間は鍛えていないなのは、運動は好きだが鍛えている訳ではないアリサ、見かけによらず怪力だが持久力と言う点では人並みのすずかと皆揃って石段にへたりこんで（ファリンがこうなると踏んで買っておいた）スポーツドリンクのペットボトルを空けている。

「…みんな、女の子がちょっとはしたないと思うんだけど…」

ラッパ飲みでペットボトルを空けているなのは達にユーノがファリンの肩から苦言を呈す。

風呂で弄られたお返しなのかドヤ顔のユーノと苦笑しているファリン。

「…うつさい、ユーノ。」

「…ユーノくん、自分で歩いてないでしょ…ドヤ顔はやめてほしいの…」

「…なのはちゃん、旅行終わったらユーノくんうちの仔たちとお見合いさせましょうか…」

すずかが何気に黒いことを言ってユーノが怯えてファリンの肩から落っこちる。

その様をひとしきり笑ったあと、三人は立ち上がり残りの石段を登って行く。

石段を登り切って鳥居をくぐったのは達の前には、森に囲まれたこじんまりとした神社が建っていた。

その境内には石畳の参道がありその周囲には玉砂利が敷き詰められ、白い着物と紫の袴の初老の女性宮司が竹箒で掃き掃除をしているのは達に気づくと会釈をしてきた。

ユーノは境内に入ってから探索魔法に懸かった奇妙な反応の理由に気がついた。

『…ここは聖域…結界になっているんだ。』

ユーノの出身世界の魔法はシステイマチックなモノでありオカルティックな要素は少ない。（根元的な点で、魔力素や魔力誘導集積器官リンカーコアの正体が解っていないが）

そのため宗教儀式的な魔法は存在していない。儀式魔法は、「手間が掛かる術式の魔法を行う」か「魔力素を大量に使うのでその収集のために儀式を行う」のでありそこに宗教的な要素はない。

宗教自体古代王朝の英雄…強大な魔導士であつた聖王を崇拝する「聖王教会」という教団が最も勢力を持っており政治軍事共に大きい発言力を持っている。

そこには所謂「創造神」「人は神の被造物」などという我々には馴染み深い概念は存在しない。

もともと遺跡の発掘…考古学的な仕事を生業としているスクライア一族の優秀な一員であるユーノには「魔法文明が発達していない世

界で宗教と結び付く形で存在する魔法の結界」などというものは、本来なら飛び付いて調べ尽くしたい程のものなのだが此処は我慢しておき探索魔法の反応を考察する。

おそらく、この結界は物理的な意味を持つものではなく所謂「穢れ」を遮断するもので聖域の「聖性」の維持のためのモノなのであろう。事実、境内のなかに入ると今まで感じていた暑さや疲労で感じていた不快感やイライラがスウツと消えていった。

自分が起動させた探索魔法の奇妙な反応…柔らかいものにぶつかったような手応え？もこの結界の特性なのだろう。

強く拒絶するのではなく、ヤンワリと横にずらすような。

考察を終えて我に帰ると、なのは達が固まっていた。何事かと思いいその目線の先に目を向ければ、神社本殿の横にある社務所の縁側に腰かけてアイスクリームを食べているフェイトの姿が目に入った。

胸に走る灼熱感に意識が一気に覚醒する。

胸部から喉を通り口腔を満たす鉄錆味の液体をえずいて吐き出しながらうつ伏せになる。

そのまま這いずって目の前の水溜まり…磯の岩場に溜まった海水に顔を浸け、さらにえづき吐きもどし海水で口腔をゆすぐ。

5分ほどそれを繰り返し、水溜まりの海水が血溜まりと化した頃にようやく南光太郎は咳き込みえずくのをやめた。

次いで状況把握。

現在位置は海岸の岩場。

自分が倒れていたのは、岩影で周囲から死角になっており今まで発見されなかったのだらう。

時間は太陽の角度と体感から昼過ぎと判断。

次いで身体ダメージのチェック。

両手足に損傷無し。

右胸を貫いていた矢は……無い、おそらく変身が解除されるまえに自力で引き抜いたのだらう。

……記憶がないのは幸いだ、改造人間の痛覚遮断でも対応できないとんでもない激痛があったはずだから。

矢で貫かれた右肺は再生完了、その際に肺の中に溜まっていた体液血液は先ほど排出済み。

代わりにサンバスクに貯めていた太陽エネルギーを使いきっていた。これは暫く変身できないが数時間太陽光線を浴び続ければ問題ない。

ライドロンは現状どうしているのか思念をとばすと、海中で待機中と返答が帰ってきた。

海中に転落したR×を回収しここまで運んできたのもライドロンであった。残念ながら、被憑依体のオオコウモリとジュエルシードはR×転落の際に海中に落ちてしまい現在行方不明とのことである。謝罪するライドロンに気にしなくて良いと思念を飛ばし陽当たりの良い岩の上に腰を下ろしてから昨夜のことを思い出す。

死角とタイミングを完璧に読んだ弓矢の攻撃。

銃弾を見切れる…音速を突破した領域に対応できる仮面ライダーに、  
いかに剛弓と言えども音速を越えることのない矢を当てるには対象  
の動き反応を見切りその防御を掻い潜らなければならぬ。

つまり、あの相手は「達人」であると言うこと。

厄介な相手が出てきたと思う。

問答無用の攻撃から敵だと考えて間違いないだろうがデルザー軍団  
なのか新たな勢力なのか対応が悩ましいところだ。

思考に埋没する光太郎にライドロンが連絡を入れる。悪い報告があ  
ると。

先だって連絡があつた高町一家の旅行先がこの近辺の温泉であると。

家族旅行が計画されその間ジュエルシードの搜索を休みたいとな  
のはから通信がありその事を光太郎は快諾した。

ゆつくり楽しんでおいでと言葉を添えて返事を返したのを憶えてい  
る。

不味いことになったと思う。

行方不明のジュエルシード、謎の敵、そしてなのは。

何も起きないとは考えられない。

「…嫌な予感がする。」

暗い表情で光太郎は空を見上げた。

## 第7話 海竜祭の夜 前編

温泉に行こう（後書き）

次回は後編の予定ですが、長引いたら中、後編になるかも…

設定資料？

アリサ・バニングス（9歳）

高町なのはの親友の1人。国籍はアメリカだが安全面から日本で暮らすことになったバニングスグループ会長の令嬢。

気が強い姉御肌で三人のリーダー役。

バニングスグループの跡を継ぐための英才教育を受けておりもとの頭の良さから歳にそぐわない発言が多く「将来はバニングスグループを継ぐ」と発言し、なのはの「自分には何も無い」コンプレックスの原因の一つとなったが、実際は

「将来はパパのお仕事を手伝うの」

と言う内容の語彙が増えているだけで、なのはや周囲が思っているほど彼女は大人びているわけではない。なのはの魔法がバレた後は内心「自分も魔法を使ってみたい」と思っているが普段とのギャップを気にして口には出していない。

フェイトに対しては一度話してみてもその押しの弱さから、無意識に庇護対象に置いている。

月村すずか（9歳）

高町なのはの親友の一人。国内有数の有力者月村家の次女。

この作品内では「夜の一族」設定は存在しないので吸血鬼ではないが素で怪力。三人の中ではストッパー兼参謀役、たまに黒い発言をして暴走する。

彼女も頭が良く工学系に強いため「将来は工学系の仕事」と発言してなのはにコンプレックスを抱かせた。この発言も「私は機械いじりが好き」の語彙が多いただけでやはり彼女も周囲が思うほど大人びてはいない。（本当に将来の仕事を決めているなら、SEだとか設計だとかロボット開発とかの具体的な発言がでるはず）

魔法の習得にはさほど興味は無いがしゃべるフェレットユーノには強い興味を持っている。

フェイトに対しては着飾らせて弄ってみたいと思っている。

アルフ（？歳、使い魔としては2歳）

フェイトの使い魔。

ベースは赤毛の野生の狼。格闘戦に強く飛行魔法やバリアブレイクにバインド、転送魔法とサポートに優れた能力を持つ。

少々ガサツというか粗忽な性格をしているが、フェイトに対しては忠誠心以上のものを持って仕えている。Rxを出し抜いた経験からフェイトの命令に従うだけでなく、彼女に箴言できるようにもなりつつある。

（ヴラドに対する奇襲を考えての潜伏、フェイトを強引に休ませるなど）

なのは達に関しては、未だなのはがフェイトに及ばないことからできれば事を荒立てずに終わらせて先々でフェイトの友達にどうかと考えている。

第8話 海竜祭の夜 中編

なのはとフェイト（前書き）

亀更新8話目です。

やはり長くなってしまい、中編となっていました。

内容はなのは達中心で、光太郎の出番は僅かです。

## 第8話 海竜祭の夜 中編

なのはとフェイト

「私はバニラが基本だと思うの。」

「私はやっぱりチョコミントがベストね。」

「アメリカ人でそういうドギツイ色の体に悪そうな食べ物好きですよね。」

私は赤城し〇れの抹茶フロートがいちばんです。」

「よし、喧嘩売ってるのね!!」

言い値で買ってあげるわ!!あと、ここは日本だ。着色料も天然由来の安全品よ。」

「僕はこのソーダバーのチープな味がなんとも……」

「私は白熊アイスが色々入っていて好きです。」

「……メロンアイスボールが好き……」

「……通好みね……あんたホントに異世界人?」

## 第8話 海竜祭の夜 中編

なのはとフェイト

海鳴市から車で2時間ほどの温泉街に隣接する港町。この町はこの週末に行われる祭「海竜祭」の準備をする人々で活気に溢れていた。

数百年の昔、海鳴の名が示す通りこの港町…元々の魚村が土地の中心であり、湯治客がやって来る温泉宿と豊かな漁獲量はどちらも村を豊かにしやがて大きな街へと発展していったのが海鳴地方の前身である。

土地の開拓発展とともに街の中心が移動して行き、この街は港町兼温泉街として（ある意味）取り残されていった。

だから、今準備が行われている祭も小さな町の地元民にのみ知られているような祭で多くの観光客が来るものでもない。  
もともと、町に伝わる伝説に端を発する儀式の色合いが濃い祭である。

その町の少し奥まった所の山の上にある神社「御伽舟神社」、その社務所の縁側でなのは達5人とフェレット1匹でアイスクリームを食べていた。

「…熱射病で倒れたところを助けられて此处で涼んでたと…」

事情を聴いてアリサが生暖かい目でフェイトを見ると、彼女はパイと目をそらした。

ユーノが食べきれない分のソーダバーを交代でかじっていたなのは達の目線もフェイトを追っている。

フェイトは今、普段着ている黒いブラウスとスカートではなくましてやバリアジャケットでもなく白い肌襦袢を着ている。

浴衣とは色々と違うのだがなのは達の目線は

「…やっぱり浴衣も良いなあ…」

と言っていた。

ちなみにフェイトの着ていた服は汗まみれだったので彼女を助けた女性宮司の手で洗濯されて境内の外の東屋に干されている。

縁側でアイスを食べているフェイトに気づいて声を上げたなのは達に境内を掃いていた女宮司は

「…あなた達のお友達かしら？」

と声をかけ皆をフェイトの元に案内し

「好きなものをどうぞ。」

といって売店のアイスやジュースを取らせ

「じゅっくりどうぞ。」

と言って境内の掃除に戻っていった。

なのは達の目線を避けたフェイトの右手の下で、奇妙な生き物が皿に置かれた桃にかじりついていた。

蝙蝠の体に小熊のような愛嬌のある顔、大きさは猫ぐらいで「チチッ」と鳴き声をあげながら桃の実をかじっては果汁を舐めとっている。

フェイトが社務所で休んでいた時に既にいたとの事で動物に詳しい

さすがオオコウモリ…フルーツバットと見分けて大人しい動物だ  
というので先程から皆で愛でながら話をしているのである。

…正確に言えば、アリサがフェイトをからかいそれに反応するフェ  
イトを見るのがメインになっているが…

話のメインがフェイトにサマードレスを着せることに移ったところ  
で、ユーノはなのはに頼んで肩に乗っかって神社の境内を散策し始  
めた。

此処にやって来る原因となった結界の詳細を調べたくなって、聖域  
の中を動物がチョコチョコするの不味かろうとなのはに協力を頼  
んだのだ。

「……なるほど…そうか…これは興味深い…」

なのはに、次はあっち今度はこっちと移動先を指示しつつ女宮司さ  
んに見えないように小さな魔方陣で解析魔法を起動させ神社の結界  
を解析していくフオリップ状態のユーノ。

「…そうか…そう言うことか…」

何やら結論が出たらしい。

そろそろ退屈になってきてチラチラと社務所の方を見ていたなのは  
は、サマードレスに着替えさせられたフェイトに気づいてそちらに  
移動しようとしたが

「ごめん、なのは。

これで最後だから神殿の前に行ってくれない？」

ユーノにそう言われて仕方なく小さな拝殿の賽銭箱の前に立った。

拝殿の格子戸の奥には御神体らしきもの…小さな船が安置されているのが見えた、そしてその上に紫の布で作った台に乗せられた蒼い宝玉も。

「あれって、ジュエルシード？」

「うん、思った通りだったよ。」

なのはのつぶやきにユーノが満足げに答えた。

少し傾いた陽射しが影を伸ばし始める頃、なのは達は神社を後にした。

なのはとフェイトの表情は硬い。

その理由はこの少し前の出来事まで遡る。

その後、ユーノはフェイトに拝殿にあるジュエルシードの事を話した。

神社の結界と何故此处にジュエルシードがあるかも含めて。

なのははこの神社の女宮司八幡 薫という老女に何故ジュエルシードがあるのか聞いてみた。

「…何か、この神社に似合っていないみたいで…」

それに対する女宮司…薫の返答は少し長いものになった、それはこの神社の縁起ひいては「海竜祭」の起源に関わる話だったからだ。

その昔、豊かな漁村であつたこの土地に長きに渡る不漁の時期があつたという。その理由は沖に住み着いた竜であつた。

竜を恐れて魚の群れが寄り付かなくなつてしまつたのだ。

村長がその竜に他所に行つてくれるように願い出ると、竜は「前の棲みかはもつと沖に在り日が射さなくて暗いから嫌だ。」と言う。「今の棲みかは日が射して眺めが良い。」と言う竜の話を村人に伝えると、一人の村娘が村長に「自分を竜の元に連れていつてくれ。」と言つてきた。

娘は竜に自分が生け贄になるから他所に行つてくれと頼んだが、「人など食つても旨くない」と竜が言うので娘は泣き出してしまった。

泣き止まない娘に閉口した竜は漁の間は退いていてやるので、その間退屈しのぎに面白い話をするように娘に命じた。

幸い娘は賢く物知りだつたので様々な話を竜にして漁の間竜を沖に連れていくことができた。

しかしいずれ話の種は尽きるだろうし、かといって話を長く続けなければ漁をする時間が足りない。

そこで村人達は話の種になりそうなモノを小舟に載せて沖へと流した。

これにより娘は話を続けられ、村には再び豊かな海の恵みがもたらされたと言う。

「つまり『海竜祭』とは豊漁祈願の祭りで、一般参加者が流し舟に載せて海に送り出すものとは別にこの『御伽舟神社』から神事として流すものがあるの。」

ほっそりとした面に柔らかい笑みを浮かべて女宮司の薫はなのはに語りかける。

「じゃああのジュエ…蒼い珠は…」

「はい、今年の流し舟に載せる宝物よ。」

先だって海辺の散歩中に見つけたの、あの綺麗なガラス玉。」

社務所の縁側に腰かけて、冷やした麦茶を飲みながら孫に昔話を語るように神社の起源を語っていた薫は、

「その時一緒に見つけたのがその子なの。」

とすずかの頭の上に乗っかって毛繕いをしているフルーツバットを軽く撫でた。

「明後日の神事であの蒼い珠を流し舟に乗せて、海に送り出したら私の此処での仕事はお仕舞い。」

今年が私のお役目の最後の年なの。」

柔らかい微笑みでそう告げた。

フェイトの服が乾いた頃、皆揃って帰ることになった。

フェイトは薫に介抱の礼をいい、薫は

「またいらっしやい。」

それとお祭り楽しんでいつてね。」

と孫を見送る祖母のような言葉をかけた。

フェイトも

「…はい、お世話になりました。」

と答えていたがなのはには少し表情が硬かったように見えた。

なのは達も別れの挨拶を告げて皆揃って山の中の石段を降りていく。  
長い石段の途中、少し開けた場所に休憩用かベンチがある。

そこでアリサが立ち止まり

「それでどういっつもりなのユーノ？」

「どういっつて？」

「さっきの話よ。」

フェイトには悪いけど黙ってたらあのジュエルシールドはなのはが手  
に入れていたはずでしょ。」

神社を引き上げる前に、ユーノは皆に神社の結界の説明とジュエル  
シールドの存在を明かした。

この結界はかなり昔、おそらくこの神社が作られたとき魔法の知識がある人間が土地や建物の構成から魔方陣を構成し周囲の魔力を吸収して結界を張るように造ったものである。

結界の効能は穢れの遮断とそれでも結界内に穢れが入り込んだ時の浄化。

ユーノには「穢れ」と言う概念が今一つ理解できず、「強い負の感情」ではないかと考えていた。

所謂「風水」的な思想に近いものであるが、専門知識のないのは達には「そう言うものか」としか言えない。

「つまり、一度発動したジュエルシードが憑依体としてここまでやって来て何らかの理由で憑依体から切り離された。

それを拾った薫さんが神社に持ってきたことであそこの機能でジュエルシードが浄化？されて封印されていないにも関わらず安定状態にあると言っことさ。

薫さんが拾った時に発動しなかったのはおそらく、薫さんが精神的な修行を積んでいたためジュエルシードに影響を与えるほど強い感情が表に出にくいからかな？」

一息ついた後に再度口を開くユーノ。

「そして、おそらく憑依体とジュエルシードを切り離したのはR x。あれだけR xに痛め付けられたあの怪人がこんなに早く復活するとは思えない……と言っか思いたくない。

それにもしいつならこのあたりメチャクチャになっていると思う

から。

…そして、完全な遮断結界でないため僕たちの感知魔法に引っ掛かった。

ジュエルシードの反応も漏れていたかもしれないと言うことさ。」

これだけの説明をしたのはフェイトへの牽制だ。  
暗に仄めかしているのだ、

「偶然にもジュエルシードは安定している。

下手にさわって騒ぎを起こすな。

なんだったらR×にチクるぞ。」

と。

「…フェイト、取り合えずジュエルシードは安定している。

頃合いを見て封印はするけど、祭が終わるまで回収を待っても良いんじゃないかな？

薫さんの最後の仕事を邪魔するのともどろかと思うし…」

そう言うことかとアリサ達が頷いているが、フェイトの表情は硬いままだ。

「…ダメ…私はジュエルシードを集めるために…集めなければなら  
ない。」

「フェイトちゃん!!」

なのはが非難の声をあげる。

「どうして、そこまでしなきゃいけないの？

親切にしてくれた人に迷惑かけてまで…」

「…前にも言っただけど、あなたに答える理由がない。聞きたかったらあなたがこれに関わる理由を言って。」

フェイトの拒絶になのはの顔がこわばる。

「…どうしてもダメなの？」

「…何度も言わない。」

私はジュエルシードを集めるために来ている。」

二人の間に緊張が走る。

互いに待機状態でアクセサリーに擬態しているデバイスに手を伸ばす。

見通しが甘かったことを認識したユーノが、一触即発の事態にうろたえてなのはとフェイトをオロオロと見比べる。

互いにデバイスを起動させようとしたところで

「にやっ!？」

なのはの後頭部をアリサの拳骨が叩き、

「痛っ?!、いたたたたっ!？」

すずかのアイアンクローがフェイトの額とこめかみをわしづかみにして食い込んでいた。

「こんなところでなにをするつもりよ!！」

「少し落ち着きましょうか？」

「あの、すずかちゃん手加減してあげて？」

すずかの怪力（握力成人男子並み）をしっているファリンが額に汗を浮かべてフォローに入っている。

涙目でしゃがみこむ二人にアリサが仕切りに入る。

「なのははこれくらいでキレない！！」

フェイトも薫さんの事も少しは考えなさい！！」

クラスで「女番長」だの「バニングスじゃなくてバーニング」だの言われているアリサの剣幕に怯えて黙り込む二人。

こうしてなるべく穏便に済ませるべく皆で知恵を絞る事となり、結果として今夜のうちにジュエルシードを封印し祭で海に流されたあと回収する手筈になった。

そしてジュエルシードの所有権についてだが、なのはが意外なことを言い出した。

「私とフェイトちゃんて闘って勝った方が持っていく。」

「?!、なのははどうして？言っただけだけど今の君でも実力はフェイトの方が上だよ。」

勝ち目は少ないとしか…

それに、この近くにはR×がいるはずだし所有権といえば今のところ

るRXが…」

「ゴメン、ユーノくん。」

…これは私のワガママだけど、フェイトちゃんとお話するには私のことを認めてもらわないといけないから。  
ただの甘ったれた子供じゃないと認めて欲しいから…」

『だからって何も闘わなくても…』

ユーノはそう思ったが口には出さなかった。

一理あると思っただけでもある。

フェイトが本質的に優しいのは確かだろうが、ジュエルシードを集める理由があるのも事実なのだから。

そんな彼女からしてみれば今のなのは何かを譲ることができないのもたしかだ。

『ユーノの手伝いでジュエルシードを集めている。』

これ以上の理由を持っていない現状のなのはでは。

ハアとため息をついてユーノは

「…わかった、でもなのはフェイトが受けてくれるかは…」

「それで良いわ、今度も負けない。」

あっさりとフェイトの返答が来てユーノがさらに深いため息をつく。

『何でこんなに血の氣が多いかな？

この二人は。』

それでも、『現在回収しているジュエルシールドが偽物の可能性が高く、裏で何かを画策している者がいる以上可能な限り早く回収封印しておくべき。』と考えているユーノとしては、所有権を主張しつつ揉めて無駄な時間を使うよりは遥かにマシと思っている。

現状誰が持つていても構わないのだ。

しかし…まあ、Rxやフェイトが出てきてから良いところ無しのなのはにアドバイスや作戦を出すくらいは贖罪しても良いかなとも考える。

フェイトに対して恨みと言うほどではないが、男として大事なものを碎かれた身としては思うところのあるユーノとしては。

こうして、先の計画が決まったなのは達は硬い表情を浮かべて帰り道を進むこととなった。

石段も終わりが見えて多少の人通りのある通りが伺えてきた頃、なのは達の視界に石段を昇る人物が現れた。

まだ夏の残滓が残るこの季節に白地とは言えスーツ姿で、さらに遠目でもわかる程の肉厚の体格。

ボディビルダーかプロレスラーかという巨漢の金髪の白人男性が結

構な足取りで、石段をズンズン登って来るのだ。

鼻下と顎まで髭に覆われた威つい巨漢が、何やら鼻歌を歌いそんな程の上機嫌で自分達に迫ってくる。

ちよつと引いてしまふのは仕方ないと言いたい。

なのは達は皆して歩くのを止め石段の片側に避けた。

ファリンが庇うように皆の前に出たのはさすがと言つべきだろう。

件の巨漢は皆のすぐそば迄来ると足を止めた。

なのは達に緊張が走る。

「Good Afternoon、Ladys。」

「

そう言つて、ゴツい口許を微笑ませて手を振って通りすぎて行つた。

「……えゝゝつと、か…帰りましょうか。」

ファリンが促すと固まっていた皆もぎこちなくだが頷いて、石段を降っていった。

なのは達が帰路についていた頃、南光太郎は……温泉に入っていた。気を失っていた間に満ち潮に浸かっていたらしく、服も体も磯臭くなっていた。このままでは悪目立ちして色々と指し遣えるので、着

替えて体を洗うことにした。

幸い着替えの服はライドロンに置いてあったが、近場にはコインシャワーも銭湯もなかった。

ここは温泉街であるのだから当然である。

仕方なく、一日入り放題の入浴券を購入し体に染み付いた潮を洗い落とす事になった。

サツと入ってカラスの行水ですませるつもりだったがダメージを受けた体が休養を欲したのか湯船でウトウトとしてしまった。

結構な時間眠ってしまったのか心配した入浴客に起こされ、のぼせてないか心配したその入浴客に付き添われ脱衣場兼休憩スペースで藤製のチェアーに身を沈める事になった。

スポーツドリンクを飲みながら件の入浴客と世間話をしていると、少々聞き捨てならない名前が出てきた。

「そう言えば、名前も言ってますでしたね。少しお待ちを。」

そう言っただけから財布兼名刺入れを持ち出してきた相手は、

「市内で喫茶店『翠屋』を経営しています高町士郎と言います。」

そう言っただけで翠屋のサービスチケット兼チラシを差し出してきた。

湯船でみた鍛え上げられた肉体と、明らかな刀創や銃創を見ていた

光太郎はその自己紹介とのギャップに戸惑いつつもチラシを受けとる。

さらに「高町」の名に嫌な予感を感じる。

なのはが家族旅行に来ているのは知っている。

だから偶然出会うことがあるのを否定はしないが、この嫌な予感なんだろう。

いぶかしみつつも

「南光太郎と言います。仕事はパイロットですが今は休暇中です。」

そう答えながらももう少し目の前の人物と話を続ける気になった光太郎であったが、追い討ちは少しあとにやって来た。

士郎の後ろにやって来た、これまた体格のいい青年が

「父さん、母さんと美由希が待ちくたびれているぞ。」

と声をかけた。

一瞬目が点になる光太郎。

「…え？…父さん…父親？」

目の前の士郎は行っても30台にも見えない。

後ろに立つ青年の兄といった方がしっくりくる。

「…妖怪？」

自分の事を棚に上げて失礼なことを咄く光太郎。

『…つまり何か？』

年齢不肖かつ明らかに素人でない喫茶店マスターが父親で、その娘は魔法少女と言うことなのか？』

嫌な予感が当たったと言うか、なのはと初めて会ったときと同種の疲れを…自分の常識が壊れた時の疲労を再度感じていた。

軽く混乱しつつ、以前考えたなのはの歪みの原因はこの辺りから来ているのかもと考える光太郎であった。

その頃のアルフは、

「あゝあゝうゝうゝうゝゝゝゝゝ、温泉最高ゝゝ。」

温泉ホテルロビーのマッサージチェアに撃墜されていた。

## 第8話 海竜祭の夜 中編

なのはとフェイト（後書き）

次回後編の予定、一転して事件が動きだしさらに第二のデルザー魔人が登場します。

設定資料？

エアリヒカイト姉妹

ノエル・K・エアリヒカイト（22歳）

ファリン・K・エアリヒカイト（21歳）

月村家が資金を出しているヨーロッパのPMC（民間軍事会社）：平たく言うと傭兵斡旋業者出身の忍とすずかのボディガード兼メイド。

「夜の一族」設定が無いので当然自動人形ではありません。

元々都市部でのボディガードを専門として、10台後半から訓練を受け実務経験もある。

忍達が馴染みやすいように年若い二人を忍達の両親が選んでいる。

現在も定期的にヨーロッパの訓練施設で、射撃格闘に爆弾処理等各種訓練を受けているのでボディガードとしての能力は折り紙付き。

メイドとしても、その様な形でガードに付くことがヨーロッパではよくあるのでそちらの訓練も十分にこなしている。（それでもファリンのドジは無くなつてないが…）

二人とも忍とすずかを仕事を越えて大切に思っており、このまま月村家のメイドとして骨を埋めるつもりである。

性格はノエルはあまり感情が動かないように見えるがなのは達にも親愛の情を持ち来訪を楽しみにしていたりもする。

ファリンの方は見たまんまなのは達も大切な友人と思っている。

若くして傭兵になったことから判るように、幼少期は恵まれない人生を送ってきたと思われるがそのために月村姉妹やなのは達に情を傾けるのかも知れない。

高町士郎（43歳）

特殊な古武術である「御神流」という二刀流の小太刀の使い手。

元々はボディガードを生業としていたがなのはが生まれる前に引退。

断れない義理で受けた仕事で瀕死の重傷を負って完全に手を引く事になるが、「御神流」の修業は息子恭也娘美由希と共に続けている。

ボディガード時代に歴代の仮面ライダーと共闘したことがあり、何度も怪人に殺されそうになった経験から「闘うことの危険」については「原作の士郎」よりも厳しい考えを持っている。

結果、恭也と美由希も原作より厳しい修業を受けている。

リハビリの際に、家族がなのはの育児放棄をしてトラウマを埋め込んだのは原作と同じ。

本人も気にしているが、日々の生活に追われてなし崩しになっている。

修業に使う時間をなのはの為に注げばいいのだが、武術家としての業がそれを許さないと言う苦悩を抱えている。

## 第9話 海竜祭の夜 後編

戦王（前書き）

だいぶ遅くなりましたが、第9話をお送りします。

アクセス数が20000PV越してありました。

アクセスしていただいた方々には、拙作のような駄文にお付き合い  
いただいて感謝に堪えません。

ふと、気になったのですがアクセスの比率が

（パソコン1対携帯2）

なのですが、ユニークのポイントは

（パソコン3対携帯1）

なのです。

なんで逆転してるのでしょうか？

どなたか分かる方おられますか？

さて、本編をお楽しみいただければ幸いです。

## 第9話 海竜祭の夜 後編

戦王

高町一家の宴会風景

「あひゃひゃひゃ、お風呂で寝てるなんて何処のオジサンよ?」

「…美由希、酒飲んだな?」

「まあ固いこと言つな恭也。」

「士郎さんも飲みすぎですよ。」

「ん?桃子は飲んでないのか?」

「そうですよ。」

「さあつ、桃子さんもグツといきましょう。」

「お嬢様、あまり無理に勧めるのは…」

「ノエルくんは飲んでいないのか?」

「はあ、では一杯だけ…」

「…カオスだわ…」

「もう。」

「お姉ちゃんたら、恥ずかしい…」

「でも、これなら。」

「…すぐに皆酔いつぶれてしまいそうですね。」

「にやはは…お父さんてば…」

「…まあ、これなら後で抜け出してもばれないかな？」

## 第9話 海竜祭の夜 後編

戦王

深夜、御伽船神社に向かう石段の入口になのはとユーノは転移魔法を使ってやって来た。

酔いが廻っていたが勘の鋭い家族の目を誤魔化し、ホテルから抜け出したことを気づかれぬため部屋から直接転送してきたのだ。

神社の結界内に転送しなかったのは、解析しきれない結界魔法と転送魔法が干渉しての不測の事故が発生することを恐れたユーノの提案であった。

現場には先に到着していたフェイトとアルフの姿があった。

「…ごめんよ、フェイト。」

まさかこんなことになってるなんて知らなかったんだよ。」

「いいよアルフ。」

私は気にしてないから。」

「…何かあったのかな？」

なのは。」

「さあ？」

合流したなのは達は徒歩で石段を登っていく。

目的は神社に安置されたジュエルシードの封印。

不測の事態への対策と抜け駆け防止のために二人で向かう事にしたのだ。

なのはもフェイトもその表情は硬く、互いに言葉も交わさない。

なのはの肩の上のユーノとしんがりを歩いているアルフもこの空気には閉口している。

いつもなら軽口をたたくアルフも、念話を切って温泉を堪能していた間にこの事態になっていたためバツが悪くて口を開けない。

ユーノも

『今日はずっと封印して寝てしまおう。』

などと考えており、現状事態の収拾は諦めている。

そうこうする内に石段を登りきり、神社の鳥居をくぐった時ユーノが異変に気がついた。

「？神社の結界が消えてる！？」

そして月明かりのみが照らす神社の境内に、何か大きなモノが存在

していることに皆が気づいた。

蛇のようにとぐろを巻いて神社の拝殿に体を巻きつけているその巨体は…

「…竜？」

なのはの呟きにユーノが反応する。

「…これがりゅう？」

僕の知っているドラゴンとは違う？」

ユーノの世界において、ドラゴンと言えば四足の巨体を誇る蜥蜴を思わせる怪物であり、東洋の竜に見られる蛇体の姿を持つものは少なくともユーノは知らない。  
いや、それ以前に

「何でこの世界にドラゴンが居るの！？」

理不尽だ、と叫ぶユーノ。

「ユーノくん、これってまさか？」

「…ジュエルシードが発動したんだ…」

なのはの問いにフェイトが呟くように答えた。

「どうして？」

この神社の結界がジュエルシードを押さえてたんじゃ？」

「…結界は壊されている。」

ユーノの呟きになのはがビクリと震える。

「ここにはもうあの独特の静かな雰囲気が無いんだ。…きっと結界を作っていたこの神社の地形や建物の何処かが壊れているはず…」

推論を述べるユーノは視線を目の前の竜から外さない。

今まで封印してきたジュエルシードの憑依体のなかでは、海鳴市に出現した巨大樹型に次いだ大きさを当然パワーに勝れていることは容易に想像できる。

また巨大であることは即タフネス…防御力と耐久力に勝れていることにつながる。

予想だにしていなかった強敵にユーノは己の油断を後悔しつつも状況を把握しようと思いを巡らせる。

『結界が壊れたのは事故なのか、それとも何者かが？だとしたら誰が？』

そしてこの憑依体の本体はおそらく…』

2〜3秒の思考と沈黙のあと、ユーノは行動を決定する。

「…結界をはるから僕が準備している間になのはとフェイトは広域  
エリアサーチ  
探査魔法で半径300mで人がいないか調べて。」

人がいたらその座標はアルフさんに渡して。

そしてアルフさんは…」

「見つけたやつを範囲外に転送だね。任しときな！」

「はい、お願いします。」

本来なら僕一人でやるんだけど、まだ本調子な所まで回復していないから。」

そこまで言ってから少し口ごもり

「…それからR xに連絡を…」

「それは無しだよ、ユーノくん…」

「…今回はR xは関係無いよ。」

きっぱりと言い切る二人。

なのはとフェイトはジュエルシードの封印後にやり合う事は変更しないらしい。

確かに、ここでR xに介入したら良くて封印されたジュエルシードをR xが持ち帰るか、キングストーンフラッシュで内包した魔力を消し飛ばされてしまうかである。

そのあとの勝負の約束を知られたら皆そろってお説教をくらうか、怒ったR xが

「ならばその勝負に俺も参加しよう。」

などと言い出しかねない。

最終的には、バレて怒られるのは確定かと思いつつも今は言う通りにしておこうとユーノは判断した。

幸いにして目前の竜は暴れだすこともなく、探索範囲内には人もいなかった。

祭の内容の割にこの神社には人が寄ってくるでもなく、祭の準備で賑わっているのは下の街の方だけである事から既に神事としての意義よりも、街のイベントとしての面が重要視されるようになっていくのだろう。

考古学や民俗学に関わるものとして寂しく思いつつもユーノは神社の周囲を広域結界で囲い込んだ。

「よし、ひとまずはこれで…」

なのはの肩の上でフウツと息をついたユーノを、背後から伸ばされた太い腕が掴みあげた。

「キュウツ!?!」

軽く握りつつも指先が喉を圧迫して呼吸ができないような掴み方でユーノを持ち上げ、その太い腕の主はなのは達のすぐ背後に立っていた。

「奇妙ナチカラヲ使ウ子供ト喋ルペツト。  
ヴラド卿ノ情報ト一致スル、君達ナラアノ宝石ノ事ヲ説明デキルカナ?」

呼吸が出来ずのたうち回るユーノを右手につかんで、巨漢の白人が問いかける。

その声にギョツとしたなのは達が慌てて振り返る。

そこに立っていたのは、神社からの帰り道に強烈な印象を残した男だった。

「あなたは昼間の…」

驚き警戒の表情を浮かべたのはは、次いで

「何してるんですか、ユーノくんを放して!!」

と怒声をあげる。

その横でフェイトとアルフは困惑していた。

ワイドエリアサーチで周囲に人がいないのを確認してから張った境界の中に何故この男はいるのか?と。

「…サーチには反応無かったのにどうして?」

「?我ハ君ヲノスグウシロデ気配ヲ殺シテイタガ、君ラガ気付カナカッタダケデハ?」

ニヤリと嘲笑って答える男にアルフとフェイトの顔に怒りの朱が走る。

男は暗にこう言っているのだ。

『お前達は気付かぬ程の間抜けだ。』

と。

明らかな挑発。

フェイトとアルフは男の思惑に乘せられて冷静さを失いつつある。

実際には、男が気配を絶っていたのは事実でその技量は目前に立っていても気づかせない程のものではあるが、さすがにリーダー（探知系魔法）にも映らないというモノではない。

単にあまりにも近い位置にいたため、なのは達が自分達の反応として精査しなかっただけの事である。

しかし見えていても相手に認識させない程の隠形術がなのは達に「リーダーからすら隠れられる」と誤解させる。

多くの経験から何やら誤解されていることを感じとった男はそれを利用するような言動を自然と行っている。

男は経験と技量でなのは達を追い詰めていた。

なのはは目の前で呼吸困難から痙攣し始めているユーノを見て狼狽している。

畳み掛けるように男が言う。

「ソロソロコノ子ハダメミタイダガ？」

「ダメッ!!」

言うから!言うからユーノくん放して!!」

青くなって叫ぶなのはに、フェイトとアルフは仕方ないという表情で

「わかった…言うとおりにします。」

「チッ、しょうがないね…」

と恭順の意を示した。

男はここでようやくユーノの喉を押さえていた指先を緩める。

ようやく出来るようになった呼吸に、しばらく咳き込んでから

「…なのは、ゴメン…」

と力なく呟いた。

「…ユーノくんを放して…」

激情を押し殺して男を睨み付けるのはに對して、男は涼しい顔で答える。

「ソレハ話ヲ聞イテカラダ。」

この場の主導権は此方にあると仄めかすとなのは達は悔しげに顔を歪めた。

ジュエルシードの事はその危険性を含めてユーノが説明をした。

また、ユーノが異世界からの来訪者である事も話しいずれその世界の治安維持組織「次元空間航行管制管理局」次空管理局」がやって来る事を告げジュエルシードを手に入れようとすれば彼らを敵に回す事になると警告した。

幾つもの世界」『次元空間を介して往来出来る惑星単位の国家郡』を束ねる武装組織を敵に回す愚を説いて手を引かせるつもののユーノの算段は失敗に終わる。

男の答えは歓喜の叫びであった。

「スバラシイ!!」

未知ノ文明ノ国家ニソノ軍隊!!

我ラガ求メテ止マナカツタ闘争ノ新天地!!

神ヨ!!

コノ賜物ニ感謝ヲ捧ゲマス!!」

ユーノの顔から血の気が引いていく。

なのはにフェイト、アルフは恐ろしいものを突きつけられたように顔が強張っていた。

これから始まるであろう闘争に対して歓喜の感情をさらけ出し、神への感謝さえ口にするこの男の精神はまごう事なき異形であった。

「…あ、あんた…まさか、あいつの仲間なのか？」

その言動…精神の異形さにアルフが有って欲しくない可能性を口に

する。

大袈裟に両手を開いて天を仰いでいた男は、ゆっくりと振り返りニイツと笑みを浮かべ、

「アイツ？

ソレハヴラド卿ノコトカナ？

ナラバ然リ、我モマタデルザー軍団ガ将ノ一人。

ウルスラ・レックス。

ウォーロード

戦王ノ異名ヲ捧ゲラレテイル。

ウルス・ザ・ウォーロードト呼ブガヨカロウ。」

そう名乗った男、ウルスの姿が水面にさざ波がたつように揺らぎそれが瞬きする間におさまった後、なのは達の眼前に立っていたのは灰銀の体毛に手甲脚甲に胸甲を身に付けた二本足で立つ熊…否、本物の熊に比べてスツキリとした体型から人熊（じんゆう）「ワーベア―」とでも言うべき怪人…否、魔人であった。

身構えるなのは達の後ろで咆哮が響く。

見れば今まで大人しくとぐろを巻いていた竜が、顔を上げ威嚇するような咆哮をあげていた。

結界で遮断されていなければ街の方まで轟いてパニックを引き起こしていただろう。

その竜の目線は魔人へと姿を変えた…否、本性を顕したウルスへと向けられている。

「…あんたが結界を壊したんだな？

そして薫さん…宮司さんに危害を加えようと、ジュエルシードを奪おうとしたら薫さんがあの姿になったんだな？」

ウルスの右手に掴まれたままユーノが詰るように問いたです。

「フム、君ハナカナカ頭ガ切レルヨウダ。」

肯定したウルスは、自分達の組織にもオカルティックな知識と技術があることを告げ、この神社の結界に気づき興味を引かれてやって来たところでジュエルシードを発見、後は好奇心の赴くまま神社の結界…風水をベースにした魔方阵を調べモノのためしにそれを壊していたところに宮司…薫がやって来て後はほぼユーノの推察通りになつていたと愉しげに語った。

「…マア、惜シムラクハ異変ヲ察知シタノガ、アノ勘ガ鋭イR×デハナク君達ダツタ事ダガ先ホドノ情報デ相殺ダ。  
君達ヲ連レテ帰ッテ更ナル情報ヲ手ニ入レルトシヨウ。」

そう言つてウルスが笑った。

ヴラドと同じく魔人の姿では表情の変化など判りにくい筈なのに、なのは達にはハッキリとウルスが笑っているのが判った。

「…ドウヤラー一番ノ情報源ハコノペットノヨウダ。  
無駄ナ人数ハ不要ダシ…」

捨てるゴミを見るような視線をなのは達に向ける。

その視線に嫌なものを感じアルフがフェイトを後ろに庇い、なのはとフェイトは待機状態のデバイスに手を伸ばす。

「…殺入力…」

咻くと同時に叩きつけられる殺気。

物理的な衝撃を伴っているのではないかと誤解しそうな強烈さに意識が飛びそうになる。

ヴラドのそれとは異なり、息も出来なくなるような狂気は無いかわりに絶望的な力の差を教えるような圧力があつた。

アルフは気丈にフェイトを庇っているがその拳は冷や汗に濡れそぼり、なのはとフェイトは膝に力が入らずへたり込んでいる。

いまだにウルスの手の中のユーノは至近距離で殺気を浴びてしまい泡を吹いて痙攣している。

宣言どおりに殺意の視線をなのは達に向けて歩み寄るウルスに、アルフが跳びかかるも裏拳で吹き飛ばされ、立ち木に叩き付けられ地に落ちた。

なのはとフェイトは逃げる事も出来ず不可避の死の化身たるウルスを見上げ、殺意が有っても「なのは達」には何の興味も持っていないその眼に恐怖した。

奇しくも二人は同時に思った。

『…誰か助けて、死にたくないよ!!』

なのはは脳裏に家族を思いそこに戻れなくなる事に恐怖し。

フェイトは母の望みを叶えられず失望させることに恐怖し。

二人を視界に収めていたウルスの視線がふと横を向いた。

「…来タカ…」

呟いたウルスの言葉は確かな悦びの響きを含んでいた。

結界の色褪せた世界の中に鮮やかな色彩の波紋が水面のように広がる。

ウルスの視線の先30mと離れていない地点に広がる色彩の波紋の中から、赤い車体に昆虫の複眼を思わせるキャノピーグラスを備えた奇怪なデザインの車が現れるのは達とウルスの間に割り込んだ。

あきらかにウルスを狙い、撥ね飛ばす勢いで割り込んで来た赤い車に軽くバックステップで距離をとる。

その顔には明らかな喜悦の表情が浮かんでいた。

本来ならば表情の浮かばぬ獣の顔に。

ウルスとなのは、フェイトを隔てた赤い車から黒い甲冑に身を固めた異形がその身を顕す。

倒れたアルフを見てマルチアイを使い死んでいない事を確かめ、次いでウルスの手に捕えられたユーノを見た後

「…すまない、怖い思いをさせたようだ。  
結界の解析に少々手間取った。」

「「…R x…」」

二人の呟きに頷いてR xはウルスに向き直る。

「この車を使って逃げるんだ。

自動操縦だから勝手に走ってくれる。」

ウルスの視線はR xに向いており、もはやなのは達は視界に入っていない。

殺気と恐怖による戒めから解放された二人は全身から脱力し、その場手に手について大きく息を吐いた。

車の向こう側では既にR xとウルスの闘いが始まっているらしく、風切り音や何かが粉碎される音が続いている。

「…の…は…のは……なのは！しっかりして！！」

自分を呼ぶ声に気がついて眼を向けると、ウルスから解放されたユーノが気遣わしげになのはを見上げていた。

「ユーノくん…よかったあ…」

涙目になってユーノを抱え上げるなのは。

「R xも助けようとしてくれたけど、アイツ闘いだしたら途中で邪魔だって放り出されちゃって。」

…少しの間だけどR xのパンチとか目の前に飛んでくるから生きた心地がしなかったよ。」

ユーノも涙目で訴えていたが、すぐに口調を改めた。

「…なのは、怖い思いをしてすぐには辛いかも知れないけど…ジュエルシードの封印お願いできるかな？」

すまなそうに言うユーノに少しの躊躇いのあとなのはは

「うん！」

と勢い良く頷いた。

それを見たユーノは続いてフェイトの所へ駆けていく。

だから気づかなかった。

なのはの握った手が小刻みに震えていたことに。

フェイトはなのはより早く正気に戻ったのか、ウルスに殴り飛ばされたアルフの所に行き治癒魔法を掛けているが効果は芳しくない。実際、R xと闘った時でさえかなり手加減したパンチで、シールドと防御フィールド打ち抜かれバリアジャケットをパージ寸前までされている。

今回は反撃に反応できず、シールドなしで殴られたためアルフは意識を失っておりジャケットの一部…殴られた腹部と胸部がパージし再生していない。

普通なら即死、拳が当たった部分の肉が残っているのが奇跡のたぐいである。

フェイトが半泣きになって治癒魔法を掛けているが、あまり得意なモノではないらしくアルフは一向に眼を覚まさない。

「アルフ！おきて、ねえ！おきてったら！アルフ！！」

「フェイト！僕と代わって！！」

そう声がすると樹に寄りかかるように倒れていたアルフの周りに翡翠色の魔方陣が顕れ、アルフの身体を照らす。

その中で今まで血の気が引いていたアルフの顔に赤みが差してきた。

「…なんてダメージだ。」

魔力ブースト無しの素手でこの有り様。

……改造人間との接近戦は絶対避けなきゃいけない……」

声の先にはユーノがおり治癒魔法を起動させていた。

「…ア…アルフ助けて！

お願い！！」

「…任せて…攻撃魔法がへボな分、結界とか治癒は自信があるんだ！」

「…あ、ありがとう…」

「そのかわりと言っては何だけど…」

と動かした目線の先には、鎌首をもたげてR×とウルスを狙いを定めるかの如く頭を動かしている竜の姿があった。

「…僕の魔力はこの治癒魔法で空っぽになる。

アルフさんもすぐには動けない。

なのはと協力してあの竜を…ジュエルシードを封印して薫さんを助けてほしいんだ。」

「…私が協力？」

「この後、取り合いでも何でもしてもいいけど…今だけは頼む。

あの竜は薫さんのこの神社を護りたい気持ちに反応している。

このままだと闘っているR×達も排除しようとして襲ってしまうかもしれない。そうになったら……正直僕の結果は持たないだろうし、そのときにはあの竜よりもR×達のせいでこの辺りがメチャクチャになりそうな気がするから。」

少し考えるように眼を閉じた後、

「……わかった…アルフのこと…お願い…」

開かれた瞳には力がこもっていた。

立ち上がったフェイトはフェイトはなのはに歩み寄る。

「…今は…協力する。

後の事は、その時考えるから…」

「…フェイトちゃん…」

うん…私に力を貸して!」

「…一緒に…」

「…薫さんを…助けよう!」

「レイジングハート!!」

「バルディツシュ!!」

「…セットアープ!!」

『YES、Master!』

『YES、Sir!』

デバイスの声と共に二人のバリアジャケットが展開される。

本来の姿を顕したデバイスを手に二人は宙に舞い上がった。

「ハハハッ!

Rx!!! 貴様ノチカラハソナモノカ!!!」

弾幕のようなジャブにメッタ打ちになるRx。

通常対改造人間戦では効果はない筈のジャブ、しかし着弾時に肩を入れ込みさらに蹴り足を強く蹴り込み体重を乗せる、さらにスナッ

ピーに拳を引き戻すことで（スピード×体重×握力）が生み出す衝撃を着弾点の装甲を貫らぬいて内部で炸裂させているのだ。

音速突破のジャブ…文字通りのマツハパンチの弾幕に虚を突いて襲い来るフック、アッパー、ボディブロー。

間合いを取って後退しようとしたら脚を刈ってくるローキック。

R×は先程からイニシアティブを握られたままであった。

左のボディブローを受け止めた隙を突いて右のフックがこめかみを狙ってくる。受けは間に合わない判断し受けた相手の左腕を台にして身体を投げ出し跳躍前転、ようやく5～6mの距離を取った。

「…強い…そして隙が無い…達人というやつか…」

R×は己が不利を悟る。

R×はどちらかと言えば

「パワーとスピードで押しまくる」

パワーファイターに近い戦闘スタイルであり

「戦闘のイニシアティブを握り的確なカウンターを入れてくる」

ようなテクニカルファイターを苦手としている。

これは野獣的なゴルゴム怪人や怪魔異星獣、重装甲と攻撃に特化した怪魔ロボット等との戦闘から培われている。

テクニカルな敵との闘いはバイオリダーのスピードと特殊能力で押し切ってきた。

無論、先輩ライダーとの訓練でテクニカルファイターとの闘い方も学んではいる（1号、V3、スーパ―1）が苦手である事には変わりはない。

ここはバイオリダーでいくかと考えたとき、ウルスが両手を左右に開くとその両掌の先に銀色の光が疾り30cm径の時空魔方阵が顯れた。

ウルスがその中に手を突き込み引き出すと、その手には短弓と矢筒が握られていた。

Rxが不味いと思ったときには既にウルスは矢をつがえ矢継ぎ早に放っていた。

「そう言うことかっ！」

飛来する矢を手刀で叩き落とす。

そして切り返して影から飛来する矢を切り落とす。

さらに飛来する矢を回避して飛び出した先には当然のように先読みした矢が待っている。

だが、Rxにも手の内が判っているなら対応ができる。

竜巻のように両の手刀を回転させ全ての矢を叩き落とす。

「この先読みの技。」

あの時の矢はやはりお前か!!」

「クククツ…ヤハリ一度見セタ大道芸八通ジヌカ。」

R xの怒声に不敵に応じるウルス。

「ダガ、コレヨリ先ハ遊びハ無シダ!」

再び時空魔方阵より武器を取り出すウルス。

二本の片刃の長刀…刀即ち日本刀ではなく、厚めの刀身の曲刀「シミターヤシャムシールと分類される剣である。

改造魔人の剛力に任せて常人では抱えることも出来ない大剣を両手に構え

「我ハデルザー軍団が将、ウルスラ・レックス!

ウルス・ザ・ウォーロード!!

貴様モ名ノルガヨイ!!」

ウルスの怒声にR xも応えてその手を振り上げ手刀を切る。

「俺は太陽の子!

仮面ライダーBlack!! R x!!」

叫ぶ声が引き金となり互いを目指して飛び出した。

「セリヤツ!!」

「トウア!!」

袈裟斬りとミドルキックが交差し互いに弾かれるように後退、再度踏み込もうとしたR×に弾かれた動きを回転運動に変えて逆の剣でウルスが斬り込んで来る。

そこからは一方的であつた。

通常二刀流と言うものは、片方を…普通利き腕の逆側を小太刀にして主に防御に使う。

しかしウルスは両の手に持った剣を攻撃に使い、早く切れ間の無い攻撃を仕掛けてくる。

剣のリーチも相まってR×は防戦一方となつた。

素手では不利とリボルケインを構えるも一刀を受けたところをもう一刀が死角より襲い来る。

そのパワーから、バイオリライダーでは受けること叶わず、ロボライダーではスピードで押されるのが目に見えている。

純粹に技量と地力で負けている事をR×は実感していた。

全身に刀創を負い、さらに右の太股と左脇腹に刺突を食らい荒い息をつくR×は二刀を無形の位に構えて…両脇に垂らしてゆつくりと歩み寄るウルスを見ながら必死に打開策を考えていた。

狂戦士的なヴラドと違い、ウルスは常に冷めた目線を忘れないため不意打ちやフェイクに掛かりにくい。

追い込むチャンスと思つたときには、躊躇なく間合いを離してまた

初めから攻め直してくる。

武芸の達人の上に『勝つため』の闘いができる、正に戦を支配する戦王である。  
ウォーロード

ウルスに勝つためには少なくともあの二刀流を封じなければならぬ。  
い。

その為には此方にももう一つ武器がなければ…

そう思ったとき

「上ノ闘イガ気ニナルカ、R x？」

ウルスが問いかけてきた。

頭上では、なのはとフェイトの二人がジュエルシード憑依体…竜と空中戦を展開していた。

「意識セヌヨウニ闘ッテイタヨウダガ…我以外ニ気ヲカケル事ガ有ルトハ舐メラレタモノダ。」

不機嫌な声でウルスが言う。

確かにR xは

「ウルスを早く倒してなのは達の救援に行こう。」

と思って闘い始めたが、ウルスからしてみればせつかくの強敵が自分以外にわずかでも意識を向けているのが我慢できないのだろう。

だから、挑発の意味も込めてこう言ったのだ。

「我が勝利ノ暁ニハ、アノ娘達ヲ連レ歸リ全テノ情報ヲ吐力セタ上デハツ裂キニシテクレル。

闘イニ不粹ナモノヲ関ワラセタ罪ヲアガナワセテクレルワ！」

結果から言えばこれは失策であつた。

R xの複眼がウルスを捉える。

感情が現れないR xの面に明らかな怒りの感情を見てとらせるマクロアイの輝きが灯る。

「…貴様！！

そんなことは許さんぞ！！」

ウルスに対してそれまで、強敵であるという以上の感情は無かつたR xだがこの時ばかりは怒りの感情が噴き出してくる。

同時に子供達に手は出させぬと護る決意も更に固くなる。

そのとき不思議な事が起こつた。

腹部のベルトサンライザーが光を放ち、左の赤い宝玉から輝く光の塊が現れてきた。

己が体に起きた異変をR xは理解した。

窮地に陥つたときにR xの身体は、それを打ち破る為に進化する。

その起爆剤は感情。R xは爆発する怒りや悲しみで、バイオライダーとロボライダーへの進化を果たした。

そして今、目前の強敵から子供達を護るために必要な勝利への渴望が生み出したものは？

「ダブル!! リボルケイン!!」

双振りの光の武器を携えてR xが走り出す。

「アーールエエーツクス!!!」

歓喜ともとれる雄叫びで己が敵の名を呼びつつウルスが走る。

互いの加速の頂点で激突した両者はその手にした得物を縦横無尽に振るい合う。

互いの武器の切っ先は軽く音速を突破し周囲にソニックブームの被害を撒き散らしつつ斬り結び合う。

ウルスのシミターはリーチと重さ!! 威力に勝るが、R xのダブル!! リボルケインはリーチが短い分取り回しの速さに勝る。

そしてこの時、速さが威力に勝った。

ウルスの斬撃をR xはリボルケインで滑らかに逸らしていく。

そしてウルスの剣が切り返して来る間にリボルケインを叩きつける。

無論それが即命中する訳ではないが、リボルケインはかすっただけでもそこを焼く光の剣。

避けるか防御する必要があるが、斬るために刃を叩きつける必要があるウルスの剣は刃の向きをずらされると軌道修正させるためのタイムラグが発生し、斬撃と防御のリズムが狂わされる。

そこにできた隙に当てるだけで良いリボルケインを擦り込んでいけば、さらにウルスは防御のために動き攻撃のための動きが阻害される。

こうしてイニシアティブはR×に移っていく。

そして致命的な隙。

両手上段からの斬り降ろしを二本のリボルケインで両脇に流したとき、当然のごとく格闘戦の間合いに入っていた。

がら空きの鳩尾に槍のごとき右の突き蹴りが突き刺さる。

さしものウルスも一瞬動きが止まる。

ついでR×はウルスの頭上を宙返りで飛び越えつつ、両の肩にリボルケインを突き込んだ。

ウルスは武芸の達人であるが両の腕が使えねばその力は発揮できない。

逆を言えば「今を逃せばこの後チャンスは無い」のだ。

「ガアアアッ!!」

激痛に苦鳴をあげるウルスからバックジャンプで間合いを取ったR  
xは腰を落として右手の甲で地面を叩く。

次いで矢のような跳躍でウルスに迫るRxは赤熱した両足を錐揉み  
キックでウルスに叩き込む。

「Rxキック!!」

「マアダアダア!!」

叫ぶウルスにギリギリで直撃を避けられるが左肩を蹴り碎いた。

碎かれ引き千切られる左腕と横に吹っ飛ばされるウルス。

山肌を数メートル削りようやく止まったRxが目を見ると、ウル  
スが右肩に刺さったりボルケインを口で抜き取って地に落としてい  
た。

左肩から大量に出血し、右腕も動かない程の深手を負っているがそ  
の眼は底光りしてRxを睨みつけている。

「…見事だ、Rx…」

ココハ我が敗北ヲ認め一旦引クトシヨウ…」

その足元には時空魔方陣が銀の光を発している。

「…デハ、サラバダRx!!次ニマミエル時こそソノ首貰イ請ケル  
!!!」

時空魔方陣の銀の輝きに沈みこんで行くウルスを見続けているRx。

正直、R xにも追撃をかける余裕はない。

二本目のリボルケインを創るために太陽エネルギーを大量に消費し、ダメージの回復に廻す余裕もない。

真夜中の今ではエネルギーの回復も不可能。

「クソッ!!」

今は見逃すしかないのか!!」

消え去った銀の魔方陣を睨み付けたあとR xは戦闘中は意識的に無視していた上空の闘いへと視線を向ける。

その視線の先では、なのはとフェイトと竜が空中戦を繰り広げていた。

デイベインシューターとフォトンランサーを正面から叩き込んでも竜は神社から離れなかった。

老宮司…薫の願いを叶えるため出現したジュエルシード憑依体は「神社を守る」ことに忠実であるらしい。

「どうしよう？」

怒ってこっちに来るかと思ったのに…」

「…あの人が怒るようなことをすれば、あの竜も怒る…つまり…」

「!?!?ちょっとまってフェイトちゃん!!」

フェイトは上空から無差別に魔力弾をばらまいた。

威力は無いに等しく、着弾点に爆発した魔力の残滓が煙のようにたなびく。

しかしこれが神社の守護者たる竜の逆鱗に触れたらしく、咆哮をあげて上空のフェイト達目掛けて舞い上がった。

「よし、狙い通り。」

「にゃあ〜フェイトちゃん、怒ってる怒ってるよ〜。」

突っ込んでくる竜に涙目になって飛んで逃げるなのは。

さらに高空に逃げることで竜を神社から完全に引き離れた。

「……ここのなら、周りを気にしなくてもいい。」

飛行速度に劣るなのはを引っ張る形で連れてきたフェイトが下を見おろしバルディッシュを構える。

「合わせて!」

「うん!」

二人の後を追って上昇してくる竜に向かって

「フォトンランサー!

ファイア!」

「デイベインシューター！シュート！！」

金色と桜色の魔力弾が雨あられと降り注ぐ。

が、先にユーノが見立てた通り巨体に見合う耐久力を見せた竜は弾幕を突破して二人に迫る。

それを左右に別れて回避して、二人は念話で次の手をうち合わせる。

『砲撃！合わせて！！』

『うん！！』

「サンダースマッシャー！！」

「デイベインバスター！！」

金色と桜色の奔流が竜の背後に迫る。

しかし、柔軟な動きで直線的な砲撃魔法をくるりと輪を描くように回避しそのままなのは達に向き直る。

『私が接近戦で困になって足を止めるから隙を見て砲撃を！』

バルディッシュをサイズフォームにしてフェイトが竜に打ちかかる。

『うん！任せて！！』

砲撃魔法を起動させ発射のタイミングを測るのは。  
しかし…

『どうして？』

身体が…思うように動かない？』

フェイトの動きが鈍い。

竜の懷に飛び込んで一撃を入れる前にためらうような動きがあり、  
竜に攻撃の頭を押さえられてしまい有効打が入れられない。

『私…怯えている？』

闘うのが怖い？』

自身の有り様に困惑するフェイト。

とりあえず竜の動きは抑えられているが長くは持たないのは明白だ。

そしてなのはも…

『なんで…なんで手が震えるの？』

照準を定めた先には竜の巨体とフェイトの姿。

そこを見据えたたん、レイジングハートをかまえた手が震え始めた。

『R×のときみたいにフェイトちゃんを間違えて撃つのが怖い？』

……違う…怖いのは…竜、私…闘うのが怖い…？』

震えを止めようと腕に力を入れてレイジングハートを構え直す。  
見据える先には竜とフェイトの姿があり、照準代わりの魔方陣越し

の光景になのはの心臓は早鐘を打ちつつける。

息を止めて集中し、砲撃を放つコマンドワードを唱えようとしたとき、

「…迷いがあるなら撃つてはいけない。」

射線の上にライドロンのルーフに立ったR xが立ち塞がった。

「…取り返しのつかない過ちを犯すことになる。」

『なのは！まだなの！？』

何度目かの攻撃失敗のあと念話を飛ばすフェイト。

しかしその返答はなく、代わりに一瞬の隙を狙った竜の牙が迫った。

『マズイ！回避が…間に合わない！？』

いつもなら自慢のスピードに任せて回避するところが、思わず身をすくめてしまう。

失策を自覚しこれから食らうダメージに恐怖したところで、急激な加速に一瞬意識が飛んでいた。

意識が戻ったときには、傍らになのはが居て気遣わしげな瞳でフェイトを見ていた。

「二人で協力して封印の準備を!!」

声がかけられた方を見ると、青い軽甲冑の姿。バイオライダーに変身したR×がライドロンの上に立っていた。

先ほどのフェイトのピンチを救ったのは、フェイトの動きの悪さからその心理状態がなのはと同じくまともに戦えないモノと判断したR×がゲル化したバイオライダーの高速飛行能力によって為したものであった。

「バイオブレード!!」

リボルケインとは異なり、切り裂くことに特化した必殺剣を構え、ライドロンごと突っ込んで行くR×。

闘うために必要なエネルギーが不足しているR×はゲル化しての飛行も厳しい状態で、ましてやバイオブレードでの必殺技「スパークカッター」やキングストーンフラッシュも使えない。

故に忸怩たる思いで、闘いに恐怖している少女達に封印を頼むしか無かった。

「…その代わり、あの子達には指一本触れさせん。」

ライドロンの体当たりと、竜の巨体を足場にし時にはライドロンを跳躍の足場にして竜の死角に回り込んでの斬撃でバイオライダーが足止めを続けていた。

「…フェイトちゃんも怖かったんだね。」

「…なのは…結構いい性格してる…」

「にやはは…そうかな？」

…うん、私も怖かったよ…一人だと…怖くて震えてくるよ。」

「私も怖かったから…」

怖がっている私たちじゃ…薫さんを助けられないから…」

「R xの力も借りて…」

「薫さんを助けよう。」

結界内の色褪せた空に、桜色の閃光と金色の閃光が閃いた。

二日後、海岸沿いに設けられた催事場で祝詞を詠いあげる薫の姿があった。

無事にジュエルシードの封印を完了させ解放された薫を社務所に寝かせて、R x達は神社を後にした。

ユーノの治療魔法で快復したアルフと合流した時、泣きながらアルフにしがみつくフェイトを見たり命の恩人とユーノに感謝しべた褒めするアルフを見たり、感謝の印と言ってユーノにチューするアルフを見てなのはが不満げな顔をしたりと色々あった。

壊れてしまった山肌等はR×が弄って、地滑りなどの自然現象に見せかけて誤魔化した。

無論、後で匿名で修繕費用を振り込んでおくが…

少し誤魔化す必要があるとフェイトが薫の今夜の記憶を曖昧にするための魔法をかけたときはR×の雰囲気が少し怖くなったが、このときにフェイトの祖母を慈しむ孫のような表情を見て何も口にはしなかった。

そして、なのはも今回のジュエルシードの権利は放棄すると言いついた。

「あのフェイトちゃんを見たらねえ…」

そう言つて苦笑するなのはにR×も

「今回の発端は初戦で俺が不覚を取ったことが原因だから、何も言えない。」

と同意を示した。

こうしてこの夜の激戦は幕を閉じた。

ただし、R×に連絡しないで封印をしようとした事の罰として祭の間はジュエルシード探しは禁止、なのは達とフェイト達は一緒に祭を見て回ることを約束させられた。

おそらくトラウマとなっているだろう二回もの魔人との遭遇で植え込まれた恐怖、フェイトとアルフだけでは何かのときに対応出来な

かろうと踏んだR×がなのは達と楽しい時間を過ごさせて互いに心をほぐすことと、頼りにできる繋がりを持たせることを期待しての事である。

…あと、なのはの夜歩きは士郎達にすっかりバレていてお小言（お小言で済んだともいえる）を食らったことを書いておく。

そして今、沈みかけた夕日が映える海を背景に祭のクライマックスである「御舟流し」神事が進められている。

篝火が焚かれゆるゆると夜の闇が忍び寄ってくる幻想的な雰囲気の中、なのは達は祝詞を唱え終えた薫が引き下がった舞台上で手に持った鈴の音のみを背景に静かに舞われる神楽舞に目を奪われていた。海岸からかなり離れた高台から、南光太郎も数年ぶりの日本の祭をゆつくりとした気持ちで眺めていた。

ふと、完全に日が沈んだ海に目をやると

「…事件の片がついたら、クジラ怪人の洞窟に行ってみるか…」

かつての命の恩人の墓参りを思いついた。

まあ、そのためには現状の打破…なのは達の身の安全の確保等手が足りないこと夥しく…

「…誰か応援に来てもらうかなあ…」

買っておいたビールを飲みながら呟いた。

## グローリアス号改造手術室

「フハハハッ！」

「コノ痛ミ！！コノ屈辱！！」

ヴラド卿ノ言ウトオリ、怒リモ度ヲ過ギレバ愉悦ニ通ズルカ！！」

失った左腕に強力な武器でもある義手を取り付ける手術を行っているウルスの姿があった。

時間をかければヴラドのように再生も出来るのだが、あえてウルスは義手を選びR×打倒の後に再生を行うこととしていた。

麻酔無しで行う必要のある神経接続手術を行い、その身に襲いかかる激痛を改造人間特有の痛覚遮断機能を使うことなくR×への呪詛へと変えることで耐えるウルスの狂気の哄笑がグローリアス号の浮かぶ海にかすかに流れていった。

## 第9話 海竜祭の夜 後編

戦王（後書き）

次回、いよいよ「管理局」の登場です。

アンチと言うわけではありませんが、

「歩く質量兵器」

「次元世界における違法技術とタブーの塊」

「どう考えてもロストログアのキングストーン」

そう簡単には互いの手を取ることは出来ません。

そして、逆襲のウルスと第三の魔人の影が…

設定資料？

高町桃子（33歳）

士郎の妻であり恭也、美由希の義理の母でなのはの実母。

腕の良いパティシエで翠屋のスイーツは彼女の手によるか少なくとも監修されたもの。

性格はおっとり型の所謂「あらあらウッフ」のお姉さんがそのまま母親になった人。

血の繋がらない息子と娘を抱えて家庭を守ったのは立派だが、士郎が倒れたときは流石に限界だったらしい。

また、恭也と美由希がよく躰られた手のかからない子供であったことと、育児放棄からのなのは「良い子」化から「母親」としてのスキルはさほど高い訳ではない。

善良な人物であるが、母としてなのはに語るべき言葉をあまり持っていないかった事が「原作なのは、結婚しないうちのヴィヴィオの養子縁組」を止められなかった一因かと思われる。

高町恭也（19歳）

高町家長男の大学生。

御神流の剣士としてもかなりの腕前を誇る。

ぶっきらぼうで朴念人、しかし女性にはモテると言う主人公属性の人。

多少シスコンの気があるが所謂「二次創作系」の鬼いちゃんとか凶也とかではない。

「良い子」となって手間の懸からなくなったなのはの異変に気づけなかったことを悔やんでいるのが原因である。

現在は月村忍と恋人同士で周囲は落ち着いており、なのはも友人に囲まれていたため安堵していたが降ってわいた怪人騒ぎに心中穏や

かでない日々を送っている。

## 第10話

来訪者ゝたずねきたるもの（前書き）

第10話を投稿します。

今回は説明的な話が中心で少々物足りないかも知れません。

クロノメインでRxの出番は極小です。

ユニークのポイントが5000突破しました。

ポイント付けて下さった方々には心からの感謝をお贈りします。

## 第10話

## 来訪者ゝたずねきたるもの

成田国際空港

入国ゲート、待ち合わせロビーにて

「待たせたか？」

「なに、たいして待つちやいせんよ。」

「今回の事件の詳細は…」

「本郷さんと結城さんから資料を貰ってますよ。」

「…便利な時代に成ったもんだ、パソコン通信で極秘資料がすぐ送り付けられる、昔はマイクロフィルムで持ち込もうとして、そのの奪い合いで敵も味方も死人の山が出来たもんだが…」

「時代が変わったんですよ、つか歳がバレますよ。」

「ぬかせ、お前もたいして変わらんだろうが。」

「へっへっ、そりゃそーだ。」

「しかし、光太郎も厄介な事件に巻き込まれたもんだ。」

「異世界からのお客人てのは初めてという訳じゃないが…」

「魔法使いときたからなあ…」

「さらに加えてデルザー軍団を名乗る敵。」

「厄介なことこの上ない話だ。」

「しかし、まあ取りあえずは後ろをついてくるお客さんをどうにかしてからで。」

「すまん、俺のミスだ。ドイツからついてきたBNDの工作員だろう。」

「あちゃ、ドイツの情報局の…締めちまう訳にはいかないっすよね？」

「ドイツの有力者をパトロンにして医療活動の資金を出させようとしているんだ、余計なトラブルは避けたい。」

「面倒くせえなあ…。」

「そうだな、さっさとバイクを受け取って振り切ってしまうとするか。」

「…そーしますか。」

第10話

来訪者

たずねきたるもの

次元空間。

漆黒の宇宙空間とは異なる暗色系の多数の色彩のマーブルが広がる空間。

そこを航行する次元航行艦「アースラ」、その艦橋で執務官クロノ・ハラオウンは最新情報のチェックを行っていた。

彼が所属する治安維持組織「次空管理局」は次元空間と言う回廊を介して往来が可能な「惑星単位の家国群」の治安維持を担う組織であり、彼らが文明の基礎とする「魔法」に拠らない「純科学」の発達や其れによる兵器類「質量兵器」（魔法に拠らない兵器の総称であり、刀剣類に拳銃からミサイル、戦車に戦闘機果てはレーザーにビーム等の光学兵器まで含まれる。）を取り締まり、魔法に拠らない技術や武力の発達を防ぎ魔法文明の安定を図っている。

端から見ると異常な「魔女狩り」の類いに見えるが、かつてアメリカが国内の社会主義者を狩りたて逆にソヴィエトが国内の自由主義者を狩りたてた様に、本来国家の治安維持…国体護持と言うものは異端を排除する行為である事を忘れてはいけない。

その権限は大きく、軍隊であり警察であり裁判所でもある組織となっている。

各惑星の警察にあたる活動も一手に引き受けており、次元世界には各惑星毎の軍隊や警察は存在しない。

建前上は…

我々の世界に置いて、アメリカ軍が「治安維持活動」と称して他国に首を突っ込むのと同じで現地の人間は良い顔をしない。

弱小の国は管理局に楯突いたときの報復が怖くて大人しくしているが、国力の豊かな（平たく言うと金持ちで管理局の財源に金を出して財布の紐を握っている）国は表向きは管理局の治安維持部隊に軍事警察活動を任せているが、中身は自国の兵力と警察官であり金の力で管理局の口出しを押さえつけているのが現実である。

「おとうさんの仕事って何？」

「そうだな…管理局員で…悪い奴を捕まえるのが仕事だな。」

「おとうさん…正義の味方だったの？」

クロノ・ハラオウンは管理局員であった父の殉職を契機に自らも「世界の平和」のために身を捧げようと、7才で士官養成校に入学した。

その後魔法の才能を開花させ本人にしてみれば挫折も有ったが、他者から見たらあつという間に出世コースに乗って11才の時には「執務官」と言う難関資格を取得し14歳の現在では先の管理局上級幹部への道のりは約束されていると言っても良い。

就業年齢が低い次元世界でもクロノの経歴はエリートとしても突出

したものであるが、最近では己の過去を振り返ると皮肉げな笑みが口許に浮かんでしまう。

己の才に疑いを持つてはいないが、管理局の対外的なプロパガンダに利用されたことは否めない。

殉職した父の後を継ぎ管理局に身を捧げた若きエリート。

大衆が好みそうなストーリーではないか。

しかも、クロノ本人はいくら魔法の才があり聡明な頭脳を持っていたとしても所詮人生経験などないに等しい子供だったのだ。

父の後を追うこと以外に頭は回っていなかった。

今にして思えば、管理局が才能があれば幼児といえどもスカウトして戦力にするのは洗脳目的なのだ、その優れた思考能力で思想を染められることを防いだクロノは考えており自ら矛盾していると自覚しつつも、己が出世して幹部となった時の管理局の問題点の改革をクロノは決心している。

さて、今回の任務であるが主任務である担当次元空域のパトロール（担当領域を巡回し民間次元航行艦の安全確保と抜き打ちに行う犯罪組織への襲撃で犯罪者に睨みを効かせるのが目的。）の途中緊急連絡が入り指示された地点…管理外世界へと向かっている。

管理外世界とは魔法による文化文明が存在していない世界の総称で、こういった世界に管理局による治安維持を受け入れた惑星国家…管理世界からの魔法文明を流入させない事、ひいては魔法文明を発生させない事も管理局員の任務である。

今回の任務はこれとは別の種類の任務がメインとなっている。

遺失文明の遺産、魔法・科学に関わらず行き過ぎた力を持つ危険な存在、場合によっては現在の技術に拠るものや特殊な力を持つ個人等も含む…ロストロギアと呼ばれるモノの回収がそれである。

つまり、管理外世界にばら蒔かれたロストロギアの回収が今回の任務である。

「…ロストロギア…要は管理局の他の勢力に渡ったら都合の悪いものの総称…と…」

皮肉げに口を歪めて、手元に展開した空間投影ディスプレイの資料に目を通していく。

管理局や各管理世界の政府からの依頼で、遺跡の発掘や調査管理を行っているスクライアと言う一族丸ごと考古学者という集団がロストロギア…ジュエルシードを発掘した。その危険性から管理局へ回収を依頼、輸送のため手配した輸送船が輸送途中でロストし近くの管理外世界へとばら蒔かれた。

その回収が今回の任務である。

輸送船がロストしてからかなりの日数が経過している、そこまで命令が遅れたのには理由がある。

管理局の戦力…直接戦力たる魔導士と非魔導士によるバックアップメンバーは全ての管理世界をフォローするには不足であり、管理局は万年人手不足に喘いでおり管理世界の治安も年々悪化の傾向（前

述した富裕国家等は除く）にあり今回のように重要度が低いと考えられた事件は後回しにされがちである。

今回の事件が発生…ジュエルシードがばら時かれたのが管理世界もしくは管理外世界でも魔法文明が存在しており、いずれ管理世界への参入が期待できる（最低でも魔導士としてスカウトできる人材を輩出する）世界ならば対応は早くなっていたのは間違いない。

冷酷な判断というには簡単であるが、管理局の運営資金は各世界の税金から出ておりしがらみから離れることは出来ないしこの件以外にも事件は発生しており物理的に動くことが出来なかったとも言える。

「…表向きはな…」

資料をスクロールさせつつクロノは呟く。

ばら時かれたロストログアの名称は「ジュエルシード」、最悪「次元震」と言う惑星丸ごと滅ぶような次元空間まで巻き込んだ空間破碎現象を発生させかねない危険物である。

その影響が次元空間を通して他の世界に及ばないとは言い切れない。そこまで行かなくても、憑依暴走による被害も無視できるものではないしそれが原因で魔法の存在が現地にバレる危険性も高い。

管理外世界で魔法文明が存在しない「ハズレ」の世界とはいえ、ここまで初動捜査が遅れるのは不自然である。

「…まあ、また上の方が何やらやってくれたんだろうな。」

自分の上司でありこのアースラの艦長…提督でもある母親リンディ・ハラオウンの所属する派閥のボスであるギル・グレアム提督は今向かっている管理外世界の出身で、突然変異的に高い魔法の素養を持つていたため管理局入りしその後派閥のボスになるまでの出世を果たしている。

つまり、管理局内にも敵が多くいると言うことである。

何らかの政治的な圧力や取引が動いて初動捜査が遅らされその後解除されたとクロノは見ている。

組織と言うものは必ず腐敗するものであるとクロノは弁えている。

世界の平和を守る正義の組織…等と言う幻想は任官して1～2年で擦りきれた。

守るのは国家の治安であり管理局の威信。

現実はそのようなものであった。

それでも、前線に立つもの達は綺麗事の為に体を張っている者も多くおり失望するクロノを救ってくれた。

要は上に立つものが身を弁えていれば良いのである。

私利私欲に走ることなく、さりとて潔癖にすぎて寝技搦め手に対応出来ないのでもなく、清濁会わせ飲む事ができた上で最初の志を忘れない存在。

クロノは自身がそうなるかと決心し上を目指しているが周囲には何も話していない。

周囲を信頼出来ないとまでは思っていないが、自分がいまだに経験の足りない若造であるという自覚はあるのもつと良く人を見極めてからでないと、足元をすくわれるか良いように使われるのがオチであると弁えている。

だからクロノは本心を隠し、融通の効かないカタブツの執務官として振る舞っている。

子供特有の潔癖さを持った有能だが頭の固い少年と言うのが周囲から見たクロノである。

母親であるリンディ提督からも「カタブツ」と評されている。

母もまた父亡き後、長年管理局の中の政治の海を泳いで来た人間である。

根は悪い人間ではないが、必要とあらば部下を斬り捨てる事も知っているし、自分とてバレたらどう利用されるか判ったもんじゃない。

資料に目を通しつつ溜め息をつくクロノ。

父のようになりたかった、困っている人を助ける正義の味方になりたかった。

青臭い理想を実現させたい、それだけだったハズなのに…

「世の中こんなはずじゃなかった事ばかりだ…」

それでも、歩みを止める事はない。

全次元世界で一斉に文明のパラダイムシフトでも起きない限り、管理局が魔法で治安を守って行かねばならないのだ。

そして、前線で身体を張っている仲間達がいることを知っている…  
知ってしまった以上、クロノに歩みを止めると言う選択はない。

次元世界の治安を維持するためには管理局が必要であり、多くの局員達は身を張って任務をこなしている。

特権を振りかざす者、非魔導士を蔑視する魔導士が局員にいるのもまた事実であり、上層部が管理局の本分を忘れて政治ゲームにうつつを抜かしているのも事実である、がしかしバカは一部だけであり大多数の者は懸命に任務をこなしている。

だからクロノは、今は様々な意味で力を蓄えるときと考えて仮面を被る。

青臭い理想を実現させるその時まで、黒髪黒瞳に不機嫌そうな表情の少年と言つ仮面を。

「…現地時間で2週間ほどの間に3回の膨大な魔力放出が確認され、その後は反応無し。

……訳が分かん。」

目的の管理外世界に設置されていた観測機からのデータを読みなが

ら呟く。

魔力解放など無いはずの管理外世界での魔力解放反応、しかしジュエルシールドでの魔力解放ならばこんなものでは済まないはず。

さらに言えば、魔導士のいないはずの管理外世界で誰が魔力解放をしたのか？

暴走して吹っ飛んだだけなら観測機からその旨の連絡が入るはずであるが、それは入っていない。

スクライアの一員が先行しているはずだが連絡が入っていないと言うことは、何らかのトラブルでも発生したのであろうか。

「…やはり、現地入りして見ないとどうにもならないか…」

数時間の後、目的の管理外世界で微弱な次元震が観測されたとの報告が入りアースラは速度を上げ、転移魔法の使用可能域に到着次第クロノは現地に向かうことになった。

黒づくめのコートのようなバリアジャケットを展開し転移ゲートに向かう。

戦闘目的の補佐官を持たないクロノは常に単身で出撃しているが己が実力を過信している訳ではない。

今回も武装隊の隊長に待機を依頼している。

万が一己が手に負えないモノが関わっていた場合のためである。

武装隊は我々の世界で言うところの海兵隊の様なもので、捜査スキルを持つ執務官や治安維持を任務とする警備隊とは異なり純粋に戦闘能力を追求した荒事の専門家である。

指揮系統としては管理局本部に所属し、今回のような場合は各部所の依頼に応じて派遣された形になっている。

今回は任務が終了し本部へ帰投中の艦に搭乗していた武装隊員を借り受けている。（ちなみに武装隊員達はこのくらいでは疲労を見せない程鍛え込まれている。素の体力なら執務官より遥かに上である。）

つまり、アースラに搭乗している武装隊を動かすと金が掛かるのである。

ましてや武装隊員が負傷したり死亡したりすればその補償をしなければならぬ。

よって普通は好んで武装隊を動かそうとはしない。

しかしクロノは

「金で事件が片付くなら安いものだ。事件を片付けるのが管理局の仕事だろう。」

と言い切る。

何故、アースラに専属の戦闘部隊が居ないのか。

これも金に絡む話で、基本的に艦の兵士（地球の海軍の水兵にあたる）は艦の航海に必要な仕事をやっており戦闘訓練ばかりやってはいられない。

かといって、荒事がなければ無駄飯食いの武装隊を専属で置いておくのはもったいない。

また、パトロール任務の艦には執務官が搭乗しており執務官権限でパトロール先の駐留部隊の戦力を借り受ける事ができるのもあって必要な時だけ武装隊を借り受ける方が経費の節約になる。

さらに、執務官と言うものは大体にして高い戦闘能力を持っているのでワンマンアーミー的な行動が多く、武装隊を使わないことも多い。

このため、基本的に次元航行艦には武装隊を置かずに必要時のみに運用する事による予算の節約を基本としている。

そして、一度節約をしてしまうと次から使つのに躊躇するようになる。

そして、次元航行艦の指揮者クラスの者は武装隊を使つのを嫌うようになっていくのである。

本末転倒とクロノは断じる。

武装隊の運用の改革もクロノは考えているが、これもまだ口に出した事は無い。

ただ武装隊員の人物をよく見て、いずれ仲間となってもらえそうな隊員のリストを作っているだけである。

転送魔法の座標確認を行うオペレーターの声を聞きながら、クロノは気になる情報を頭の中で再度チェックしていた。

魔力反応は無かったが微細な空間の歪みが何度か確認されているのだ。

次元震に発達する心配も無いような、些細な現象であるがなぜかクロノの頭に引っ掛かっていた。

「クロノくん、転送準備完了したよー。」

アースラブリッジオペレーターのエイミィ・リミエッタの声が掛かり、クロノは思考を打ち切った。

マルチタスクで思考を続ける事は出来るが、転送終了後に何かあった際の事に備えての事である。

「ではクロノ、言うまでもないけどロストログアの回収には危険が伴います。」

無理は禁物よ。」

空間投影モニターをクロノの目前に開き声を掛けてくるアースラ艦長リンディ・ハラウン提督に

「分かってます、僕も初めてと言う訳ではないんです、引き際を間違える事はありませんよ。」

少々不機嫌そうな声色で返すクロノにモニターの向こうに映る2人、ブラウンのショートヘアの少女エイミィとエメラルドを思わせる髪の毛のロングヘアをポニーテールにした20代に見える女性リンディ提督。クロノの母でもある、即ち外見通りの年齢では無い。は何時もの事だと苦笑している。

「では、クロノ執務官『第97管理外世界』でのロストロギア『ジュエルシード』回収任務へ出発してください。」

「了解しました。」

足元に魔方阵が輝き、それに沈み込むようにクロノの姿が消えていった。

現地時間でもう夕闇が迫る頃に高度数百mの空中に出現したクロノは、即座に飛行魔法をストレージデバイス「S2U」に命じて起動。目的の次元震が観測された座標を目指して移動を開始した。

目的地「第97管理外世界日本国内海鳴市」

「…地球って呼べよ…」

通信に乗らない声で呟くクロノ。

管理外世界に番号を着けるのは仕方ないが、個別の名称が有るのがほとんどなのにそれを使用しない事にクロノは魔法文化圏の優越感

の様なものを感じ不快感を覚える。

また派閥のボスであるグラム提督にも、「優秀な管理局員」「魔導の先達」である事は別として、「ふとした拍子に漏れる自分の故郷を下に見ている発言」に不快感を覚えている。

さすがにこう言ったことを誰かに漏らしたことはない。

敵を作るのも味方を減らすのも今は避けるべきであるからと考えての事であるがそうした考えが彼にストレスを与え続けている事に本人は気づいていない。

自分が考えている以上に、彼は年相応に潔癖な少年なのである。

転移時に複数種の認識阻害魔法を発動させているので、リーダーや人工衛星写真等を気にせず太平洋側近海に転移できたクロノはそのまま海鳴市へ接近、そしてそれに気づいた。

「?…魔力反応が二つ！

魔導士同士の戦闘か!?

管理外世界で何をやっている!!」

不快感を隠すこと無く面に顕しクロノは飛行速度を上げる。

ものの30秒程で目的地にたどり着いたクロノが見たのは、

「…何をやっているんだ?」

簡易的な結界：人払いの結界を張って魔力を込めたデバイスで互い

を叩きあっている2人の少女の姿であった。

「…とりあえず…止めるか…」

すぐ近くに封印処理がなされたジュエルシールドが存在しているのに気がついたので弛んだ気持ちはもう無くなったが、明らかに子供の喧嘩しか見えない光景とアンバランスなまでの2人の少女が放つ魔力の多さにコメカミが痛くなってくる。

「…君達、即座に…」

戦闘をやめろと言いかけたところで、2人の少女魔導士とジュエルシールドを蒼い透き通ったスライムのようなものがまとめて飲み込みそのまま地表へと落下していった。

慌ててその後を追ったクロノが見たものは、黒髪の少女に後ろから頭をわしづかみにされて地面に正座させられた状態で金髪の少女に何やら説教されている2人の姿であった。

「……君達、何をやっているんだ？」

事の始まりは温泉旅行から帰って数日後に見つかったジュエルシールドであった。

街中に放たれた魔力の波動に反応し、発動しかけていたそれに気づいたのはとユーノが現場に到着した時フェイトとアルフもそこにやって来た。

魔力を放ったのがフェイトと気づき、何故こんな危険なことをしたのかと詰問するユーノに2人は何も答えなかった。

なのはが気にしたのは2人の表情であつた。

前の旅行の時は言い争う事もあつたがその表情に力があつた、しかし今の表情にはそれが感じられない。

それなのに2人はジュエルシードを手に入れようとなのはに闘いを仕掛けてきたが、なのははこれに戸惑いを覚えていた。

前回の闘いの影響が互いに砲撃魔法を使うことに躊躇いを持ち、誘導弾とデバイスによる白兵戦が展開されたが互いの意志が噛み合わない闘いは無駄に長引き、結果撒き散らされた魔力に反応してジュエルシードが暴走してしまった。

これをフェイトはデバイスの破損もあつて素手で封印しようとした。

その場は何とかなったものの、一歩間違えばフェイトの命はなかったとフェイトの手の治療をしたユーノはなのはに話している。

その後フェイトは2人の前から逃げるようにしてジュエルシードを持ち去っていった。

何故フェイトがあんな事をしたのか、なのはは考えたが解らなかった。

学校でも考え続けて、アリサとすずかに不審がられたが事情は話さなかった。

フェイトが危険なことをしているとは言い辛かった。

そして考え抜いて出した結論は

「フェイトちゃんに直接聞く！」

と言うシンプルなものだった。

「…なのはが思う通りにすれば良いと思うよ…」

少し疲れたような声音でユーノも賛成してくれた。

そして考えた作戦が、手持ちのジュエルシードを⌘にしてフェイトをおびきだして話を聞こうと言うものであった。

結果フェイトはおびきだされた。

対峙した2人は言葉をかわす。

2人の邪魔にならないようにアルフはユーノが転移魔法で諸共に連れ去った。

「…フェイトちゃん、どうしてもあんな危ないことしたの？」

「答える必要はないって前に言っただよ？」

「私がどうしてジュエルシードを集めるのかきちんと答えられないから？」

「…そうだよ…」

「…じゃあ、今日はちゃんと答えるよ。」

私がジュエルシードを集めるのは…最初はユーノくんのお手伝いだったの…」

ここで少し苦しい表情をなのはは浮かべた。

嫌なことや辛いことを思いだしているかのように。

「…そのうちに今度はR×に出会ったの。」

魔法は使えないけど私達より強くて上手くジュエルシードを片付けられる…人？」

何気にひどいことを言っているが本筋には関係無いので話を進める。

「…それから、私はいっぱい失敗したの。」

たぶん私の失敗で怪我をした人とかいると思う。

R×からも無責任に関わるなって怒られた。

だから、もう止めようかなって思ったこともある。

あんな怖い怪物も出てきたし…」

「……」

「…でもね、こうも思ったの。」

私にもできることがあるのに何もしくなくても良いのになって。」

「…それは…キミの…ただのワガママじゃ？」

「うん、そうこれは私のワガママ。」

私はこの街を守りたいの。あれだけ失敗していっぱい迷惑かけたの

に、出来ることなんてきつと少ししか無いのに…それでも私は何かをしたい。

ひょっとしたら、私は魔法を使いたただけなのかも知れないけれど…」

「…なのは…キミはすごくワガママだ。」

「うん、自分でもビックリだよ。

自分がこんなにワガママだったなんて。

何でだろうね、お父さんに怒られたりあればダメって言われても言う通りにしてたのに？

… R x に言われたから？」

「…なのは…キミ R x のことキライ？」

「うゝっ…最初の出会いからして失敗だったから…  
苦手意識が…」

「私も初めてあつてすぐにジュエルシードの取り合いだった…」

「…第一印象最悪？」

「…否定できないかも？」

「にやははは…」

「ふふふ…」

ひとしきり笑ったあと、なのはがフェイトに声をかける。

「…フェイトちゃん、今度は答えてくれる？」

「…私の理由は…母さんのため。

母さんがジュエルシードを欲しいって…

母さんの夢を叶えるためにジュエルシードが必要だから！！

母さんのためなら何でもできる！！」

答えるフェイトの顔は以前のものとは違っていた。

「…それがフェイトちゃんの原因…

…うん…賭けるよ、ジュエルシード。

フェイトちゃんも賭けて。勝った方が両方持っていくの！」

こうして2人の魔法少女は激突する。

前回と同じく、誘導弾と白兵戦のみではあるがフェイトは高速移動魔法「ブリッツアクション」を使い手数でなのはを攻めたて、なのははその分厚い「シールド」で周囲を固めてフェイトの攻撃をいなし以前開発した誘導射撃砲台魔法「デイバイン・シューター2」でフェイトに無数の魔力弾を浴びせかける。

「デイバイン・シューター2」は思考誘導を術式から取り外し軌道を単純化したかわりに、誘導弾本体から小型高速の非誘導魔力弾をマシンガンのように発射する所謂「ファンネル攻撃」を行う攻撃方法である。

これでフェイトの移動方向を限定誘導し正面からの魔力付与したデバイスでの殴り合いに持ち込んだのだ。

高速機動戦や搦め手に持ち込まれては不利であるのは明白、ただの誘導弾ではスピード負けして当てられないので逆に当たらなくてい

いから弾をばらまいて面制圧する方法を選んだのはの作戦勝ちであつた。

2人とも似た者同士と言うか、熱くなると周りが見えなくなるらしく2人が撒き散らした魔力の影響でジュエルシードの封印が解けかけているのに気づいていない。

「はああああっ!!」

特大の魔力を込めたデバイスを互いに振りかぶったところで、飛来した蒼いスライムの様なものに2人まとめて飲み込まれた。

2人の決闘の舞台となった海鳴臨海公園の地面に蒼いスライムから吐き出された2人が転がる。

その前に2人の少女が立っていた。

見るからに「私怒っています」という表情のアリサとにこやかに微笑んでいるのにコメカミに太い血管が浮いているすずかであつた。すずかがおもむろに2人の頭に手を置く。

そして、ジワジワと指に力が込められてゆき

「にゃ!?!にゃあゝ、すずかちゃんギブ!ギブ!」

「痛い!?!イタタタッ!」

込められたエネルギーは極めて小さい…というが無視できるレベルのモノなのですずかのアイアンクローにバリアジャケット等の防護

機能は反応しない。

ダメージ的には無視できるレベルだが、地味に痛いのだ。

「ねえ、2人ともどうしてこんな危ないことするのかな？」

にこやかに語りかけながら2人の頭を押さえ込んで正座させて自分は後ろに回り込むずか。

「あんたたち、バカでしょ!？」

前にも言ったわよね、周りの迷惑考えろって!

つか、ジュエルシード爆発させて街ごと吹っ飛ばす気か!!!」

怒髪天を突くと言った風情のアリサ。

「だいたいあんたちは…」

続くアリサの説教に涙目になっていくのはとフェイト。

危なくジュエルシードの暴走と言うのは今にして思えばその通りなので反論することも出来ない。

「レイジングハートにバルディッシュ!!」

あんた達もAI付いてんなら2人を止めるとか、動作拒否とかしてみなさい!!」

それとも、そのピカピカ光る玉は飾りかつ!!」

「YES、Mum!

I'm、sorry!!」

とうとう、デバイスにまで飛び火してきた時、

「…君たち、何をやってるんだ？」

頭上から疲れたような声…一部始終を見ていたクロノの声がかけられた。

「…そして…君は…何なんだ？…」

その視線の先には、蒼いスライム…ゲル化したバイオリダーから元の姿に戻っていたR×がいた。

少し時は遡る。

太平洋上の「グローリアス号」の内部、時空魔方陣起動用エリアにて。

不気味に蠢く肉片の様なものを真ん中に置いた銀の魔方陣…時空魔方陣がいくつも床で唸るような音をあげていた。

その魔方陣の中の肉片は、魔方陣の唸りが強くなる程に膨らみ盛り上がり何かの形を成して行く。

やがてそれは銀の光の中で異形を形作っていく。

人と獣の混ざった異形の姿を…

「ひとまずここまでといったそうか…」

落ち着いた声音のあと、時空魔方陣の銀の輝きが薄れ、唸り声を漏らす20体程の異形の群れが残された。

「これが時空魔方陣の真なる力。  
時の流れさえ操り、死したる怪人たちに瞬く間に新たな肉体を与える。

まったくもって素晴らしいの一言につきる。」

白い中東風のゆつたりとした服を纏いターバン風の白い帽子を被った褐色の肌の男が後ろを振り替えて話しかける。

その視線の先には、ゆつたりとしたローブを纏った少年…ヴラドが不気味な笑みを浮かべて壁にもたれていた。

「ザッハーク卿…されど、我々は未だ時空魔方陣の力を全て使いこなしてはいない。

『魔の国』と此方をつなぐ扉を開くほどには…」

「然り、故に此度の作戦と相成ります。

程なく現れるであろう客人達まれびと「次空管理局」を捕えてその技術を奪い、『魔の国』への扉を開く…ウルス卿のもたらした情報は何とも希望に満ちたものであることよ。」

「我らの同胞達が群れを成して此方に押し寄せる様を早く見たいものよ。」

「それだけではなく新たな闘争の舞台『次元世界』とやらの情報も手に入れねばな…」

薄闇の中で男達の声が響く。

「…何、今少しの辛抱であるかな。」

愉しげな含み笑いのような声が余韻を残しつつ闇の中に消えていった。

## 第10話

来訪者ゝたずねきたるもの（後書き）

今回は、なのは達とR xと管理局陣営のファーストコンタクト。

R xとアースラメンバーの駆け引きが始まります。

設定資料？

高町美由希（17歳）

恭也の妹、なのはの姉。

戸籍上は従姉妹となり、士郎の妹の娘。

明るい性格の今時の女子高生。

御神流の剣も修めており、その才能は恭也より上だが実力は未だに及ばず。

万年新婚夫婦の両親に、当てられつつも「彼氏」が出来ないのが悩みである。

月村忍（19歳）

すずかの姉にして、多忙な両親に代わって月村家の当主を代行している才媛。

そして恭也の彼女である。身内と認めた人物には開けっ広げだがその他の人間には、無関心といった極端さを持っている

好奇心が強い性格をしているので事件に関わらないように魔法のこ

とは教えていない。

## 第11話 ファーストコンタクト（前書き）

第11話を投稿します。

前半は管理局との交渉メインでちょっとタルいかもしれません。

後半に次回大暴れ予定の第三のデルザー魔人と再生怪人軍団が登場しラストで先輩ライダーが登場します。

## 第11話 ファーストコンタクト

「高町なのは、聖祥小学校三年生です。」

「ユーノくんのお手伝いでジュエルシードを集めています。」

「アリサ・バニングスよ。なのはの同級生。あつ、それと私は魔法は使えないわ。」

「月村すずかです。」

「二人の同級生で、私も魔法は使えません。」

「ユーノ・スクライアです。」

「ジュエルシードを追って来ましたが負傷してしまったところをなのはに助けてもらいジュエルシードの搜索も手伝ってもらってます。」

「……仮面ライダーBlackRx。」

「強いて言えば、ボランティア……かな？」

「……次空管理局執務官クロノ・ハラウン……状況の説明を要求する……」

### 第11話 ファーストコンタクト

海鳴臨海公園近くの砂浜。

残照がさす海辺に異様な一団がいた。

砂浜に簡易テーブルとパイプ椅子が置かれそれに着席した数名のまわりを屈強な体格の男達が10人以上で取り巻いている。

男達の服は白と青を基調としているがイメージとしては軍服であった。

彼らが囲むテーブルでは

3人の少女と1人の少年、そして一体の異形が椅子についていた。

「リンディ・ハラウン提督が来られる。」

黒いコート状のバリアジャケットを纏う少年クロノがそう言うところ、テーブルの横に魔方阵が輝き、エメラルド色の髪をポニーテールにした妙齡の女性：リンディ提督がそこから現れた。

二人の少女：アリサとすずかは「おおー！」と驚きの声を上げるが、もう一人の少女なのはと異形の者R×はさほどの反応は示していなかった。

「お待たせしました。」

次空管理局本局所属パトロール艦アイスラ艦長、リンディ・ハラウン提督です。」

ニツコリと魅力的な笑みを浮かべて話しかけてくる相手にR×はこれからが本番だと気合いを入れ、マクロアイに触覚センサー（ソーラーリーダー）にOシグナルと全ての感覚器を起動させ相手と周囲の情報をかき集め始めた。

体表面の温度変化に脈拍心音さらには分泌されるホルモン物質の匂い等から相手の心理状態や言葉の虚偽を判断しようとしているのだ。

はつきり言って、少々見苦しい。

相手が判っていないから良いようなものの、バレたら即交渉決裂ものである。

何故このような事になったのかと言えば、なのはとフェイトがアリサとすずかに説教をくらっているところにクロノがやって来て状況の説明を求めたところに遡る。

それだけなら言うては何だがよく有る話だったろうがそこにR xがいたことが話をややこしくした。

クロノから見るとR xは真つ当な存在には見えない。

ゲル化を解いて元に戻るところを見られていたのが不味かった。

明らかに異常な存在と警戒されている。

クロノの故郷である次元世界にも奇妙な生物は存在する。しかしそれらは魔力収集器官リンカーコアを持ち魔力の影響で特殊な能力（元々あった能力が強化されたもの）を持ったり、巨体を持つようになったものが居るくらいでR xがクロノの前で見せたような体を丸ごと変化させるようなモノは存在しない。

クロノが自身に多重掛けしていた認識阻害魔法のお陰でバイオリダーのセンサーに引つ掛からず、なのは達の回収に急いでいたためセンサーからの反応の無さに注意を払っていなかったための失態であった。

空に浮いていたり話している内容からも魔法関係者なのは間違いないだろうが、いつぞやのなののように勘違いで攻撃されてもかわない。

それにそのなのは達と変わらない程度の年齢にも疑問がある。

さて、どう話したのか、いやそれ以前に会話できる知性があるとは思われていない可能性もあるかとR xが考えていると、

「……あつ？」

と声をあげたなのはすぐ近くに魔方陣が展開し、その中から飛び出したアルフがフェイトとジュエルシードをひっ掴んで再び魔方陣に飛び込んだ。

R xを警戒していたクロノは反応が遅れ、バインドを放ったがかわされてしまう。

後を追おうとしたなのはに魔方陣の中のアルフの手から茶色い何かが放り込まれた。

「ユーノくん？」

「うう…なのは、ゴメン…」

アルフに負けたのか目を回したユーノがなのはの手の中で謝る。

その間にアルフとフェイトを飲み込んだ魔方陣は転移を完了させ消えてしまった。

魔方陣が消えたあとを睨み、苦虫を噛み潰した様な顔をしていたクロノがなのは達を見て不機嫌な口調で問うた。

「…状況の説明をしてもらおうか…こちらは次空管理局執務官クロ

ノ・ハラオウンだ。」

ユーノが復調したところで冒頭の自己紹介が行われ、R xがしゃべれた事にクロノがギョツとするもある程度の情報交換が行われた。

クロノが全員にアースラでの詳細な事情聴取を提案したがR xがこれに難色を示した。

理由としては

「地球人からすると次空管理局が治安維持組織である証明がないこと。」

「仮にそうだとしても、クロノが管理局員である証明がないこと。」

「他国の治安維持組織ならば国交のない他国の国民を情報を入手した後、口封じに殺害する様なこともあり得ること。」

「そのような状態で相手の母艦に向かうのは自殺行為であり、ましてや子供達を連れていかせる事は出来ないこと。」

R xはこれらを告げて

「後日、改めて互いに納得できる場所での会合。」

を求めた。

これ等が全て通るとは思っていないが先ずは相手の対応を見るのと時間稼ぎが目的である。

紳士的に対応するなら良しさもなくば近場に隠してあるアクロバッターとライドロンを乱入させ、なのは達を脱出させる腹つもりである。

「…こちらの指揮官と相談してみよう。」

信用されていないという事に顔を顰めつつもクロノも譲歩した結果、

「時間が惜しい。」

とのリンディ提督の判断により近場の砂浜に結界を張っての会合を提案された。

R Xもなのは達の都合を聴いて見たところ

「すぐに済ませよう。」

とのことで早速の会合となった。

テーブルについたなのは達の緊張した面持ちを見て、リンディは相手の緊張を和らげるような微笑みを向けるが、その顔がR Xと目線が会ったところで困ったような微笑みになる。

何せR Xの顔には一切の表情が無い。

何を考えているのか伺い知る事が出来ないのだ。

リンディがチラリとクロノに目を向けると、彼も心得ているのか

「君たちもそのままだと窮屈だろう、バリアジャケットを解除したらどうかな？……あゝ、君のは戦闘服か？」

「…なのはちゃん、そのままでいなさい。」

周囲を兵士で囲まれた状況で武装解除はあり得ませんよリンディ提督。

それから、俺のはこれが素の姿ですから脱げません。悪しからず。」

RXの返答にリンディは困ったような顔で頬に手を当て、その横でクロノが眉間にシワを寄せている。

「…なら、君はどうする？」

次いで声をかけられたのはユーノであった。

「…ああ…そうですね。」

なのはの肩から降りると、足元に魔方陣を展開しその中でユーノが光に包まれる。

光が消えたあとそこには一人の少年が立っていた。

「あゝ……アリサとすずかははじめましてかな？  
なのはとは二度目だね。」

多少引き釣った笑みを浮かべて、薄い金髪におとなしげな顔つきの砂色の民族衣装風の服にマントを羽織った少年がなのは達に声をかける。

あっけに取られていたなのは達が次の瞬間声をあげる。

「『えええー？』」

「ユーノくん？」

フェレットじゃなかったの？」

「ユーノ！」

あんたなんなのよ？」

「…何でもありませんね魔法って…」

混乱している四人の横でRXはコメカミを指で押さえつつ

『…まあ、アリかなあ。』

と、考えていた。

その横で顔を真っ赤にしたアリサがユーノを両手でポカポカと叩いていた。

「痛い痛い、アリサ痛い！？」

「あ、あんた人間！  
男っ？お風呂にっ！！」

何で！何で！何でっ！！」

「…ユーノくん、エッチ…」

すずかもユーノの顔を覗き込んで、頬をあからめつつ呟く。

「お風呂って？」

僕が自分で入ったわけじゃないでしょ！

すずかの家では気がついたら入れられてたし、温泉だと僕嫌がったのにみんながムリヤリ〜！」

「うっさい！うっさい！」

「だってユーノくんが男の子だなんて知らなかったんですから……」

「なのはは知ってたけど、自分からお風呂に連れてったじゃない！？」

「ふえっ？」

わっ私知らないよ？

今日初めてだもん。」

「ウソだ〜、初めて会ったときに……」

「最初からフェレットだったよ？」

「………そうだったっけ？怪我で意識がはつきりしてなかったから

……」

「」「」「………」「」「」

暫くの沈黙のあと、

「……やっぱりユーノくん、エッチです……」

すずかの呟きに、アリサがまた顔を赤くしてポカポカとユーノを叩き始めた。

「こんなオチになる気がしてたんだ〜！」

「…ねえ、すずかちゃん。アリサちゃん何を怒っているのかな？」

なのはソチラ方面はまだ判らないらしい。

「…なのはちゃん、ひょっとしてまだお父さんとお風呂に入ったりしてる？」

「…？うん、ときどき。」

「…そうですか…」

なのはの回答になま暖かい笑みを向けるすずか。

「…君達、話を進めたいのだから！！」

クロノの怒気を含んだ声になのは達が居住まいを正したところで話が再開される。

まずは管理局の証明から。

これには先ずユーノが破損した自分の長距離通信システムの代わりに貸し出してもらい、スクライア一族と懇意にしている管理局員のお偉いさんに連絡をとった。

次にいくつかの合言葉のような互いにしか判らない会話のあとにハ

ラウン親子の面通しとアースラの現在位置と作戦内容を確認してもらい少なくとも「管理局」員であることは確認してもらった。

次に互いの基礎的な知識面からとR×が切り出し、機密に当たることとか答えられない事は言わなくて良いと前置きして質問を始めた。

彼らが何処から来たのか、次元世界や次空管理局の説明、何故日本語を話しているのか。

ちなみに『日本語』の話題に関してはR×はかなり突っ込んで質問した。

フェイトが記憶操作系の魔法を使っていたことから、脳に知識や記憶を流し入れる魔法：転じて洗脳系の魔法の存在を疑ったからだの結果的にはほぼ黒、地球の知識を学んで身に付けているものも居るが時間の無駄を嫌いそのような

「必要だが習得に時間を掛けられない知識」

を魔法で頭に入れる者も少ないとのこと。

便利な道具が有れば悪い使い方を考えるのが軍隊や警察の暗部の常であり、逆を言えばそう言ったことを考え想定できない組織に治安維持の能力は無いとも言える。

面白いことは、彼らが公用語として使う「ミッドチルダ語」、第二言語となる「ベルカ語」が互いに「英語（発音的にキングスイングリッシュ）」「ドイツ語」であることである。

生物学的に次元世界の人間と地球人が同種であることは既に間違い

ないらしく、管理局員に地球人や地球人を祖先に持つ人々も存在すると言ったことで、文化面に置いても

「収斂進化（鮫とイルカが似たような形をしているように環境が同じなら出てくる答え『進化』は同じ形になること）」

すると言った説と

「もともと同じ文明から発した人類が各世界に散らばっていった。」  
という説があるそうだ。

どちらもかなり乱暴な説だが、次元世界はほんの百数十年前まで遡ると群雄割拠の戦国時代で考古学や民俗学の知識の元となるものは壊滅状態であり、このような与太話に近いものも否定できないとのこと。

故に「スクライアー族」のような「考古学者」を生業とする一族が、墓荒しや盗掘屋等と呼ばれず又手を汚さなくても良いほど仕事があり続けているのである。

ここまで話して、RXは彼らの生理的反応が地球人と同じものと判断する。

今までの会話の中でも、管理局の理念に疑問を挟んだり多少挑発的な発言をしたり（クロノの年齢を引き合いに出して少年兵の問題を話したり）して相手の感情を揺さぶり体温の変化や分泌物の臭いの変化などをチェックし続けた。

周囲を囲む兵士…武装隊員達是不快げに歪む表情と生理的变化は地球人と一致していた。

リンディ提督は小さいながらも生理的变化は見られたが表情は基本的に笑顔のままで、交渉経験が豊富な腹の中と表情が一致しない人物であると思われた。

面白いのはクロノで、こちらの挑発に反応するのだがそれは表情だけで生理的反應から見ると演技で表情を出していることになる。

しかし演技だけと言うわけでもなく、組織の理念を語るリンディ提督の話の時に相槌を打ちながら冷めた（生理的）反應を示したかと思えば、前線の兵士について挑発的な発言をしたR×に食って掛かるときは表情と反應が一致していた。

内心を隠しているのは明白だが、海千山千のリンディあたりにはバシっているのではないかとR×は思い少々微笑ましくクロノを見てしまう。

『堅物エリートを演じているが、中身は組織よりも前線に気持ちが傾いている潔癖な少年。』

と言うのがR×のクロノの印象である。

ここまででかなり周囲の雰囲気が険悪になってきた。

色々と挑発的な言葉を吐くR×に周囲の視線が突き刺さる。

険悪な空気に居心地悪さげに身じろぎするのは達に、R×もここまでかと一旦話を切ることにする。

「…取り敢えず次の質問で俺の質問を終わりにします、………シヨッ

カーもしくはゴルゴムと言う名前に聞き覚えは……そしてクライシス帝国について知っていますか？」

ショッカーとゴルゴムに関しては、それらの組織が地球外からやって来たモノであると思われるため、次元世界からやって来たものではないかと言う可能性を気にしたからで

「…ショッカー…ゴルゴム？……何の事でしょうか？」

このリンディの反応が生理的変化から嘘がないと判っただけで十分だった。

名前を言っただけで組織とは言っていないのも、組織名ではなく何かの象徴するものを指している可能性を考慮したからである。

「クライシス帝国と言うのは国家の名称でしょうか？そちらも心当たりはありませんが…」

こちらは嘘である。

クロノは年齢的にもリアルタイムに知ることはないだろうし、地球のことをかなり念入りに調べる事が無ければその後知ることもない、さらに言えば説明通りの仕事を管理局員がやっているのならば「管理外世界」の事にそこまでする暇もなかるう。

しかし「次空管理局」としては、「管理外世界」とは言え情報を収集していた世界の動静を知らないと言うことはあり得ない。

そしてリンディは提督と言う地球の軍隊で言えば将官の地位に当たる人物であり、情報を閲覧する権利とこれから行う作戦行動のため

現地情報を把握しておく義務がある。

地球内でのテロ活動と言えるショッカー系組織やゴルゴムの活動は把握できなくても、クライシス帝国のよって行われた侵略活動は把握していなければ不味いだろう。

何時自分たちの世界にその牙が向けられるか分からないのだから。

そしてその問いに答える時の生理的变化はリンディが嘘を吐いているとR xに示す。

そこから導き出されるのは

「管理局は管理外世界には基本的にノータッチ。」

なのか

「クライシス帝国の侵略に介入しても国益が無い、もしくは戦力的に勝てないと判断した。」

のかと判断した。

取り敢えず、次空管理局と言う組織が

「後先考えずに武力介入して更に混乱を悪化させる。」

存在では無さそうだと言うことに安堵する。

逆を言えば、ジュエルシードの回収は管理外世界に首を突っ込んででも行わなければならないと言う事である。

ここで以前にR xが考えていた、ジュエルシールドが偽物である可能性が絡むと話がややこしくなってくる。

実行できる可能性が高いのは管理局によるマッチポンプ。

本物のジュエルシールドをばら蒔いて次元震が起きては不味いので、そこそこの被害を出す偽物をばら蒔き管理外世界に介入する理由とする。

おそらくロストした輸送船も元々存在しないモノであろう。

偽物とは言えかなりのエネルギーを秘めた物を準備したのだ、かなりの組織力が無くては出来ないことだろう。

何のために地球に介入するのかをこれから見極めなくてはならないが、取り敢えず目の前のリンディとクロノの二人は信じても良いかとR xは考える。

クロノの分かりやすい「生理的」反応と、交渉慣れしているとは言え「生理的」反応自体は普通のリンディはR xにとっては好感を持てるものだ。

「生理的变化」すらコントロールしているとは思えないCIA工作員のネゴシエーター（交渉人）や、少し前に改造人間のデータ欲しさにライダー達の拉致・殺害を企てたくせに共闘する事になったらニツコリ笑って握手を求めてくる軍人など精神的に人外に近い者達を知っている身としては。

「…そうですか…」

ではこれで俺からの質問はここまでで、何かあればまた後にも質問をさせていただく。

色々失礼なことを言って申し訳ない、此方としても聞いておかねばならないことだったので。」

「いえ、此方は気にしておりません。

そちらには必要なことだったのでしょう?。」

笑顔のまま

『何をしたのは知らんが何かやっていたのは判っているぞ。』

と返してくるリンディに、

「まあ当然だろうな」

と考えるR xであった。

二人の今のやり取りで、さっきまでの会話の間にR xが何らかの情報収集をしていたと気づいたクロノの顔に

「してやられた!?。」

と、朱が走る。

そんなクロノに内心すまんと謝りつつ、R xは会話の主役をユーノに交代した。

ジュエルシードの発掘から地球への来訪、なのはとの出会いと共闘を経てのR xとの出会い（殺傷砲撃の件はR xとの以前の打ち合わせ

せで伏せることにしていた。)そしてデルザー魔人との遭遇までを語り終えたユーノの顔はぶり返した恐怖のためか蒼白であり、その横に目をやるとなのは達も顔を蒼くして寄り添って震えていた。

「…少し待ってね。」

柔らかな笑みをなのは達に向けているリンディの前に小さな魔方陣があらわれ

そこからなぜかポットと急須に湯飲み等のお茶の道具が出てきた。

手慣れた手つきで人数分のお茶を入れたリンディが

「どうぞ、落ち着きますよ。」

そう言って薦めてきたのは香り立つ日本茶であった。

冬の寒さに凍えるからだを暖めているかのようにお茶を飲むのは達を見ながら、自分の湯飲みに砂糖とミルクを入れるリンディ。

それを見るR×は突っ込みを入れたいのを自重していた。

『…あっちでは、あの飲み方で良いのかもしれないし…』

「…君は飲まないのか？  
毒なんか入ってないぞ。」

皮肉げに問ってくるクロノに

「ああ、俺は飲み食いしなくてもいいんだ。  
太陽エネルギーがあれば。」

真顔で返されて

「…そうか…」

返答に詰まるクロノ。

その横でリンディが

「落ち着いた？」

とユーノ達に声をかけ、話を再開していた。

「ユーノくん、なのはさん、ここまでのジュエルシードの回収大変でしたね。」

とても偉かったわ。」

「だが、無謀な行動だ。」

微笑むリンディの横で仏頂面のクロノが二人の行動を切って捨てる。

それを受ける形でリンディが

「今後のジュエルシードの回収作業は我々次空管理局が担当します。貴方達はもう危険な事はしなくていいのよ。元の平和な生活に戻ってください。」

「…えっ？」

リンディの言葉に慌てるなのは。

「ちょっと待ってください！」

ユーノも納得できないと顔色を変える。

「今までの回収で危険な事は判っているだろう。」

さらには他にもジュエルシードを集めている魔導士に地元のテロ組織。

もう素人の出る幕じゃないんだ。」

辛辣なクロノの言葉に、場の空気が固まる。

「それは不味いと思うわ。」

固まった空気を動かしたのはアリサの声だった。

「どう言うことかしら？」

リンディの問いに

「…たぶん、なのはちゃん外されたら勝手に動くと思いますよ。」

さすがアリサの後を続ける。

「そうよ、この子すつごく頑固だから。」

今日だって、何か思い詰めているかと思ったらジュエルシードみたいな危険物の横でケンカするのよ。

目を離したりしたらどうなることか…

実際今日もヤバイ気がして後をつけてたら急に姿が見えなくなって。

「

「それで、前にユーノくんから聞いてた結界かなって思ってた、RXさんに連絡して来てもらったら…」

「案の定なかでケンカの真っ最中よ！」

ついさっきのなのはとフェイトの闘いを思い出して顔をしかめるクロノと困った表情を浮かべるリンディ。

「今回は認識を阻害するのと人を近寄らせなくする効果だけのものだったから、逆にそれに気付けは発見は容易い。侵入停止のモノでなくて幸いだった。」

追加で説明するRXに

「なのはが話をするだけって言ってたから…」

言い訳気味にこぼすユーノ。

「…やっぱりユーノくんじゃなのはちゃんのストッパーは出来ないみたい？」

「うう、すずかヒドイ…」

いたずらっぽくユーノを見て呟くすずかにうなだれるユーノ。

「一緒にジュエルシードを探させるとは言わないけど連絡とって状況把握出来るくらいは許可してもらえないかしら？」

「…アリサちゃん…」

親友を感動の眼差しで見るのは。

「…あんだ、こうでもしないと本当に突っ走りかねないからよ。端から見てる私達の心臓がもたないの！」

「うん！ありがとう。」

アリサの手を取って感謝するのはを見て困った顔をするリンディ。

「…仕方ありませんね…」

連絡用のデータはなのはさんが使っているデバイスに入れておきますが、使用の際はユーノくんの同席を条件にしますよ。」

「！？、提督何を言ってるのですか？」

「不確定要素を減らすためです『素人に引っ掻き回されないためです』。」

言葉と同時に念話で本音を語ってクロノを黙らせた後

「それから、作戦行動如何によつては通信に出られない時もあるから、そのときはごめんなさいね。」

「はい。」

「良かったですね、なのはちゃん。」

「ユーノ、と言うことはこれからもフェレットのふりしてなのはの家にすむの？」

「あゝ、そうなっちゃうか？」

「えへへ、これからよろしくね。

ユーノくん。」

「うつつん、こちらこそよろしくね。

…あの、できればフレットフード以外の食事を、たまにで良いから…」

賑やかに話す子供達をよそに、RXに向き直ったリンディとクロノは

「さて、今度は君の番だ。」

「貴方が何者で、デルザー軍団とは何を目的にジュエルシードを集めるのか？」

詳しく聞かせていただきます。」

笑顔を消して聞いてくるリンディにRXも

「ああ、此方としてもデルザー軍団に関しては聞いてもらわないと困るところだ。」

「デルザー軍団については？」

君自身についてはどうなんだ？」

不審なことを言っていると責めるようなクロノに

「俺自身については今回はさほど重要ではない。

知っておいて欲しいのは、奴等の恐ろしさとそんな奴等がジュエル

シードを狙っている事の危険性だ。

そして君達が奴等にどれくらい対応できるのかを考えてほしい。

俺自身としては君達にはジュエルシードの回収のみに集中して奴等には関わらないでいて欲しいと思っている。

此方の世界の問題で、対応すべきは俺達なのだから。」

R xは互いの責任の範囲が違うと答える。

「言いたいことは判るが…次元世界…魔法が原因で起きた事件を我々管理局がほっておく訳にもいかない。それから、今『俺達』と言ったな？」

君には仲間がいるとれる言葉だが？」

クロノの問いにR xは頷いて

「そこからかいつまんで話すでしょうか…」

改造人間…仮面ライダーの成り立ちとそれと対となる『組織』との闘い、その中の一つの組織にして最強・最悪の存在と言える「デルザー軍団」のこと、詳しく語れば徹夜しても終わらぬ内容とまた考えるだけで感情が爆発しそうになる「自分達」の誕生の経緯を努めて平易に感情を交えずR xは語っていく。

話すつどにリンディとクロノの平静を保とうとしている表情の裏で、嫌悪感を示す生理的反応が強くなっていくことにR xは気づいていた。

それが組織について語るときだけでなく、「仮面ライダー」について語るときにも示されていることに。

R Xはまだ知らない。

次元世界と呼ばれる魔法文化圏において自分達のような存在…質量兵器にして生体兵器でもある存在がどれ程忌み嫌われているかを。

文化と宗教におけるタブーと軍事と犯罪に絡む危険度においてどれ程疎まれているかを。

詳しく語るほど冷めていく彼らの反応に気づきつつも必要なことを語っていくR Xであった。

「……恐ろしい世界だな。人間を兵器にするなんて…そして、それを使って世界の支配を企んだのもまた人間…」

「地球人が未熟な存在であるのは否定しないが、その恐ろしいモノに対して立ち向かったのも人間だったんだ…そう、人間だったんだ。」

「…?」

感慨深げに呟くR Xに対して、訝しげな顔を向ける話を聞いていた一同。

仮面ライダー1号・本郷猛から連なる戦士の系譜。

彼らがどんな思いで闘いの道を選び、それを支えた人々がどんな思いでその姿を見てきたか。

語る必要の無い事は話していない。

今のところ関係者達にとっては仮面ライダーとは、理性的に対応してくれる「怪物」でしかない。

なのは達ともいまだ人間の姿で会ったことの無いのだから当然の反応ではあるのだが…

「現状そのデルザー軍団の改造人間がどれ程の戦闘能力を持っているのか判りませんが、ジエルシードを狙っている以上交戦を前提として考えるべきでしょう。」

武装隊の皆さんもその心構えでいてください。

よろしいですね、ファルケ三佐。」

周囲を囲む武装隊員の一人、隊長であるファルケ三佐に声をかけるリンディ。

「はっ、我ら本局武装隊が辺境の戦闘機人ごときに遅れを取ることなど考えられません。」

長身で屈強ないかにも軍人然とした金髪の男、ファルケ三佐が敬礼をしつつリンディに答える。

頼もしげな笑みを浮かべてR×を見る彼の視線には、侮蔑といったような負の感情を含んではいなかったが好意的なものでもなかった。

強いて言えばとるに足らないものを見る、無関心の視線であった。

「彼らを…改造人間を甘く見ない方がいいと思います。」

ユーノの言葉に一同の視線が集まる。

「貴方は実際に間近でその力を見ていたのでしたね。…様々な知識に通じるスクライアの一員としてその力を如何程のものと考えますか？」

リンディの問いに

「魔法が使えないことが何のハンデにも……逆ですね、僕達が魔法が使えることが絶対的なアドバンテージに成らないと言った方が良いでしょう。」

それと『改造人間であるから恐ろしい』のではなく、その人格が恐ろしいのです… あれは直接会ってみないと理解出来ないかと…」

其れほどのモノかと難しい顔になるリンディとクロノ、そして自分達が侮られたように思えて顔をしかめるファルケ。

ファルケの頭の中ではユーノの過大評価と判断されている。

よく言われていることで

「管理局員は『非殺傷魔法』で闘うので怖くない」

「殺す覚悟もないので怖くない」

と言うものがある。

ユーノの意見もこの辺りから出ているものであろうと考えている。

冗談ではないとファルケは思う。

非殺傷と言うが、要は攻撃として放った魔力塊（射撃の魔力弾、砲撃の魔力流、斬撃の魔力刃）が生体反応を感知したら魔力結合をほ  
どき

「飛んできてぶつかる鉄塊」

が

「飛んできてぶつかる雪玉」

になるだけであり、十分な量の雪玉は「雪崩」と同じであり人を殺傷するには十分な力を持っている。

使い手の手加減で殺していないだけの話なのだ。

また都市内の治安維持を目的とする警備隊なら、その職務の内容は街中のパトロールやこそ泥や強盗の捕縛となり「相手を捕まえること」であり「殺すことを覚悟する」必然性がない。

しかし、ファルケ達のような武装隊の相手は捕まれば後の無い重犯罪者やテロリストである。

捕まるくらいなら自爆して死ぬ者や、非殺傷ダメージでの失神

（柔らかいが大量に叩きつけられる魔力による衝撃による失神や自身の魔力をぶつけられた魔力で削り取られる事による疲労等によるもの）

を防ぐためにアップー系の麻薬をキメてくる者も多く見られる。

次元世界は管理局の実効支配とも言える治安維持を受け入れた世界のみで構成されており、そこに管理局による侵略的な行動で組み込まれた世界はない。

その世界の政府が管理局を受け入れることを決定して、その管理を受け入れているのである。

しかし、政府が決定したからといってそれに不満を持っていない国民がいないと言っわけではない。

むしろ必ずいると言ってよい。

その内のいくらかが

「反政府活動を行うテロリスト」

となる。

自分達が死ぬことも相手を殺すことも気に止めない相手と闘う為には

「相手が自分達をどう殺そうとしているのか。」

理解していなければならない。

そして生き残るため、自分が殺されることで仲間に不利益（仲間が殺される）が及ばないようにするためには相手を殺す必要があることを理解していなければならない。

その上で、殺さずに捕縛できるようならば捕縛し、またより多くそうできるように己が技能を高めて行く事が武装隊員には求められて

いる。

例えば、たとえ非殺傷であろうと空中戦ならば負けた相手は墜落して死ぬ。その時余裕があればバインドで捕縛して転送するか地上まで降ろす。

この時、周囲に対空砲が撃ちまくられたりして手が出せないなら見捨てる。

ファルケはそうするし、部下にもそう教育して徹底させている。

なるほど強敵であることは事実であろうが、油断なく鍛え続けてきた武装隊員の事を舐めて欲しくはないものだ。

そう考えるファルケの思考を少女の声が破る。

「あ、あのっ、フェイトちゃんの事はどうなるのですか？」

なのはにとってはそちらの方が優先事項である。

このまま行けば、フェイトは管理局とデルザー軍団の両者から追われることとなる。

管理局がフェイトを守ってくれると言う約束がなのは欲しかった。

しかしクロノの答えは

「管理外世界への侵入と無断での魔法の使用、さらに危険物であるロストロギアジュエルシードを集めている点、彼女が主犯でなく誰かの命令で動いているとしても軽犯罪ですませる訳にはいかんだろ

う。」

なのはの憂いを深めるだけのモノであつた。

「…ジュエルシールドが危険なのは次元震を起こすからなのか？  
もし、その危険が無いもしくは被害が無視してもよいレベルのもの  
だとしたら？」

「どう言つ事かしら？」

リンディの問いに答える事無くR×は席から立ち上がり背後を凝視  
する。

「…何か来る？」

その視線の先で、砂浜の上に無数の銀の光が現れその全てが時空魔  
方陣を形作る。

その中から顕れるのは異形の怪人の群れ。

瞬く間に二十近い怪人が管理局員達の周囲を取り囲む。

「総員戦闘体勢！！

アースラ待機部隊！転送急げ！！」

ファルケの言葉に瞬く間にバリアジャケットを展開しストレージデ  
バイスを構える武装隊員達。

「申し訳有りません、リンディ提督。  
越権行動のお咎めは後ほど。」

「いえ、正しい判断でした。」

「恐縮です。」

リンディの指示を待たずに指示を出した事を謝罪するファルケとそれを不問に付したリンディの会話の間にそれは起きた。

クロノの足元に時空魔方陣が現れ、その中からクロノの胴体を噛み千切れるほどの大きさの蛇の頭が跳び出しクロノに襲いかかる。

反応しきれなかったクロノを抱えあげ庇ったR×の胴体…腹部のサソバスクにその牙が撃ち込まれたのだ。

蛇の頭が時空魔方陣に引込み、その魔方陣も消えたあと

「すまない、助かった。」

礼を言うクロノの前で立ち上がったR×の噛まれた傷跡には、明らかな毒と思われるどす黒い液体がこびり付いており毒に侵されたのかサソバスクの水晶状の組織がジワジワと黒く染まっていた。

ふらつくR×の目線の先には怪人達の群れの奥から歩み来る一人の男の姿があった。

白いユツタリとした中東風の服とターバンのような帽子をかぶった褐色の肌の偉丈夫。

「貴公ならばこのような結末に違いないと信じておりました。さすが名にし負う仮面ライダーBlack R×。」

「甘いと笑つか？」

「いや、我等は悪なるが故に敵対する正義にも高きを求むる。  
何条持つて愚弄するなど…無論、我等は悪なるが故に微塵の情けを  
かけることもないが。」

そう言つて男は帽子をとる。

「ひいつ!？」

と、なのは達年少組から悲鳴があがる。

男の頭の髪の毛は、神話のメドューサの如くのたうつ蛇の群れであ  
った。

続いて服をはだけた男の身体は一回り大きくなり、さらにその全身  
を青黒い鱗が覆い両肩から二匹の大蛇が生えた。

先ほどクロノを襲おうとしたのもこの大蛇かもしれない。

その変貌に管理局員達がドキモを抜かれている間に変異は終わり金  
色の瞳の蛇男と化した男は、ゆっくりと前に歩み出て周囲にその威  
圧感を解き放つ。

なのは達のように恐怖にすぐんで立っていらなくなる者はいなか  
ったが、クロノもリンディもファルケ以下武装局員達も一気に吹き  
出した脂汗に塗れていた。

「先ずは名乗らせてもらおうか。  
我が名はザッハーク。

デルザー軍団の将が一人にして、毒の王。

身を蝕む毒から、心を弄ぶ言の葉の毒まで。  
捧げられし称号は悪霊<sup>シャイターン</sup>。

シャイターン・ザッハークと号すなり。」

そして右手を振り上げ、

「首魁の女以外は悉く討ち取るべし。」

そう言つて右手を振り下ろした。

奇怪な叫び声をあげて異形の群が殺到する。

血の宴が始まろうとしていた。

海鳴市に向かう山越えルート。

成田空港からは明らかに遠回りになるコースで走ってきた二台の大型バイク。

一台は少し年代物と感じさせるアップハンドルのネイキッドタイプ。

もう一台は打って変わって車体が真っ赤に塗装され、ライトの前やシート後ろのテイルパーツに火花か星のマークを思わせる飾りが付いたド派手なマシンである。

その後ろから追いつがって来る二台のオフロードタイプのバイクが

あつた。

前走する二台もそうだがかなり非常識なスピードで峠道を突っ走る。

そしてさらに、後続の二台のバイクに搭乗しているものが奇怪な存在であつた。

言わば獣人。

方や猫科の猛獣ジャガーと人間の混ざつた姿をしており、もう片方はサイを思わせる鎧のような肌と角を持っていた。

これらを知っている……かつて闘つた者達ならばその名を挙げる事が出来るだろう。

暗黒結社「シヨツカー」の尖兵。

改造人間……怪人。

シヨツカーオートバイ部隊を率いて仮面ライダーと闘つた強者。

ジャーマンとサイギヤング。

その二体の怪人が追う先行するバイクの二人の男とは？

『いい加減、決着をつけるぞ。

おそらく光太郎がピンチのはずだ。

先を急ぐ必要がある。』

『了解だ。』

俺がしばらくとおせんぼしてるから、その隙に！！』

『よしっ！任せた！！』

同じ称号を持つ仲間の間で発生する思考通話能力を用いて作戦をたてた二人。

赤いマシンの男がスピードを緩め蛇行運転をして後続の足止めをしている隙に、先行したマシンの男がシートから腰をあげステップの上で仁王立ちとなる。

両の腕を指先まで伸ばし胸の前で左から右へと水平に移動させる。

「変ッ身！」

次いでその腕を頭上を廻して左へ移動。

「V！3ア！！」

左の拳を握りしめつつ左の腰へ、右腕は腰の捻りと共に肩を入れるようにさらに左へと伸ばされる。

腰に顕れた二つの風車…ダブルタイフーンを持つベルトが風車の回転と共に光を放ち、それがおさまったとき男…風見士郎は赤い仮面と緑の複眼を持つ異形の戦士、仮面ライダーV3へと変身を遂げていた。

同時にそのマシンも青と白と赤のトリコロールの戦闘マシン「ハリケーン」へと姿を変える。

アクセルターンで一気に逆走を開始、後続のバイクに突っ込んでいく。

怪人二体のバイクが煽られて、回避すると同時に速度を緩めた隙に真っ赤なマシンの男もアクセルを吹かし一気に距離を開ける。

彼もまた、マシンのステップに立ちその手を包んでいた黒いグローブをはずす。

その下から現れるのは、コイルを巻き付けたかのような機械の腕。

彼もまた指先まで伸ばした腕を水平に右に伸ばす。

「変身！」

頭上を通って両腕が左に回り水平に伸ばされた後

「ストロンガーッ！！」

掛け声と共に両の機械腕：コイルアームが二度三度と交差し火花を散らす。

腰に顕れた火花をモチーフとしたベルト「エレクトラー」が大電流を男：城茂の全身に流し爆発したかのような電光とオゾン臭の中から、額の赤い角と巨大な緑の複眼が目を引き黒い仮面と上半身のほとんどを包む赤いプロテクターを纏った異形：仮面ライダーストロンガーが現れた。

彼のマシン「カブトロ」は変身機構はないが、ストロンガーの変身と共に機能のリミッターが外されその能力がフルに発揮される。

前後に挟まれる形となった怪人達は互いの獲物を定めて一対一の闘いを挑むことにしたようだ。

ジャガーマンはV3へと、サイギヤングはストロンガーへとマシンを駆って襲いかかる。

途中でフロントタイヤを振りかざしウィリーで突っ込んでくる相手に、二人の仮面ライダーはマシンを降りて相手を見据える。

そう、二人は先を急ぐと言っていた。

つまり、一気に決着をつける必殺の一撃を持って方をつけるつもりなのだ。

V3とストロンガーの緑の複眼がその意思に呼応して輝きを強める。

次の瞬間二人は同時に地を蹴って宙に舞う。

空中で前方回転、V3はさらに錐揉み回転を加えストロンガーは全身から電流を迸らせ同時に急降下。

「V3！錐揉みキック！！」

「ストロンガー！電キック！！」

必殺の一撃が突っ込んでくるバイクごと標的を粉碎し路上に爆煙を撒き散らす。

何事も無かったかのように着地して己がマシンに歩み寄った二人は

無言で頷いて、再び峠道を走り始めた。

その後には、僅かに煙をはく小さな残骸のみが残されただけであった。

## 第11話 ファーストコンタクト（後書き）

今回はさらにウルスも戦線に加わり、怪人軍団対ライダーと管理局の大乱戦になる予定です。

読んでおられる方々にはお分かりでしょうが、拙作中の管理局はなのは引き立て役で終わらない様になっています。

なのは無双やライダー無双のみでは終わりません。

40代のオッサンの脇役鼻肩にお付き合いいただければ幸いです。

設定資料集？

クロノ・ハラオウン（14歳）

主人公その4

次空管理局のパトロール艦アースラ付きの執務官であり艦の最大戦力でもある少年魔導士。

堅物で融通の利かない性格をしており、気難しい。

と思われるように振る舞っており、その目的は将来の管理局の改革を見据えて今の内に様々な力を蓄えるため、余計な事に巻き込まれないように付き合いづらい人間を演じている。

つまり、うちのクロノは空気が読めないのではなくワザと読んでません。

ユーノと同じで頭が良すぎて余計な苦勞をしょいこむタイプ。

管理局の腐敗や自分の理想と現実の違いに気づいてしまったのもそのため。

個人的な悩みはその低い身長。

密かに同年輩の友人がいない事も悩んでいる。

（彼の精神年齢の高さと仕事の忙しさによる自由時間の無さによる無趣味ぶりが原因）

リンディ・ハラオウン（さんじ、うわっ何をする！？

やめてっ！待ってくれ！！）

クロノの母親でアースラの艦長＝提督。

ギル・グレアム提督の派閥の重鎮でもある。

無類の甘党でお茶に砂糖とミルクを入れて飲む料理人の天敵。

作者的にはこの味覚異常はグレアム提督の影響ではないかと思っている。

…イギリス人って熟れたメロンや桃にワザワザ蜂蜜をかけて食うそうですから。

根は良い人だが長い管理局のパワーゲームの経験から、他人を利用し使い潰すことも出来るようになっておりその点を息子からも警戒されている。

クロノの演技については見破っていると思われる。

普段は温厚だが必要ならば冷血な判断を下せるある意味理想の艦長。

## 第12話    スターライトブレイカー（前書き）

第12話更新です。

乱戦状態のRXと管理局対再生怪人軍団戦です。

## 第12話     スターライトブレイカー

「…どうしてこうなった…」

「いてえーっ！いてえーよー！！」

「おっ俺の腕があーっ！！」

「ヒイイッアー！？」

「ゆびっ！？ゆびがないーっ！？」

「ドオシテッ！？」

「ドオシテ、コオナツタアーッ！！」

### 第12話

スターライトブレイカー

阿鼻叫喚。

血の海が広がっていた。

再生怪人軍団と本局武装隊魔導士の闘いは、群れを成し襲いかかる怪人達に降り注ぐ魔力弾の連打から始まった。

ここで初手のミス。

非殺傷設定での攻撃を選んでしまったことと誘導弾を選択したこと。

非殺傷は命中時の衝撃と魔力を削り取る事による疲労が相手にダメージを与え気絶させる、所謂ノックアウトしてしまうのであるが改造人間には元々魔力を持つものはいないので魔力を削る意味はないしさらに強靱な装甲と文字どおり化け物じみた耐久力、さらには改造による痛覚遮断によりライフル弾程度の威力では何のダメージも与えることはできない。

そして誘導弾、これは速度の問題。

誘導弾は思考誘導により軌道をコントロールする、つまり術者の感覚や思考速度で追い付けるスピード以下でしかコントロール出来ない。

よほどの術者でなければ誘導弾のスピードは時速200kmまで行くことはない。

そして改造人間の知覚と反応速度は銃弾（拳銃弾で初速でマッハ3以上）に対処できる。

よほどの弾数か誘導弾のコンビネーションにより死角を突かねば命中はあり得ない。

非誘導弾を選択し速度を上げ弾数を増やした攻撃をすべきであった。

結果、魔力弾の弾幕があるものはぐりぬけまたあるものは委細かまわず弾き飛ばし魔導士に襲いかかる。

シールドが展開され一旦動きが止まるも、剛力を誇る怪人の拳がシールドを叩き割り刃を備えた者は両断しあるものは焼きつくし、ま

たあるものは砲弾で貫いた。

交差した瞬間には数名の魔導士が怪人の拳にとらえられ宙に舞い、刃にとらえられた者は手足を失い火炎に焼かれる者や砲弾や銃弾を受けるものが続出する。

バリアや防御フィールド、そしてバリアジャケットによって致命傷を避けたものもいるが殆どの者は一合で戦闘不能になった。

## 第二のミス。

地上戦を選択したこと。

武装隊員の全てとは言わないが飛行魔法を使える者が多く在籍している。

その者達を初手から飛ばして、上空からの砲撃魔法による空爆を仕掛けていれば怪人といえどもただではすんでいなかった。

もつとも、初手から殺傷魔法による弾幕に砲撃による空爆を必要な相手であると判断するだけの情報を手に入れていなかったのである。

これによって武装隊が弱い、ファルケの指揮能力への疑問などという事には繋がらない。

しかし状況は悪化していく。

ファルケの指示で結界内に転移してきた増援は攻勢に出る前に倒れた仲間を回収する事となる。

ファルケ三佐が指揮する武装隊は大隊であり、空陸曹が小隊長を勤め部下に空陸士を入れて4名からなる小隊これが4小隊集まって中隊長の空陸の三尉が一名はいつて中隊を作る。

さらに、4中隊が集まりそれに指揮小隊としてファルケ三佐と副隊長の一尉と護衛兼非常時に指揮代行を行う二尉が二名が存在する。

総員72名の大所帯であるが斥候任務の索敵小隊や医療任務の衛生小隊もいて、全てのメンバーが高い攻撃力を持つ訳ではない。

さらに前回の任務の帰りとすることもあり、負傷して闘えないものも存在している。

したがってファルケの部下全てがこの場にやって来たわけではない。

それでも、数十人が転移してきて負傷者を回収しシールドを無数に展開し白兵戦を仕掛け一旦怪人群を押し止める。

この際にファルケの指示が飛び、殺傷設定の魔法弾が非誘導の高速弾幕として怪人群に襲いかかる。

これで死ぬほど甘い相手ではないが装甲の薄い怪人、蜘蛛男やサラセニアン等の暗殺や諜報活動を目的とした怪人に出血や体の一部の欠損が見られた。

それらの者に対してバインドが飛び動きを止めたところに砲撃や魔力弾が降り注ぎ、殺しきれないまでも手足を引きちぎり胴を抉り行動不能にする。

ここまでやっても死なない怪人の生命力に感嘆すべきであろう。

それでも、取りあえずの時間ができた。

負傷者を一ヶ所に集め一気に転送しようとしたところで

「！？ファルケ三佐！転送できません！！」

「？なんだとっ！？」

「上空に展開している魔方陣らしきものが空間を歪めています。座標の特定が出来ません！」

見上げれば銀色の不気味な魔方陣が明滅回転を繰り返している。

「チクシヨウ！？」

ここには魔法は存在していないんじゃないのか！！調査部の連中、帰ったら力マ掘ってやるぞ！！」

口汚く罵るファルケ。

同時に生き残るための戦術を模索する。

壁が抜かれないうちに負傷者の応急手当を指示し治療術が使える者にはそちらを担当させ射撃魔法のための隊列を整え、飛行可能なものは上空からの爆撃を準備させる。

体勢が整ったところで壁役を下げて上空からの砲撃魔法による爆撃で薙ぎ払う、次いで射撃魔法の弾幕が襲いかかった。

怪人の群れが爆風に飲み込まれ、吹き上げる爆煙で視界を遮られたところで襲い来る弾幕、これならば回避することもまま成るまいと

ファルケはほくそ笑む。

視界が戻った時には狙い通りに、体に目立った欠損は無いまでもダメージのため倒れてもがく怪人の群れがみえた。

何体かの明らかに耐久力の高そうな怪人：ショッカー怪人でスノーマン、アルマジロング、デストロン怪人からナイファルマジロ、タイハウバツファロー、GOD怪人から鉄腕アトラス、ゲドンの獣人からカニ獣人、などが無傷で立っていたのが気になったが。

「よしっ！たたみかけろ！！」

好機と見たファルケの指示で再び襲いかかる爆撃。

しかしそれは命中する前に怪人群の前に出現した時空魔方陣の前に阻まれ周囲へと飛び散った。

一同が呆気にとられるなか、悪寒を感じたファルケの指示が飛ぶ。

「上だっ！シールド上方展開！！」

果たして上空の時空魔方陣から、無数の稲妻が魔導士一同めがけて撃ち込まれる。

バリアジャケットの許容量を越えた雷光に目を灼かれ一瞬動きを止めてしまう魔導士達の中、前もつての用心もあつてか対応できたものが二人いた。

自分の為すべき事はなのは達を最優先に守ることと定めていたユーノがなのは達をスフィアプロテクションという防御結界で包み込む。

本当ならばまとめて皆を庇いたいところだが、自分の魔力量はそんなに多くはない。

使える魔法の技量は高いが魔力量の関係から、強力なものほど維持時間は短くなりその範囲や展開数も少なくなる。

だから、今為すべきこと……出来ることを間違えてはならない。

『……ああ……僕は非力だ……』

心中で嘆息しながらユーノは雷撃から三人を守り続けた。

もう一人はリンディ提督であつた。

こちらは十を越えるシールドを展開し武装隊員の上に落ちる雷撃を防いでいた。

「みんな、もう少し頑張つて！

今アースラの仲間が状況を変えるために手を尽くしているから必ずチャンスが来るわ！

その時までの辛抱よ！……」

凜とした声で隊員達に檄を飛ばす。

「……YES、Mum……」

雷撃を凌いだ事もあつてかファルケ以下隊員達の士気も持ち直している。

しかし

『本当に頼むわよ？

エイミィ。』

内心の不安を出すことは指揮官には許されない。

余裕の表情を崩さぬように気を付けながら、リンディは敵将であるザッハークの方を見据えていた。

また、指揮官には優先順位の判断を強いられる事がある。

先ほどのシールドも張ったのは隊員達の上にだけ、ユーノ達には張っていない。

冷酷かもしれないが作戦目的のためには隊員の数を減らすわけにはいかないし、現地人の生命保護はさほど重要視されていない。

戦力外のお荷物にシールドを回して隊員を死なせるくらいなら初めから目一杯の数のシールドで隊員を守っておくべきとリンディは確信している。

無論、助ける余裕が有るならば助けるが今は違う。

任務を遂行し部下を無事に返すことが指揮官の役目なのだから。

デルザー魔人シャイターン・ザッハークは事の推移をほくそ笑みながら見ていた。

魔導士の力を試すためのに準備していた再生怪人達であるが、これ程早く使うことになるとは嬉しい……いや楽しい誤算であった。

ザッハークは単独で闘うよりも軍を展開したり、相手を策に掛けることを好む。

だから今回も索敵用に小型のセンサーメカを海鳴市に放つてもいいし、グローリアス号のセンサー類もフル稼働させていた。

そしてそれらがジュエルシード巡って争うのはとフェイトの放つ魔力の影響で発生する地磁気や重力の変化を捉え、そして現場に向かったセンサーマシンがなのは達を捕捉する。

人払いの結界では、生き物ではないセンサーマシンを避けることはできない。

また、このセンサーマシンの有効索敵距離の長さや施されている物理的なステルス機能から、R xのセンサーにかからなかったのも幸いしていた。

R xとクロノの会話を盗聴し、その後をつけて会談を行う結界の場所を特定。

しかるのちに時空魔方陣を使って結界内に侵入を果たした。

時空魔方陣と言うがその実態は完全なオーバーテクノロジーであり、次元世界の魔法とも共通点はないものであるが空間を操ることに關してはレスポンスが早い分こちらの方が上かもしれない。

特にザッハークは時空魔方陣を稼働させるシステムとの相性が良く、自在に操ることが出来るため攻撃に防御にと活用することが出来る。

先ほどの防御と雷撃もザッハークが自ら時空魔方陣を操ったものである。

―さて、次の手は如何に…

おもむろに戦場を見渡すザッハークの目に映る二つの黒い影。

放っておけばザッハークの思いどおりになりかねない戦場を何とか踏み止まらせているのは彼ら… R x とクロノの即席コンビである。

兵法において、

天の利、地の利、人の和

と言う。

順に、

戦う大義名分が有ること。

情報をつかんで有利な戦場を設定すること。

戦う兵士の士気が高くチームワークがとれていること、を指している。

しかしザッハークは、

地の利、人の和、時の運

と考えている。

元から侵略と闘争が目的の自分達に大義名分は関係ない、有利な戦場を設定することの方が重要である。

今回は時空魔方阵を使って相手の魔法による有利性を潰している事がこれに当たる。

兵士…怪人達は脳改造済みだ、士気もへったくれもない。

気を付けるのは、仲間の機嫌を損ねて足を引っ張られないかだ。

あとは戦いを開始する切っ掛け、これが時の運。

今戦えば勝てるという根拠である。

今回は時間であつた。

すでに日が暮れている。

そうRXのエネルギー源、太陽が姿を消しているのだ。

RXのエネルギーが回復できないとなれば、いくつもの戦術が考えられる。

RXがクロノを庇うのを見越した上で、当たれば儲けと仕掛けた手が図に当たった。

見事RXのサンバスクを捉えた牙に仕込んであつた毒は、体機能を狂わせる神経毒であつた。

単なる蛇の毒ならばRXの耐毒性により無効化されるし、より強力

な毒でもバイオリダーの免疫抗体能力で対応されてしまうだろう。最悪、それが引き金になってR xに新しい能力を目覚めさせる進化を促してしまうかもしれない。

だから今回準備した毒は、ナノマシンによる神経毒。

一定時間毎ナノマシンで組成の違う毒を作り出し無効化を防ぐ、さらにその目的はサンバスクの機能の阻害でありR xの生命を脅かすほどの毒性はなく生命の危機を引き金とした進化を促すものではない。

目的はサンバスクの機能を阻害しR xのハイブリットエネルギーを枯渇させること。

太陽エネルギーとキングストーンエネルギーの混合エネルギーがR xの各特殊能力の発動には必須であり、太陽が沈んだ今ではエネルギーの補給もままならない。

ましてや太陽エネルギーによる驚異的なダメージ回復能力など使用不可能。

ここまではザッハークの作戦が図に当たっていた。

しかしR xはザッハークの予想以上の奮戦を見せていた。

多段変身もリボルケインも使えないが、仮面ライダーBlackとしての闘いの経験から徒手空拳の闘いに怯むことはない。

しかしR×の生命の危機となるほどのものではないが毒の影響が身体の痺れや倦怠感があることからいつも以上の集中力を必要としており、さらに多数の怪人達と渡り合わねばならず動きを止める余裕も無いためキングストーンフラッシュの体内放射による毒の解除をすることも出来ない。

一歩間違うと自分の体内を破壊し尽くす技だけに集中出来ない状況では使用したくない。

シールドを碎かれて倒れ込む魔導士に止めを刺そうとするデストロン怪人ピッケルシャークを殴り倒して振り向き様の回し蹴りを背後から迫っていたゲルシヨツカー怪人ムカデタイガーに叩き込む。

そこで毒の影響が蹴りを振り切った後の軸足の締めが弱くふらついてしまい体勢の立て直しに僅かに時間がかかってしまった。

その隙を狙い横合いからシヨツカーのマグマ怪人ゴースターが突撃してくる。

必殺のタイミングにほくそえむゴースターの足元が爆発、挟まれた砂に足をとられて倒れ込んだところでその顔面をR×の足刀が捉えて蹴り飛ばす。

「すまん、助かった！」

叫ぶR×の視線の先には、2m程の高さで宙に浮かびその周囲に青い魔力光のナイフ状の魔力弾を無数に浮かべたクロノがいた。

「気を付けろ！こっちの方もあまり余裕はない！！」

魔力弾による攻撃が有効でないことに気づいたクロノは、飛行魔法で機動力を確保し身を守りつつ先ほどのようなR×のフォローやバインドによる怪人の行動阻害や連携の妨害に徹していた。

この二人がいることで負傷した魔導士が止めを刺される事が防がれ、奇跡的に管理局側に未だに死者は出ていない。

現在起動中の射撃魔法ステインガースナイプはスピードを上げたり着弾時に爆発させたりと利便性が高いものだ。

近接戦は捨てている。

クロノにはブレイクインパルスと言う物質の共鳴振動を利用して標的を破壊する近接戦用の魔法があるが、術式の構造上一瞬とはいえず相手に接触し破壊に必要な振動数を割り出さなければならない。

また、魔法は発動のための術式展開と実際の魔力の発動でたとえばそんなに高速処理に優れたデバイスを持つていようと必ず一度動きが止まる。

（蹴りが決まる瞬間に「ライダーキック」と叫ぶのではなく、「ライダーキック」と叫んでからジャンプするようなものだ）

対魔導士戦と言うことなら互いにその動きが止まるときを隙と見なしての読み合いとなるから個人の技量の問題となるが、対怪人戦となれば一方的なハンデとなり知覚と反射に優れる怪人相手の白兵戦は自殺行為と言える。

（これは、近接戦の手練れがシールドを破壊できる武器を持ったならば魔導士を非魔導士が倒しうると言うことも意味している。）

実際に怪人に一度その一瞬で首から上を持っていかれそうになった

ことから、クロノは怪人相手の格闘戦は選択肢にいけない事になっていた。

ちなみに、このような直接相手に物理的な効果を生じさせる魔法には「非殺傷設定」は存在しない。

白兵戦系非殺傷魔法と言うのは、術者の手足を魔力で覆ったの格闘戦（魔力で威力を上げたパンチに魔力製のクッショングローブを着けるようなもの）か、標的に命中したら崩壊する魔力刃を使うしかない。

元から武器の形をしたアームデバイスと言うものもあるが、ここでは割愛する。

「?!上からっ!避けろっ」

クロノの叫びの直後にR xが居た辺りに空から降り注ぐ砲撃魔法、反撃の態勢を整えたファルケ三佐の指示による空爆であり続けて高速の魔法弾幕が飛来する。

R xは既にその跳躍力を生かして一気に離脱している。

垂直に60 mを突破する跳躍力は水平方向に向ければ200 m近い距離を一気に踏破できる。

魔力攻撃の豪雨をR xは余裕をもって避けて後の展開を見据える。

クロノはそのまま上空へと待避、高みの見物を決め込むつもりだったが、

「うわっ？何だコイツッ!？」

ゲルショツカー怪人ガニコウモルの襲撃を受ける。

空中戦を得手とする上に、右腕の蟹挟み状の電磁カッターでの格闘戦を仕掛けてくる魔導士の天敵じみた存在である。

「チッ、相手してられるか。」

急降下ダイブで振り切ろうとするがガニコウモルも食い下がって来る。

が、そこにファルケ配下の砲撃の一発が飛来しガニコウモルを叩きクロノの追撃コースから逸らせる。

『すまん、助かった。』

念話を飛ばしてから改めて高度を下げて距離をとり、状況を確認する。

そもそもこの二人が何故遊撃的な動きをしているかと言うと、R x としては一合目で怪人に重傷を負わされた隊員達を守るために前に出てきたのであり本人としてはいつもの通りの行動である。

対してクロノは、ファルケ隊とのフォーメーション訓練の経験が無いため共同戦が難しいことと執務官権限による指揮権の混乱を起こさないために遊撃行動を取ることにした。

結果、防衛線を引き火力を集中させたファルケ隊とは分断される形となったが砲撃と続く弾幕による反撃がなされ流れが変わったと踏

んだクロノは事の推移を見据えることにした。

その目の前で第二の砲撃が放たれ虫の息の怪人達に止めを刺そうとしたが、怪人達の前に展開された時空魔方陣によってそれは防がれた。

続いて頭上の時空魔方陣より降り注ぐ雷撃にクロノの中に恐れが生じる。

「…これは…マズイぞ。」

雷撃を防ぐ魔導士達を見てザッハーは相手の能力を分析していく。

現状、時空魔方陣の干渉に対して対抗策が取れず逃走できてない。

雷撃に対して対応出来た者はごく少数、怪人に対しての攻撃力は合格点を出して良いだろう。

防御力についてはまあまあと言ったところか、怪人の攻撃力に対してある程度有効だが防御力を突破された後は生身の身体の耐久力しか無いのでは白兵戦に持ち込めば「カモ」に出来る。

特筆すべき点は単独による飛行能力だが、総合的には脅威度は低いと言える。

…戦力分析はこのくらいでよからう。

最初は分析が済み次第相手の指揮官以外を皆殺しにしてから人質に取って、母艦の降伏を命ずるつもりだったが…

「……ここで心をへし折るも善し哉。」

呟いてすいっと右手を高くあげる。

すると倒れ伏した怪人達の下に銀の光を放って時空魔方陣が現れ、砲撃魔法と魔力弾の嵐に撃ちのめされていた怪人達の様子が一変した。

ビデオ映像の逆回しのように傷がふさがり倒れもがいていた怪人達が立ち上がる。

時空魔方陣は対象にエネルギーを与えることでの回復だけでなく内部の時間流を加速しまるで再生するかのごとく回復させることが出来る。

故に“時空”魔方陣。

これを見た魔導士達に絶望の色が広がる。

無理もなかるう、ようやくの思いで動けなくした敵がまたピンピンして向かってくるのである。

もう一度あれをやるのか、いや、やれるのか？

そう思って当たり前である。

鍛え抜かれた武装隊員と言えども心が揺らぐ。

そして目の前で再び怪人達に隊員が血祭りにあげられれば、「諦め」

と言う毒が魔導士達の心を蝕んでいくのを止めることは出来ない。

抗うことを諦めた敵はもはや「獲物」でしかない。

これがザッハークにとっての「心を折る」と言うこと。

もう間もなく魔導士達の抵抗も絶えるであろう。

しかし…

「…さすがと言うべきか。いや、仮面ライダーを名乗る以上至極当然と言うことか…」

呟きの先には、魔導士達の前に立ち襲い来る怪人達を押し留めるR×の姿があつた。

即席とはいえクロノのサポートが功をそうし、息つく間もない戦闘に陥ってなし崩しに袋叩きになることを防いでいたためである。

サンバスクの機能停止からハイブリッドエネルギーが使えずキングストーンエネルギーのみではR×はリボルケインをはじめ各必殺技を使えないが、純粋な格闘技による攻撃もかなりな威力を持っている。

襲い来る怪人を殴り倒し蹴り倒し、投げ飛ばして数体を纏めてなぎ倒し固まったところで跳躍からの急降下キックを繰り返す。

「ライダーツキーーック!!」

Black時代のキングストーンエネルギーを纏った技ではなく、

先輩ライダーから伝授された脚力と跳躍力をフルに使った技だ。

折り重なっていた三体の怪人、エイキングとハサミジャガーにクモ獣人をまとめて蹴り碎き爆発四散させその爆煙の中から飛び出したR×は、次の標的へと向かいながら倒した怪人の残骸が再生しないことを確認し時空魔方陣の限界に目星をつける。

『ダメージを回復できても死者の蘇生までは出来ない。』

ならば、全てを倒しきるまで！！

十全とは言いがたい身体でヘビ獣人の巨体に頭上から拳を叩きつけながらR×は闘志を奮い起たせる。

それを追いながら周囲にバインドを放ち怪人の追撃と連携を崩すクロノはR×の闘いぶりに脅威を感じていた。

『毒を食らってたんじゃないのか？  
アイツどういう体力してるんだ！？』

打ち込まれた毒の影響が徐々に黒く染まっていくサンバスクを思い出しつつ、チラリと頭上の時空魔方陣を見上げて

「こっちの体力が持たん。エイミイ早くしてくれ！」

そう呟くクロノだった。

「…ふむ…そろそろ対処をすべきか…」

「後ハ我ニ任セテイダコウカ。」

思案顔のザッハークの横に時空魔方陣の輝きが疾り、そこから灰銀の毛並みの熊の怪人：ウルス・ザ・ウォーロードが現れる。

その左腕はR×戦で失われ今は鋭利な装甲で覆われた義手を取り付けている。

「ウルス卿、よろしいのか？」

手負いを仕留めるは流儀に叶わぬかと。」

「雑兵ノ手ニ掛カルノモ忍ビ無イ、ナラバイツソヒトオモイニト思ツタマデノコト。」

明らかに据わった目線でR×を睨むウルスに、ため息についてザッハークが言う。

「好きに為さるが良からう、こちらとしては好都合なれば。」

「…フン…」

さして気にしてもいないかのようにR×へと歩を進めるウルス。

義手を軽く振るうと、外腕部に取り付けられていた刃が前に振りだされグリップを掴んだ左手に固定される。

次いで右手に時空魔方陣から取り出した小型の盾を構えたウルスは、眼前で怪人との乱戦を繰り広げるR×へと踊りかかった。

突進してくる新手の怪人に気づいたクロノはその足元を狙いステインガースナイプを放つ。

移動を先読みしての予測射撃であり、これをフェイクとして足元に注意を引き付けてからのバインドが本命であった。

今まで何回もR×の危機を食い止めてきたコンビネーションであったが

「なにいつ!？」

それを読んでいたウルスはクロノの予測コースを高く跳躍して回避、刃のグリップを離すと義手の掌に仕込まれた熱線砲をクロノに連射する。

「邪魔ダツ！」

魔力弾と違い肉眼で視認できない速度の熱線をクロノは回避できず、辛うじてあらかじめ張り巡らしていたシールドで斜めに弾いて何とか防ぐ。

それでもシールドは焼き払われ、熱線の余波がバリアジャケットを叩きクロノは弾かれたように空中を後退させられR×のフォローを出来ない距離まで引き離される。

クロノの視線の先では左腕の刃を振るうウルスと素手で殴り合うR×の姿があった。

エイミィはアースラのブリッジで連絡のつかなくなった結界内の解

析の結果に涙目になっていた。

結界内に現れたエネルギー反応により内部の情報が伝わって来なくなっただのである。

今までの経験と常識から、

「魔法を凌駕するほどの現象を引き起こす科学技術」

と考えつかなかった為今の現象を未知の魔法技術と思い解析を続けていた。

次元世界において純粋科学技術はさほど発展していない。

（例えば電子部品で千分の１ミリ単位の精度での加工が必要な物があれば、地球でならそのレベルの加工が出来る工作機械が製造出来る技術の蓄積がある。

次元世界では同じ加工が出来る魔法の術式がありそれを実行できる製造用デバイスと稼働させるための魔力炉と言う「馬鹿デカク」て「効率の悪い」「人造のリンカーコアモドキ」が存在する。）

同じ現象を起こすなら科学技術よりも魔法の方が手っ取り早いからである。

現象に至るまで、科学ではエネルギーを使いいくつかの工程「機械を動かすこと」を経る事が必要であるが、魔法ならばエネルギー「魔力にプログラムを与えることで直接現象を起こすことが出来る。

現在までに魔力による重大な汚染現象が確認されていないこともあ

つて魔法技術の研究は科学よりも優先され、質量兵器がらみの問題もあつて科学を忌避する傾向も強い。

また、次元空間への転移や今問題になっている隔離空間を作る結果魔法の存在など空間制御技術は、「今のところ」管理局の知る管理・管理外各世界には「魔法」に依るものしか存在しない。

それらの先入観から、エイミィは懸命にそして真摯に無駄な努力を重ね時間を浪費し続けていた。

「クロノくん…リンディ提督…待っててね。  
すぐに助けてあげるから。」

ユーノは状況の悪化に頭を抱えていた。

以前遭遇した怪人の参戦によりR×がその相手に掛かり切りとなりフォローが出来なくなつたため、他の怪人に深手を負わされる武装隊員達が一気に増えていたのだ。

早く転移して脱出すべきなのだが上空の謎の魔方陣がそれを妨げているらしい。

解析や魔方陣への攻撃も行われているようだが恐らく無駄だろうとユーノは考えている。

あれは恐らくオーバーテクノロジーの産物、魔法では解析出来ないだろうし破壊するには生半可な攻撃では破壊できまい。

あるいはR×の光の剣ならばとも思うが現状それは無理である。

このままでは最悪の事態に…

そう考えてスフィアプロテクションの中で抱き合って震えるのは達を見る。

三人には目を閉じて周りを見ないように言っている。

次元世界であろうが管理外世界であろうが関係なく、年端のいかないう子供に耐えられる光景ではないからだ。

ユーノとて見たくはないし馴れているわけではないが、しかしそれでもなのは達よりも荒事なれしているのは事実。

幼いなりに責任を感じていたし男の意地もある。

何としてもこの三人だけは逃がさなくては。

とは言え、下手に動くと怪人の餌食になるか魔力弾の流れ弾を食らうことになる。

現在の位置は最前線の右端、戦闘を避けて移動と言いか逃げ隠れしていたらここに来ていたのである。

おそらく一番安全と言いか一番防御が固いであろうリンディの所まで50～60m、そこまで行くのか踏ん切りがつかないところである。

下手に動いて怪人の目につくのも怖いし、指揮官であるリンディを狙ってデカイ攻撃が来るかもしれない。

結局ユーノは防御を固めるだけで動くことは選べなかった。

弾幕が飛び交い炸裂音が響く中でユーノは心を落ち着かせるべく深呼吸。

再度状況と手持ちのカードを考察する。

使える魔法。

周囲の状況。

何を優先し何が捨てられるのか。

何が起こりうる事なのか。

そしてユーノは一つの決断をする。

『なのは…なのは。』

念話で語りかける。

『そのまま聞いて。』

「何？ユーノくん…」

目を瞑ったままなのはが声に出して答える。

念話を使うことを忘れるほどに恐怖しているのかもしれない。

『このままだとかなり危険なんだ。  
怪人相手に管理局は苦戦しているし、R×もこの前の敵が出てきて  
そっちに掛かりきりになっている。  
逃げ出そうにも怪人達が操っている魔方陣モドキのせいかな転移魔法  
が使えない。』

「ふえ…それってもうダメってこと？」

なのはの表情が歪む。

何やら不穏なことを話しているのか察したアリサとすずかも声をあげるが、その声もどこか弱々しい。

「…ユーノ、二人だけで相談しないでよ。」

「…私達に何か出来るとも思わないけどお話は聞かせてください。」

「…うん、ごめんね。」

念話をやめて直接話し始めるユーノ。

「このままだとダメなのは皆わかっていと思う。

だから僕は…生き残る為に出来ることを考えてみたけど、そのため  
にはなのはの力が必要なんだ。

情けないけど僕だけじゃ皆を助けられないから…

怖いものを見ることになるけど協力…ううん、僕を助けてほしいんだ。」

「……………」

「勝手な話だし、情けない話しだと思う。  
巻き込んで助けてもらってさらに、僕には無理だからまた助けにく  
れって…」

「…ユーノくん…」

淡々しかし迷いなくユーノは語る。

安いプライドなどそこには残っていない。

今なすべきはなのは達を生き残らせること。

侮蔑も軽蔑も甘んじて受け入れる。

「…お願い出来るかな？」

「…ユーノくん…」

「…うん…」

叱責だろうか、罵倒だろうか？

何と言われてもやってもらわねばと思うユーノになのはが言った言  
葉は

「教えて、何をすれば良いのか。」

「…なのは…ありがとう…」

感極まって泣きそうになるユーノに次いでかけられた言葉は

「だってユーノくんはフェレットさんだから私が護ってあげないと。」

「…へ？」

「…そうね…ペットの願いを聞いてあげるのも飼い主の役目よね。」

「あら、それなら躑をするのも役目ですね。」

アリサとすずかも続ける。

いつの間にか三人とも目を開けてユーノを見ていた。

「…えー、僕フェレットのままなの？  
ナニソレヒドイ。」

先程とは違う意味で涙目になるユーノ。

それを見てクスクスと笑うのは達。

気にするなと言われているのだ、と気づいてユーノもクスクスと笑う。

本当にいい人達と出会えたと思う。

こんな状況でこちらを気遣ってくれるなんて。

絶対に無事に家族の元に返さなくてはいけない。

「ありがとう、みんな。  
じゃあやることを話すね。」

「ちょっとまった。」

「何？アリサ。」

「こう言うときは景気付けに『それではミッション内容を説明する。』  
』とか言うものよ！」

「…？…」

「アリサちゃん、ユーノくんに地球のTVネタを望むのは無理ですよ…」

「チッ、そうだったわね。」

「…？…えっと、続けて言いかな。」

「にははは…」

こうして生き残る…否、無事に帰るための作戦が示されそれは念話でリンディの元へも伝えられる。

その内容に少々驚かされるも、失敗してもこちらに害はない事と管理局側の手を煩わされない事からリンディは許可を与えた。

「…子供を使って生き残る算段か…  
私…最低ね。」

「何か仰いましたか、提督？」

思わず漏れた呟きに、横で戦線の指揮を執っているファルケが尋ねてくる。

「…ファルケ三佐、この後チャンスが出来るやもしれません。

その時は隊員を私の周囲に、一気にアースラまで私が転移させます。

」

「それは？…了解です。」

リンディの厳しい表情に疑問を納め全線の隊員達に自分の指示が出たら撤退を開始する旨を伝え、撤退支援の要員を指示さらに指揮小队も撤退支援に出ることを伝え指揮権をリンディに預ける。

そして自分の改造ストレージデバイス「ガンポッド」を構えて小队メンバーと共に飛行魔法を起動させる。

ファルケの戦闘スタイルは高機動射撃戦型、トップスピードは飛び抜けてはいないが最高速度付近を長時間維持出来て蜂や蜻蛉のようなホバリングや急加速、鋭角な軌道変更で相手を翻弄し高速多数の魔力弾で削り倒すのが本分である。

高威力の砲撃は苦手で、「ガンポッド」も射撃能力を追求しアサルトライフルじみた形状になっている。

佐官ともなれば部隊の指揮や運営を受け持つこととなり、ここの直前のような大掛かりな作戦行動でもファルケが前戦に出ることはない。

久しぶりの実戦参加に奮い起つと同時に、生きて帰っても降格は間違い無かるうと確信している。

地球の軍隊：戦争において部隊の二割の隊員が戦闘不能（たとえ死んでいなくても）で「壊滅」と称し、三割が戦闘不能で「全滅」と言われる。

そこまでの被害と損失で、部隊の士気は崩壊し負傷者の回収や運送に回す兵士で戦線が維持できなくなり、抜けた兵士の代わりの役目をこなせる能力を持った者がいるかどうかも判らないので組織的戦闘が出来なくなるからである。

この辺りは管理局も同様で既に武装隊員は壊滅状態を越えようとしている。

部隊を壊滅させるような指揮官を待っているのは、査問会と言う名の吊し上げである。

上は自分の管理責任を追求されないために査問の対象を蜥蜴の尻尾の様に切り捨てる。

ファルケは特に後ろ楯を持っている訳ではなく、こう言うときに庇ってもらえる宛もない。

まあそれでも、査問会で命を取られるわけでもない。

まずは生き残ってからの話である。

「いくぞ、化け物ども！」

寧猛な笑いと共にファルケは魔力弾を放った。

「…集え…集え…星の光。全てを貫く…ひかりと……………ちがう…  
…みんなを助ける……………みんなに…とどく…手になって。」

心に浮かぶ言葉を呪文の詠唱として呟いていくのは。

その手には、先端に黄金の音叉を思わせるパーツを装備した砲撃形態のレイジングハートが構えられている。

黄金の音叉の先には巨大な桜色の魔力塊が存在し、さらに大きく膨らんでいつているようにも見える。

そのなのはを支えるようにアリサとすずかなのはの後ろに立ち肩に手を置いている。

見ようによつては戦隊ヒーローの必殺技の発射体勢である。

今なのはは魔力収束と言う特殊なスキルを使用し、周囲に存在する余剰魔力…戦闘で放出されてエネルギーとして使用しきれずに周囲に漂っていた魔力をかき集めてあの魔力塊へと送っていた。

元々収束魔法と言うものはリンカーコアの力が弱く強力な攻撃が出来ない者がそれを補う為に編み出されたもので、強力な攻撃が出来る代わりに魔力を集めるのに時間がかかるなどで使い処が難しいモノである。

この時なのはは魔力収束の為に身動きが取れない、そのままでは怪人の餌食となってしまうところだが彼女の周囲はユーノが警戒し何時でもシールドやバインドの準備が出来ている。

ちなみに、防御結界を張っていると魔力収束は出来ないため、収束魔法使用中は無防備になりやすいのがこの魔法がマイナーな元因である。

50人近い魔導士が闘って周囲にぶちまけられた魔力は膨大な量であり、それを集めているなのは元には魔導士が見れば青くなるような魔力が集いさらに集まり続けている。

ちなみに、魔力収束を教えたのはユーノであり彼も今収束を行っている。

なのはは集中しないと行えないがユーノはマルチタスクを使い、周囲の警戒と何時でも展開できる様に待機させているシールドやバインドの術式と並列で行っている。

実はこちらもしっかりしていることを説明されたら聞いた魔導士が青くなるレベルの事である。

やがてなのはがコントロールできる限界まで集まった魔力に怪人達も何事かと目を向けてくるものが出てきた。

「…そろそろかなのは！お願い！！」

「うん、おっきいのいきます。」

返事と共に上空の時空魔方陣にレイジングハートとその先端の魔力塊を向ける。

「レイジングハート！  
いくよっ！！」

「YES、Master。  
Shoot、It！！」

「スターライト！ブレイカー！！」

次の瞬間、桜色の光の濁流が地上から天へと走り銀色の魔方陣に直撃する。

時間にして数秒。

時空魔方陣は桜色の濁流を弾き飛ばしていたが、僅かの時間でそれに屈し貫かれ消滅した。

「やったよ！ユーノくん！」

「みんな、急いで走って！！」

喜ぶ暇もなくユーノの指差す先、転送準備の魔法陣を展開できているリンディの元へと走り出す。

「なのは！もうひとふんばりよっ！！」

アリサがなのはの手を引き

「さあっ！頑張ってください。」

すずかが後ろから押す。

膨大な魔力のコントロールになのはがヘトヘトになって飛翔魔法も使えなくなってしまうことを見越してのユーノの指示であった。

それでも、まだ遠い。

もっと早く走らなきゃと思ったとき。

三人の体がフワリと宙に舞い、軽快にスピードを上げる。

ユーノの魔法と気づいて、礼を言おうと振り返ったところにユーノはいなかった。

いまだ先ほどのスタート地点。

無数のシールドを展開し、怪人達の進撃を防いでいる。

先ほど収束しておいた魔力を使い、割られた端から再生させてゆき食い止めているのだ。

「ユーノ！？何してるの？早くきなさい！」

「…うそ、なんで？」

「…！」

アリサが叫び、なのはが呆然と呟き、すずかが息を飲む。

これがユーノが切り捨てたもの。

自分の命。

強力な砲撃に気づけば、捕獲するにしろ殺すにしろ追っ手がかかる  
と予想ししんがりが必要と判断したのだ。

そして、しんがりの生還率が低いことも覚悟の上でそこに居るのだ。

やがてユーノの魔力が尽き、シールドが修復できなくなった。

振り返って移動していくのは達に柔らかい微笑みを見せる。

その時なのは達にはユーノの唇がこう言って居たように見えた。

「…バイバイ…」

次の瞬間、背後からやって来た怪人のカギヅメに殴り飛ばされユー  
ノは宙を舞う。

鮮血の花を宙に咲かせて。

ユーノが砂浜に倒れ込む姿を見た直後視界が光につつまれ、気づく  
とアースラの転移ゲートになのは達は立っていた。

## 第12話      スターライトブレイカー（後書き）

今回は決着編となり、ほぼ全編バトルの予定です。

先輩ライダーも参戦しザッハーくも本気で戦います。

設定資料？

エイミー・リミエッタ（16歳）

クロノの執務官補佐兼アースラの分析オペレーター。明るいまーど  
メーカーで、年下の上司であるクロノを「クロノくん」と呼び弟分  
扱いしている。  
アナライザー  
優秀な分析官であるのだが今回の事件では勝手が違い色々と苦労す  
ることとなる。

エルロイ・ファルケ（33歳）

三等空佐、武装隊大隊長。オリキャラで、不足しがちなオッサン成  
分の補給と良くも悪くも大人の軍人を描くためにだしたキャラ。  
正しいけど耳に痛いことを言うキャラになれば成功だと思っている。  
モチーフは「マクロスのフォッカー少佐」。

### 第13話 鏖戦（前書き）

三つ巴の闘いの決着篇です。

少し短めです。

それではどうぞ。

## 第13話 鏖戦

「止血処置！急いで！！」

「脈拍低下？カンフル剤！！」

「チアノーゼ症状です。

輸血急いで！」

「…ユーノくん…いない…」

「バイタル低下！心停止！！電気ショック急げ！」

「…ユーノくん…どこ？」

「麻酔！急げ！ショック症状出てるぞ！！」

「…ユーノくんがいないよ…」

「そこのガキ共！邪魔だ！鎮静剤射って隅に転がしとけ！！」

## 第13話 鏖戦

「結界内情報の確認、どうなってますか！？」

アースラブリッジに駆け込んだリンディが怒声を上げる。

「リンディ提督！」

喜びの声を上げるエイミィに

「エイミィ！状況は！！」

叱責するようなリンディの声に

「は、はいっ！」

サーチャー、映像回復しています。

モニターに映像出ます。」

空間投影型の大型モニターが展開され、結界内の映像が映し出される。

その映像の中には、満身創痍と言ってもいいR xがウルスと闘う姿があった。

その周囲には取り囲むような怪人達の姿がありさながらリンチのための怪人リングと言った感がある。

ウルスの左腕の刃のリーチが邪魔をして懐に入り込めないR xが、ウルスが刃を振り切った隙について右に回り込んで攻撃を繰り出すもウルスは右腕の小盾：バックラーを巧みに使いそれを防ぎ反撃を加えている。

ならばとR xが振るわれた刃を前に踏み込んで負傷覚悟で受け止め、回し蹴りを叩き込み、しかし次の瞬間にはウルスも右の拳をR xの顔面に突き立てる。

ウルスは武芸百般の達人であるが、本分は前回の闘いで見せた二刀流らしく今回の武装では以前ほどの鉄壁さは無いようだがR xも決め手に欠けており、武器の有無からギリギリと追い詰められていた。だがそれでもR xの動きに精彩が欠けている。

その理由はユーノである。

R xの桁外れの視覚は、怪人に殴られて宙を飛ぶユーノを捉えていた。

即座に助けに行きたいのだが周囲の怪人達とウルスが邪魔をしてそうもいかない。

「アア、マツタク不本意ダ…我ガ片腕ヲ奪ツタ強者ガ、些末ナコトニ氣ヲ取ラレテ万全デナイチカラヲ更ニ發揮デキナイトハ。」

嘆かわしいとばかりに嘆息するウルスの呟きも、R xの神経を逆撫でし攻撃の緻密さを削って行く。

同時に、先輩ライダーと比べて攻撃手段の幅の狭さを痛感し自己嫌悪の念もを湧き出してくる。

ハイブリットエネルギーを封じられた途端に狭められた戦術、仮に此处にいたのが1号ライダーなら徒手空拳の格闘だけで敵を圧倒していたのではないかと不毛なことが頭をよぎる。

精神の負のスパイラルに陥ったR xをウルスはつまらないモノを見るように

「モウイイ…死ネ。」

と呟いて、その右胸を左腕の刃で貫いた。

「……ガフッ……」

R×の仮面の口元…銀のパーツの内側から血があふれる。

遠のく意識を必死につなぎ止め、R×はライドロン召喚の意志を飛ばす。

今までも何度か試したが反応が無かった。

怪魔界からの召喚にすら応えたライドロンが反応しない。

これは現在R×達に取り込まれている結界が原因である。

封時結界…設定した範囲の出入りを制限する封鎖結界と異なり、設定された範囲内の情報に基づいた仮想空間を異空間内に構築しその中において戦闘行為を行い、現実の空間に被害を出さないためのものである。

当然出入りは設定した者に決定権があり、いくつかの例外を除いて一旦捕えられたら外部と切り離される。

無論、電波だろうが思念波だろうが外部に漏れる事はない。

ちなみに、結界内の風景建築物は魔力でエミュレートしたもので現実の物より脆くなっている。

何故このような物を造るかと言えば、空間に上下の区別がつかない

と空を飛べる魔導士と言えど空間失調を起こして行動できなくなり、飛行出来ない魔導士は歩くことすら出来なくなるからである。

さて、先ほど述べた例外であるが一つは時空魔方陣のように莫大なエネルギーで干渉するもの。

もう一つは結界破りの特性を持たせた魔法をぶつけると言うモノである。

先ほどのなのは砲撃はその両者の特性を持っていた。

…結界破りについては偶然ついた特性であるが…

したがって、時空魔方陣を破壊した後封時結界の上限部に到達した『スターライトブレイカー』は大幅に威力を落としてつつも結界の壁を突き破り、現実世界へとその輝きを一瞬だけ現していた。

RXが刺された瞬間を見ていたリンディは、一瞬

『封時結界の展開をキャンセルしまとめて異空間に放逐する。』

のも手かと考えたが、時空魔法陣を使われたらあっさり逃げられてしまいそうな気がしたのでこの考えを放棄した。

虚空から一瞬だけ天に疾った桜色の閃光に、ライドロンとアクロバッターは異変を察知する。

自意識を持つ2体のマシンは主の危機には召喚の意志を受けずとも

行動を開始する時がある。

まずライドロンが結界をサーチ、空間の特性を把握し内蔵する『次空移動システム』を起動させる。

このシステムは空間の不安定な部分を見つけてそこから異空間に侵入し次空移動を行うモノであり、その場で空間をこじ開けるモノではない。

そのため、今回も結界内に侵入するには多少の移動と時間が必要であつた。

海岸に移動し突入地点を特定し、突入に必要な速度を得るための距離をとる。

その後ろにアクロバッターが並び突入体勢に入る。

同時に「援軍」がやって来たことに気づいた2体は突入のタイミングを計り…

2体のマシンがホイールスピンドで砂を蹴たててダッシュした。

アースラブリッジに帰還したクロノが見たのは、空間モニターに映る血だるまで砂浜に膝をつくR×の映像であつた。

「クロノくん？無事だったんだね！」

振り返って喜びの声をあげるエイミィに

「手が止まっている。」

と釘を刺してから

「R xに助けられた。」

彼がしんがりについていたから、転移ゲートにたどり着けた……」

苦い顔で語るクロノはモニターの映像にさらに顔をしかめる。

絶体絶命のR x、しかしこちらに救援を送る余裕はないしまったその法的な根拠が管理局法的に存在しない。

現状、R xとデルザー軍団の闘いは『現地勢力の抗争』であり管理局が介入するための根拠がない。

クロノとしては心情的にはR xに救援を出したいと思っている。

確かに改造人間であるR xに対しての嫌悪感はあるが、わずかな時間とはいえ肩を並べて闘った相手の生死に無関心ではられない。

しかし、現状の戦力では敵に抗し得ないだろうしR xに与する法的な根拠が無い以上打つ手が無い。

『何か、何か手はないのか?』

焦るクロノは

「あつ!?!」

「どうしたっ!?!」

エイミイの声に強く反応してしまう。

「封時結界に向かって移動する物体がレーダーにあります。地上を移動、時速300km以上でその数4!」

「正体は何だ!? 映像は!?!」

「モニター映像出ます!」

モニターに現れた映像は、赤い異形の車と無人で走るバイクと異形が駆る2台のバイクであった。

「...? ...何か?」

空間が揺れたような気がしてザッハークは視線を巡らした。

視線が止まった先で空間が歪み何かが結界内に侵入しようとしている。

「...ふん...此方の手番は終わりと言うことが...」

やって来るものの正体が判っているような口振りのザッハークの視線の先では、水面に落とした小石が起こすさざなみにも似た空間の歪みの中から赤い異形の車が姿を現した。

結界を突き破り侵入したライドロンに続き、その特徴のある姿を隠

すための擬装を排除して本来の姿に戻ったアクロバッター、次いで仮面ライダーストロンガーが駆るカブトローに仮面ライダーV3が駆るハリケーンが結界内に飛び込んでくる。

ライドロンとアクロバッターがRxの周囲の再生怪人を追い散らしV3とストロンガーがマシンごとRxとウルスとザッハークの間割り込んだ。

「…どうした？Rx。」

えらくやられちまつてるじゃないか？」

「…先輩…」

声をかけるストロンガーにRxはよろよろと立ち上がり

「…毒をくらって、機能不全が起きてます…毒ごと焼ききって欲しいんですが…」

Rxが指さすサンバスクのどす黒く変色した部分を見て現状を理解したストロンガーは

「無理すんな、俺らに任して休んでおけ…」

「休めない理由があるんで…でも闘いは任せてしまいますが…」

「なるほど、闘いの他にやることがあると…いいだろう、気合い入れるよ！」

サンバスクの傷口を鷲掴みにして電撃を流し込む。

「フツ！クアアツ！」

R×の耐電能力の限界ギリギリの高圧電流に毒の浸食に劣化していた細胞は焼ききられ、毒とそれを精製していたナノマシンは消滅していく。

苦鳴を漏らしながらも耐えた時間はほんの数秒。

肉の焼ける臭いと煙の中から、赤い複眼を光らせてR×が立ち上がる。

ふらついた脚に力が戻り拳に力を込めて体の動きを確かめる。

目線があつたストロンガーと頷きあつた後、R×は視線を巡らせ倒れ付したユーノをとらえ

「後を頼みます…」

「おう、任しとけ。」

「急ぐんだろう？早く行け！」

短い応対の後

「アクロバッター！」

マシンに跨がり行く手を遮る怪人達を蹴散らしながらその場を後にした。

そして、V3とストロンガーも間髪入れずマシンに跨がりアクセル

ターン。

群がる怪人達を蹴散らしつつR xの後ろを護るようにマシンを駆る。ユーノの元にたどり着いたR xは、アクロバッターとライドロンに周囲の警戒をさせつつ倒れたユーノの容態をマクロアイの透視能力と本郷と結城に叩き込まれた医学知識を総動員してチェックして行く。

「まだ息はあるが…頸椎と脊椎、肋骨の骨折。肝臓と右の腎臓が破損。

腸管の破裂で腹腔内に大量の出血。外科手術では間に合わない!？」

最悪に近い状態に目の前が暗くなるR x。

——またなのか？

——また、死なせてしまうのか？

——俺は…護ることが出来ないのか!？

「……そんなこと…そんなことは!認めない!!」

叫びとともに機能を回復したサンバスクから残されたハイブリットエネルギーが全身に駆け巡り、その構造を書き換えていく。

R xの黒い身体が光を発し、青と灰銀の軽装甲に身を包むバイオリダーへと姿を変える。

さらにゲル化しユーノの身体を包み込む。

傷口から体内に侵入し、肉体の損傷部分をゲル化した組織で塞ぎ出血を止める。

この状態のバイオリダーは全ての組織が脳であり感覚器であり筋肉であり、そして「キングストーン」でもある。

故に、傷口を見ながらそこに付いた汚れを排出し洗浄と同時に体内の溜まった血液を排出と精密医療器具のような動きを行うことが出来る。

さらなる出血を止めるために、傷口の細胞からユーノのマトリクスを読み取り次いでハイブリットエネルギーを使って自身の細胞を増殖させそれにユーノのマトリクスをコピーして傷口を修復していく。

内臓を修復し次いで頸椎内の神経組織、さらに脊椎内の骨髄を修復し最後に骨をつなぎ直した。

ここで心臓が停止しかけたのでゲル化した組織で心臓を驚掴みにして心臓マッサージをする。

——死ぬな！

——帰ってこい！

——頼む！死なないでくれ！！

ユーノはゆつくりと暗い水底に沈んで行くところだった。

自分の意識が少しずつ曖昧になり何も考えられなくなっていく。

そしてそれが眠りにつくかのように心地よい。両親の顔を知らないユーノには死の旅立ちに迎えにくる者も無く、安息に満ちた死にユーノは心を委ねていた。

しかし、ある深さまで来たところでそこから身体も意識も動かなくなつた。

何かがユーノの身体と意識を掴まえてそこに留めているのだ。

——もう休ませてよ…

そう呟くユーノに「何か」は熱を叩きつける。

——死ぬな！

——生きろ！

と。

——泣いているの？

自分に届けられる声に、ユーノはそんな疑問を持った。

——まいったな…判つたから泣かないでよ…

苦笑と共にユーノは届けられた熱を受け入れた。

そしてユーノの意識は暗い水底から光の射す方へと浮かび上がっていった。

二人の仮面ライダーはゲル化してユーノを包み込んでいるR×に怪人達を近づけぬように、マシンで海岸沿いの道路際に追いたてる。

海岸と道路をそここの落差を以て隔てるコンクリートの壁に追いついて、その勢いのままに2体のマシンが怪人達の頭上を飛び越える。

道路までそのままの勢いで達しサスペンションを軋ませながら着地。

マシンから降りた2人は道路路肩のコンクリートブロックの上に立ち眼下の怪人達を見下ろす。

すかさず跳び上がって来た蜘蛛男を殴り付けて下に叩き落とし、ストロンガーが声をあげる。

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ…悪を倒せと俺を呼ぶ！」

左の拳を握りつつ、右手の指を2本立てて天を指す。

「聞けっ！悪人どもっ！！俺は正義の戦士、仮面ライダーストロンガー！！」

名乗りと共に電撃が迸り眼下の怪人達を打ちのめす。

すかさずそこに飛び蹴りを打ち込みサラセニアンを弾き跳ばしたV3は、足を開いて腰を落とし両腕を開いて上下斜めに傾ける独特の構えで怪人達と対峙する。

「仮面ライダーV3アッ！」

名乗りと共にベルトのダブルタイフーンが唸りをあげて回転する。

雄叫びをあげて殺到する怪人達を二人の仮面ライダーが迎え撃った。

「…何よこれ…」

モニターに映る映像にリンディは驚愕と恐怖の混じった声をあげる。

モニターの中の映像ではV3とストロンガーの二人が次々と怪人達を打ちのめす様が映されていた。

倍以上の人数の武装隊を壊滅させた怪物の群れをたった二人の異形が蹴散らしていく。

赤い仮面に緑の複眼と仮面の顎から頭頂に配されたドクロを彷彿とさせる白いパーツが印象的な、緑の身体の異形。

仮面ライダーV3と名乗る異形が洗練された動きで怪人達を仕留めていく。

上半身のほとんどを覆う赤いプロテクターの中央に浮かぶ「S」の

マーク。

巨大な緑の複眼と額に取り付けられた赤いY字型の角が目を引く黒い仮面。

見るからにパワフルなもう一人の異形、仮面ライダーストロンガーが印象どりの剛力で怪人達を打ちのめしその身体から発する電撃で怪人達を焼き尽す。

「R xの仲間か。

しかし…こいつ、自分で『正義の戦士』と名乗るか…ずいぶんと面の皮の厚い奴らしいな…」

クロノはストロンガーの名乗りに不快感を面にする。

理想が一度擦りきれたクロノからすれば、ストロンガーの名乗りは戯れ言にしか聞こえないだろう。

あれはストロンガーが

「そうあれ」

と己に課した誓いであると同時に呪いの言葉である事などクロノの慮外の事であるから。

アースラのブリッジでモニターを見続けるスタッフの前で二人の仮面ライダーは怪人達を駆逐していく。

拳が、蹴りが、怪人の四肢を砕き、もぎ取り、頭を粉碎する。

致命傷を負った怪人は爆発しその骸を消滅させる。

敗れ去った者は死体も残らない、

「生きるか死ぬか」

しかない闘いにそれを見る者達は恐怖と不快感を覚える。

何故なら、これこそが

「管理局が無くそうとしている闘い」

「質量兵器戦」

そのものであるからだ。

歴史的、文化的な背景、政治的な理由等諸々があるが

「魔法戦ならば人死に出さずに戦える」

事が管理局が質量兵器を否定する理由である。

その魔法で勝てなかった相手を圧倒しているのは、その力の源を相手と同じくする異形。

彼らにそんなつもりが無くとも、その行いは魔法と管理局の理念を否定するものである。

そしてその拳の前に20体近くいた怪人達は倒れ伏し骸となり粉微塵に消え去る。

「残ったのはお前達だけだ！」

「弟分を痛め付けてくれた礼を、熨斗を付けて返してやるぜ！」

ウルスとザッハークを見据えてV3とストロンガーが啖呵を切った。

「…塵殺…皆殺しかよ…」

ブリッジクルーの誰かが呟いた言葉に、吐き気を覚えた何人かがモニターから目を逸らした。

「…？あれは！」

目を逸らす事無くモニターを見ていたクロノは、画面の隅に青いゲルに包まれて横たわるユーノを捉えた。

『逃げ遅れたのか？』

あのスライムモドキはR×か？』

モニターを見ていたクロノにあることが閃いた。

「艦長！協力者ユーノ・スクライアの救出を具申します！」

戦場への介入理由を見つけたクロノはリンディへと向かって意見具申する。

「…いいでしょう。」

ただし、ユーノ・スクライアの救出のみ許可し戦闘への介入は一切

禁止します。」

クロノの考えなどお見通しのリンディが釘を刺す。

体勢は決しているようだしR xを適当な理由をつけて救出すれば良いかと思っているクロノはそれに首肯し

「了解しました。

ユーノ・スクライアの救出に向かいます。」

転送ポートへと駆け出していった。

V3はウルスとストロンガーはザッハークと相対していた。

「仕方ナシニ来タ戦場デコノ様ナ敵ニマミエルトハ…我ハ神ニ愛サレテイル…」

悦にいった声でV3を見るウルスに

「…それはどうかな？

俺と会ったことを後悔するなよ。」

こう返してV3は拳を構えた。

「俺たちに怪人を差し向けて足止め、R x相手に毒と再生怪人。やり口が陰険だな、ヘビヤロー！」

怒声をあげるストロンガーにザッハークは余裕の態度を崩さない。

「策を練るのは将の務め。責められる筋合いではなかるっ?。」

「…再生怪人達に策を授けたか?」

俺らの手の内を見るための捨てゴマにしたろっが!。」

「…そこで怒るか…」

面白い御仁だ。」

「やかましい!行くぞ!!。」

そう叫んでストロンガーがザッハークに突っ込んで行った。

転移して来たクロノは横たわるユーノの側に駆け込む。

「おい、R x!こいつはどうしたんだ?。」

膝をつき荒い息をつくR xに尋ねると、

「負傷を回復させたが、血が足りない…医療設備のあるところにつれていってくれ。」

「わかった、すぐに転送するから君も…オイッ!何処に行く気だ!?。」

「加勢に行く…あいつらは危険すぎる相手だ…。」

「手負いの君が行ってどうなるモノでもないだろう！君も退避するんだ！！」

怒鳴り付けるクロノに

「言っただけだ…此方の件には手を出さないでくれと…そちらに怪我人を出しておいて言うのも心苦しいが、これ以上は関わらない方がよい。」

それよりも、今君が君が果たすべき事をやってくれ。」

そう言っただけで横たわるユーノを指差す。

暫しの逡巡の後

「…わかった。」

苦虫を噛み潰した表情で首肯するクロノを見て、RXは頷き返してクロノに背を向け戦場へと向かった。

V3とウルスは一進一退の攻防を繰り返していた。

リーチに勝るウルスが優勢に見えるが、手に持つ剣と違い腕に固定された刃であるため動きが限定される、そこを突いて反撃に出るV3。

突きに対して飛び込んで紙一重でかわす。

仮面の側面を削られつつも懷に飛び込んで左の拳を叩き込み、さかさ身を翻して左の背負い投げにつなげる。

手で持つ剣ならば手首の返しで行く手を阻む動きがあったかも知れないが、この刃では肘から動かさないと切り返しが効かないためV3を止めることが出来なかった。

投げ飛ばされて宙を舞うウルスに追撃の飛び蹴りを放つV3。

「甘イワ！」

しかし、ここでウルスはここまで隠していた掌の熱線砲をV3に放った。

「?しまった！」

空中で回避できぬタイミングで放たれた熱線の連射に直撃を喰らい地に落ちるV3に追撃で放たれる熱線。

胸部のコンバーターリングと背中と左足を焼かれて倒れたV3。

それでも跳ね起きるように身構えるV3を

「死ネエエエツ!!」

飛び込んできたウルスの刃が右肩から袈裟懸けに切り裂いた。

「うおおおっ!!」

繰り出されるストロングアのラッシュをザッハークは「ぬるり」と

言った擬音がつきそうな動きで回避していく。

決して速い動きではないのだが、無駄のない動きと骨が無いのかと思わせる関節の可動でストロンガーのラッシュの直撃を避けている。かする様なものはあるのだが、ザッハークの体皮のヌメリのある鱗がそれらを滑らせダメージが入らないのだ。

ならば、と放つ電気技は

「電パンチ！」

「…無駄だ。」

周囲に無数に展開している小さな時空魔方陣が滑り込み、電撃をまとった拳を受け止める。

そしてザッハークの攻撃は、頭部のメドウサのごとき無数のヘビが延び上がり周囲の時空魔方陣に飛び込む。

次いでストロンガーの周囲に展開している時空魔方陣から、もぐら叩きのごとく飛び出して毒牙を打ち込もうとするか毒のシャワーを浴びせかけてくるのだ。

「くっそぉ！」

慌てて回避するストロンガー。

攻撃速度はさほど速くない、しかし蛇の出現先である時空魔方陣が不規則かつ高速に動いており尚かつその数が多く、さらにはどの時

空魔方陣から出現するか判らないためストロンガーの強化された知覚と反射神経を持つてしても回避は難しい。

さらに吐きかけられる毒は強烈な腐食毒。

ストロンガーの体表やプロテクターも既に毒に焼かれて無数に腐食が見受けられる。

さらにザッハークは足元に時空魔方陣を展開、その魔方陣が空飛ぶ絨毯のごとくザッハークを空高く舞い上がらせ、さらに魔方陣の下面から地表目掛けて雷撃を無数にばらまく。

「！？ウオオオオッ！」

電気を操るストロンガーは当然のごとく高い耐電性を持つが、この雷撃は彼をしても危険すぎるモノであり回避を選択せざるを得ない。

「汚ねえぞ！降りて来やがれ！！」

毒づくストロンガーに

「我が名の由来は古代ペルシアの魔神。

怪力乱神を弄するは魔に携わるものの権能なれば、そう心得るがよかるう。」

そう返して更なる雷撃を撃ち込んだ。

「クソッタレエエエ！！」

雷撃を避けてストロンガーが砂浜を駆ける、駆ける、駆ける。

V3は切り裂かれたコンバーターラングの中から火花を飛び散らしつつも膝を折ること無く、ウルスをその緑の複眼で捉え続けていた。続けて突き込まれた刃の切っ先を両手で掴み食い止める。

両手のひらが刃に切り裂かれ血が噴き出す。

血の滑りで食い止めていた刃がV3の腹にめり込んでくる。

「往生際が悪イゾ。」

ココガ、貴様ノ終焉ノ地トナルノダ！」

「まだだっ！」

レッドボーンパワーッ!!」

胸部真ん中の赤い装甲下に埋め込まれた緊急エネルギー放出システムから、溜め込まれていたエネルギーが四肢に供給され瞬間的に人工筋肉のパワーが跳ね上がる。

刃が押し返され、互いの力が拮抗し動きが止まる。

その時、

「アクロバットバーン！」

前輪を跳ね上げたアクロバッターが横からウルスに襲いかかる。

勝利への興奮から僅かにおろそかになった周囲への警戒の隙を突いたR xの援護攻撃にウルスは一瞬動きが止まり、その後回避に入るうとして驚愕する。

V3の両手が刃を離さず回避のタイミングを潰したのだ。

そして、回避の機会を潰した後V3は刃を手放して巻き添えを避ける。

「キ、キサマーッ！」

次の瞬間ウルスはアクロバターにはね飛ばされて宙を舞ってから砂浜に叩きつけられた。

よろめきつつも立ち上がったウルスにV3の必殺技が迫る。

急降下からのキックが打ち込まれ、その反動で再び宙に舞うV3。

背面宙返りから再度の急降下キックが打ち込まれる。

あり得ない動きだが、改造人間の強力なパワーとマフラーと襟に見える空中姿勢制御システムが可能とするのだ。

「V3！反転キック！！」

二度目のキックを受けて吹き飛ばされたウルスは砂浜に叩きつけられ二転三転した後にようやく止まる。

もがく様にして立ち上がったその姿は既に致命傷を受けていることが明白であった。

左の義手は千切れて垂れ下がり、キックが命中した胸部は陥没しその口からは大量の血が溢れている。

未だ警戒を解かずその様を見据えるV3とRxの前で、ウルスは立ち上がり2人を見てニヤリと口元を歪めたように見えた。

そして次の瞬間、立ったまま大爆発を起こし爆炎の中に消えていった。

ストロンガーを追い回していたザッハークは彼方で起きた爆音にその動きを止める。

「オオ…何と…ウルス卿が倒れたのか？」

ストロンガーに降り注いでいた雷撃が止まり周囲を飛び回っていた時空魔方阵も動きが止まる。

「今だっ！」

この機を逃さずストロンガーが動く。

電気を操る力、イオンクラフト効果を発生させ人工筋肉による跳躍力以上の高さまで舞い上がり、ザッハークの頭上を越えた高々度でイオンクラフトの効果を逆転させ前方回転からの急速落下に移る。

体内の発電機で数百万ボルトまで高められた高圧電流をまとい必殺のキックが繰り出される。

「ストロンガー！」

電ツキークック!!」

「何っ?しまった!!」

咄嗟に時空魔方陣を展開し受け止めるも、落雷のごとき高圧電流がギシギシと魔方陣を軋ませついに突き破った。

「ウツ!?ウオオオツ!!」

ストロンガーの蹴り足をくらい、時空魔方陣の突破に幾分か弱まったとはいえその身に落雷のごとき電流を打ち込まれ落下するザッハーク。

しかし落下する方向に時空魔方陣を出現させるとその中に飛び込み、地上に激突すること無くその姿を戦場から消した。

「チイツ!逃げられたか?」

着地したストロンガーは周囲を見渡し、さらに額の角のレーダー機<sup>カブト</sup>シヨック能を起動させザッハークの気配が無いことを確認してからようやく警戒をといた。

「ふつつ。あ、痛たた…」

毒に焼かれたり雷撃がかすめたりと全身無数に傷ついているが深刻なダメージではない。

片手をあげて無事を知らせるとストロンガーはV3とRXの方へと

歩き始めた。

「……うん？」

ユーノは目の前に映る柔らかい照明の灯りに軽く目をしばたいてから、少しクッションの硬いベッドから身を起こした。

おそらく管理局の医療施設らしく少し鼻を刺激する消毒用のオゾンの匂いに軽く顔をしかめてから現状を確認し始める。

記憶にあるのは、なのは達を移動魔法で転移ゲートの方に押しやって別れを告げたところまでだった。

その後強い衝撃を受けて意識が飛んでいた。

「…あの後、どうなったのかな…」

自分がこうしていると言うことはなのは達は無事だったのだろう。

しかし怪人軍団相手の闘いで、自分が見ていた限りでは負け戦であった。

ひどい話だが、ユーノは敗戦撤退中の次空航行艦の中なのかもと考えていた。

ふと隣を見ると、同じようにベッドに身を預けていた人物達がいって『彼女達』もちょうど目を醒ましたのかベッドから身を起こしていたところだった。

「…あ…おはよう…」

まだ頭が醒めきっていないのか惚けた挨拶をするユーノ。

「なのは…アリサ…すずか…」

「……………」

「……………」

「……………」

「…………えつと…」

「ユーノくんっ!？」

「ユーノーーッ!」

「ユ…ユーノくん……………」

なのはに飛び付かれ、わんわん泣かれ、アリサには泣かれながら両手でポカポカ叩かれた。

すずかは

「無事でよかった…」

と言ってから頭を抱き締められて、恥ずかしくてちょっと赤くなっていたら

「…心配かけてダメじゃないですか。」

そう呟いてから、頭をわし掴みにされてアイアンクローをかけられた。

「あたたたたたつ。

ちよつと、すずか！

やめて、とめてーっ！」

その声を聞いたアースラのスタッフが何事かと覗き込むなかで、ユ  
ーノはなのは達三人に揉みくちやにされていた。

### 第13話 鏖戦（後書き）

今回は幕間となり、様々な事の後始末となのは達が今後の方針を決定することになります。

そして、フェイトサイドの内幕も描かれていくことになる予定です。

設定資料？

怪人大百科（笑）

龍騎士Ⅱヴラド（ヴラドⅡドラクル） 年齢不詳

ドラゴンをモチーフとする改造魔人、本当にドラゴンを素材としたのか複数の生物のキメラなのかは不明。

吸血鬼に近い能力も持っており人間の血を吸って支配下に置いたり（相手が吸血鬼化したりはしない）、蝙蝠や狼等の使い魔的な端末を体から放ち操ることができる。

それらに自分のマトリクスを与えての緊急脱出も出来るが全身を使い魔にばらしての逃走、再構成のような便利な使い方は出来ない。性格は戦闘狂、死ぬか生きるかの闘いを好み結果自分が死ぬことになっても一向に気にしない。

意外と鷹揚な人物で、部下に無茶を言っただけ失敗したら殺すような真似はしたことがないので配下には慕われている。

デルザー軍団内でもその性格から顔が広い。

魔人体では、ブレス（プラズマ火球）と角からの雷撃と特殊重合金製の大剣を使う。

この大剣は300kg近い重量があり、これを片手で自在に操る剛力と高速での飛行能力が最大の武器である。

キャラクターのモチーフはいわゆる「吸血鬼」系のキャラクターで、「HELSING」のアーカードや「吸血鬼ハンター」シリーズの貴族など。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1568r/>

---

仮面ライダーBlackRx ~ジュエルシード編~

2011年11月16日18時33分発行